岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第197集

観音館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達に課せられた責務であると思います。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策となっております。特にも高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として多方面から期待もされるところであります。

このような保護保存と開発という相反する目的を有する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、県教委文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する処置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成２年度と平成４年度の２カ年に渡って行われた調査結果について収録したものであります。調査の結果、中世城館に伴う堀跡、平場、郭が発見され、貴重な資料を提供する事ができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御支援を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成６年１月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　工　藤　　巌

例　言

1．本報告書は、岩手県北上市和賀町煤孫５地割140－１ほかに所在する観音館跡の調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴い岩手県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。

　遺跡番号……ＭＥ64－2001　　遺跡略号……ＫＤ－90・ＫＮ－92

4．調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。

　平成２年４月17日～６月30日、4,300㎡、玉川英喜・熊谷博由

　平成４年４月15日～９月30日、4,240㎡、高橋義介・菅原敬悦・佐藤修一

5．室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

　平成２年12月４日～平成２年12月28日、玉川英喜

　平成４年11月１日～平成５年３月31日、高橋義介

6．本報告書の執筆は、Ⅰ．調査に至る経過を佐々木嘉直、他を高橋義介が分担をした。

7．鑑定と分析は、次の方々に依頼した。（敬称略）

　石質鑑定……佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）

　鉄製品の分析……赤沼英男（岩手県立博物館）

8．土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』を参考にした。

9．本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導とご教示をいただいた。（敬称略）

　沼山源喜治・本堂寿一・鈴木明美・浅田知世・杉本　良（北上市埋蔵文化財センター）

　千葉啓蔵（久慈市教育委員会）、桐生正一（滝沢村教育委員会）

10．本報告書に掲載した実測図の凡例については、Ⅲ．調査経過と調査方法等によった。

11．野外調査にあたっては、花巻市と北上市の方々にご協力をいただいた。

12．本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

〈目　次〉

序
例　言

〈本　文〉

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1．遺跡の位置 …… 2
　2．地形と地質 …… 2
　3．基本層序 …… 3
　4．周辺の遺跡 …… 6
Ⅲ．調査経過と調査方法 …… 7
　1．調査の経過 …… 7
　2．調査の方法 …… 8
　3．室内整理の方法 …… 8
Ⅳ．調査の結果 …… 11
　1．概要 …… 11
　2．縄文時代の遺構 …… 11
　3．平安時代の遺構と遺物 …… 12
　4．中世の遺構と遺物 …… 23
　5．その他の遺構 …… 47
　6．遺構外の出土遺物 …… 62
Ⅴ．まとめ …… 75
　付編1　観音館跡出土鉄製品の金属学的解析 …… 81

〈図　版〉

第1図　岩手県図における北上市の位置 …… 1
第2図　遺跡の位置図・地形区分図 …… 2
第3図　土層断面図 …… 3
第4図　周辺の遺跡位置図 …… 4
第5図　観音館跡遺構配置図 …… 9
第6図　1号陥し穴状遺構 …… 11
第7図　2号住居跡 …… 12
第8図　2号住居跡出土遺物(1) …… 14
第9図　2号住居跡出土遺物(2) …… 15
第10図　土坑(1) …… 17
第11図　土坑出土遺物 …… 18
第12図　焼土 …… 19
第13図　1号窯跡 …… 20
第14図　1号窯跡出土遺物(1) …… 21
第15図　1号窯跡出土遺物(2) …… 22
第16図　1号住居跡・出土遺物 …… 24
第17図　観音館跡全域図 …… 27
第18図　1～3号堀平面図 …… 31
第19図　1・2号堀断面図(1) …… 33
第20図　1・2号堀断面図(2) …… 34
第21図　1・2号堀断面図(3) …… 35
第22図　1・2号堀断面図(4) …… 36
第23図　3号堀断面図 …… 37
第24図　1号堀出土遺物 …… 39
第25図　3号堀出土遺物 …… 40
第26図　土墨(1) …… 42
第27図　土墨(2) …… 43
第28図　柱穴状土坑(三郭) …… 45
第29図　土坑(2) …… 47
第30図　焼土(2) …… 49
第31図　溝跡 …… 51
第32図　溝跡・出土遺物 …… 52

第33図　1～3号竪穴状遺構 …… 54
第34図　1号掘立柱建物跡 …… 57
第35図　2号掘立柱建物跡 …… 58
第36図　2号掘立柱建物跡出土遺物 …… 59
第37図　3号掘立柱建物跡 …… 60
第38図　4号掘立柱建物跡 …… 62
第39図　遺構外出土遺物(1) …… 65
第40図　遺構外出土遺物(2) …… 66
第41図　遺構外出土遺物(3) …… 67
第42図　遺構外出土遺物(4) …… 68
第43図　遺構外出土遺物(5) …… 69
第44図　遺構外出土遺物(6) …… 70
第45図　遺構外出土遺物(7) …… 71
第46図　遺構外出土遺物(8) …… 72
第47図　遺構外出土遺物(9) …… 73
第48図　遺構外出土遺物(10) …… 74

〈写真図版〉

写真図版1　調査区遠・近景 …… 91
写真図版2　調査区遠・近景 …… 92
写真図版3　2号住居跡 …… 93
写真図版4　1号窯跡 …… 94
写真図版5　1号住居跡 …… 95
写真図版6　1号堀(1) …… 96
写真図版7　1号堀(2) …… 97
写真図版8　1号堀(3) …… 98
写真図版9　1号堀(4) …… 99
写真図版10　1号堀(5) …… 100
写真図版11　1号堀(6) …… 101
写真図版12　1号堀(7) …… 102
写真図版13　2号堀(1) …… 103
写真図版14　2号堀(2) …… 104
写真図版15　2号堀(3) …… 105
写真図版16　3号堀(1) …… 106
写真図版17　3号堀(2) …… 107
写真図版18　3号堀(3) …… 108
写真図版19　土墨(1) …… 109
写真図版20　土墨(2) …… 110
写真図版21　土墨(3) …… 111
写真図版22　陥し穴状遺構・土坑 …… 112
写真図版23　焼土 …… 113
写真図版24　溝跡(1) …… 114
写真図版25　溝跡(2) …… 115
写真図版26　竪穴状遺構(1) …… 116
写真図版27　竪穴状遺構(2) …… 117
写真図版28　1号掘立柱建物跡 …… 118
写真図版29　2号掘立柱建物跡 …… 119
写真図版30　3・4号掘立柱建物跡 …… 120
写真図版31　2号住居跡出土遺物 …… 121
写真図版32　土坑・1号窯跡出土遺物(1) …… 122
写真図版33　1号窯跡出土遺物(2) …… 123
写真図版34　1号堀出土遺物 …… 124
写真図版35　3号堀・溝跡・2号掘立柱建物跡出土遺物 …… 125
写真図版36　遺構外出土遺物(1) …… 126
写真図版37　遺構外出土遺物(2) …… 127
写真図版38　遺構外出土遺物(3) …… 128
写真図版39　遺構外出土遺物(4) …… 129
写真図版40　遺構外出土遺物(5) …… 130
写真図版41　遺構外出土遺物(6) …… 131
写真図版42　遺構外出土遺物(7) …… 132

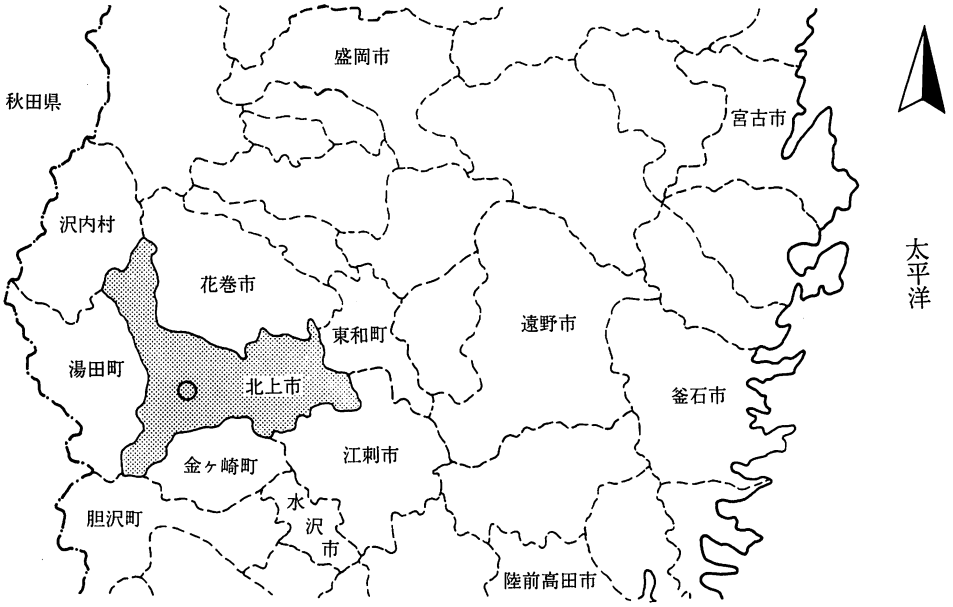
Ⅰ．調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長107㎞の高速道路である。このうち第９次・第10次施工命令区間は、北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9㎞である。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行っており、昭和62年４月13日付け「仙建北工第35号」による依頼をうけて、分布調査結果を同年５月25日付け「教文第117号」により日本道路公団仙台建設局に回答し、その取扱について協議が重ねられ、止むを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

発掘調査の実施については、昭和63年以降岩手県教育委員会が発掘事業を日本道路公団仙台建設局に照合し回答を受けたのち、日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の３者の協議を経て、埋蔵文化財センターが担当することとした。事業着手後に調査の変更がある場合もその都度協議をしながら進め、岩手県教育委員会の調整を経て事業計画を変更して進めることとした。

本報告書の観音館跡の調査は、平成２年３月２日付け「教文第731号」による平成２年度埋蔵文化財調査事業の通知を受け、平成２年４月１日付け委託契約により調査に着手したものである。また、一部買収未了の部分を次年度以降の継続調査とした。平成４年度の調査は、平成４年２月12日付け「教文第910号」による事業の通知を受け、平成４年４月１日付け契約により着手したものである。



○は観音館跡の位置

第１図　岩手県における北上市の位置

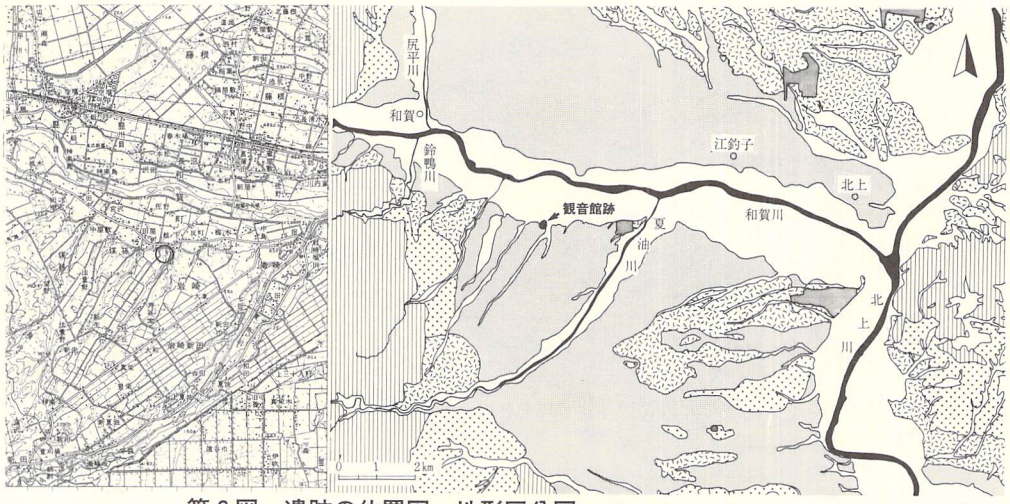
Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．遺跡の位置

観音館跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南西側約３㎞に位置している。国土地理院発行の５万分の１地形図【北上】の図幅に含まれ、北緯39度16分37秒、東経141度１分11秒付近にあたる。遺跡の所在する北上市和賀町は県都盛岡市から南方約64㎞、県南部の西側にあたる。市の東側を北上川が南流し、南東部で東流する和賀川と合流する。東側は江刺市・東和町、西側が湯田町・沢内村、南側が金ケ崎町・胆沢町、北側が花巻市の２市４町１村と隣接し、総面積は437.34㎢である。

２．地形と地質

県内を南北にのびる北上低地帯は、盛岡・白河構造線と呼ばれる大規模断層に規定された構造の盆地である。北上市はこの低地帯のほぼ中央部に位置し、東側には古生層、中生層からなる北上山地、西側には第三紀以降の火山噴出物を主要構成層とする奥羽山脈がそれぞれ南北に連なっている。北上低地帯の最大河川である北上川は、県北部の七時雨山麓にその源を発し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ全長249㎞、流域面積は10,150㎢の東北地方有数の河川である。また、盛岡市以北を上流、盛岡市～前沢町間を中流、前沢町以南を下流の３区域に区分されている。北上川は構造線に平行して南流するものの、流路は低地帯の東側へ大きく偏るために、扇状地や段丘の発達は奥羽山脈側に接する西側が良好である。これらの扇状地は本流や支流で開析され、良く発達した河岸段丘となっている。東側では北上山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が見られるだけである。



第２図　遺跡の位置図・地形区分図

北上川中流域における段丘は、中川ほか（1963）が上位から西根段丘、村崎野段丘、金ケ崎段丘に分類している。

西根段丘は開析が進み、北上低地帯では残丘状を呈し、大部分は東西山地の山麓部に分布をしている。上部には火山灰層を載せ、古いものから一首坂火山灰、前沢火山灰、黒沢尻火山灰と命名されている。

村崎野段丘は層厚20～30cmの飯豊礫層と呼ばれる砂礫層で構成され、その上部に黒沢尻火山灰を載せている。

金ケ崎段丘は最も広範囲に分布をしており、扇状地形を良く示している。構成層は礫層（瘤木礫層）で、佐藤（1982）は和賀川左岸に局部的に分布するものとその他に２細分している。

これらの段丘は本邦の段丘模式地となっている南関東の多摩段丘－西根段丘、下末吉段丘－村崎野段丘、武蔵野段丘－金ケ崎Ⅰ段丘、立川段丘－金ケ崎Ⅱ段丘に対比されるものである。

本遺跡は、奥羽山脈の和賀岳（標高1,440m）に源を発し北上川水系最大の支流である和賀川（全長75km）右岸の河岸段丘（金ケ崎Ⅰ段丘）上に立地している。段丘の東側は芦谷地沢に開析され、全体が北東側に舌状に張り出している。標高は123～128mで、南東から北西にかけて低位となり、和賀川の沖積面との比高は約40mである。調査区の現況は水田・畑地・草地・山林等である。

〈参考文献〉

中川久夫・大池昭二・他（1963）：北上川中流沿岸の第四系および地形－北上川流域の第四紀地史(2). 地質学雑誌第69巻，219－227

岩手県（1976）：北上山系開発地域，土地分類基本調査（北上）

中川久夫・他（1981）：第四系『北上川流域地質図（二十万分之一）』長谷地質調査事務所

３．基本層序

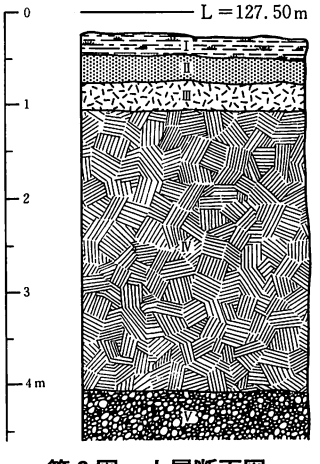
第３図は調査区西側（ＡⅢ区）で観察された土層断面の模式図である。西側地域は以前改田造成工事が行われており、東側地域との相違が認められる。

Ⅰ層　黒褐色土（10YR2/2）表土及び耕作土で、層厚は10～20cmである。シルト質で全体に堅く締まっている。

Ⅱ層　暗褐色土（10YR1.7/1~2/1）シルト質で、層厚は10～30cm前後である。

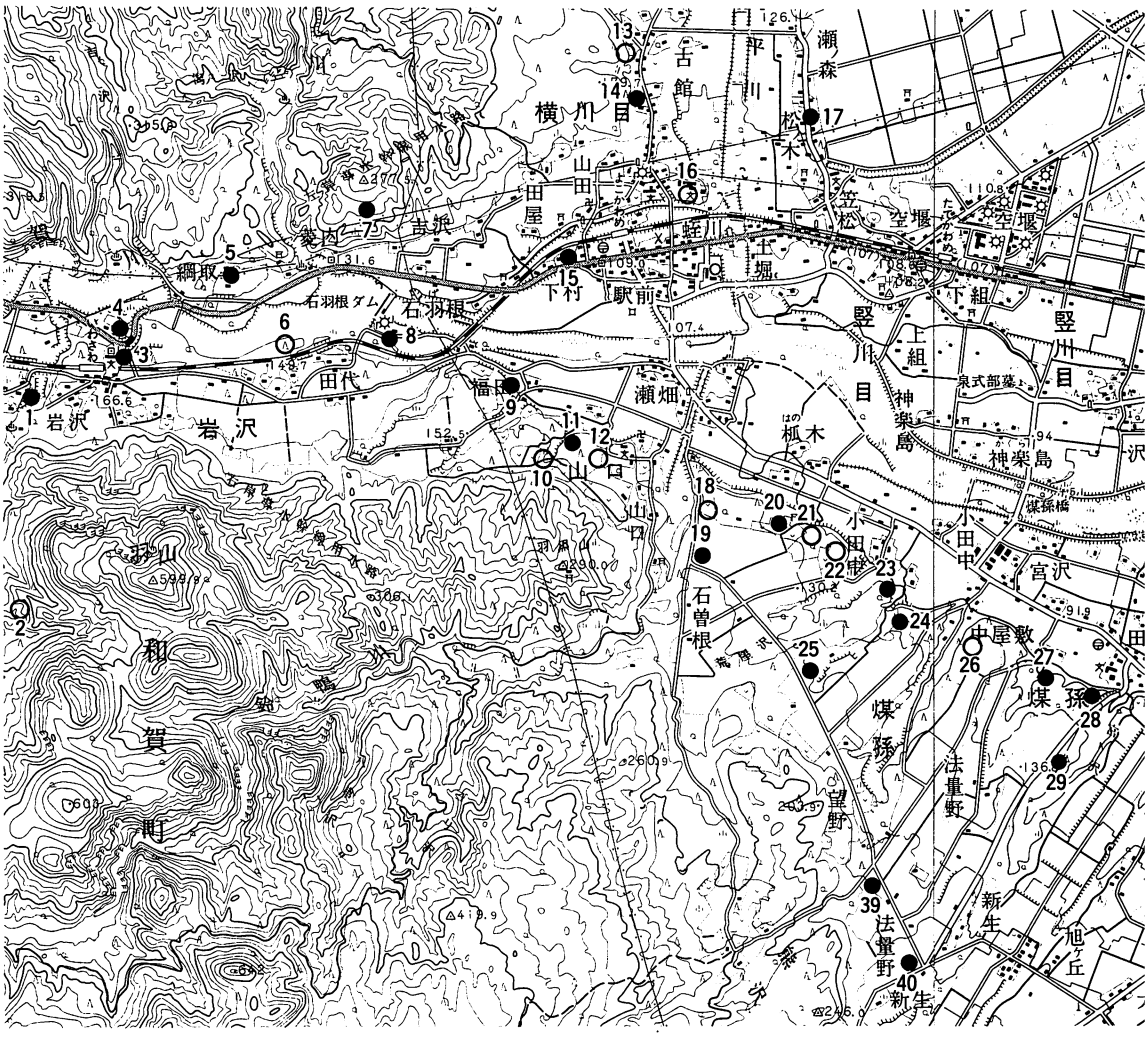
Ⅲ層　暗褐色土（10YR3/3）層厚は10～30cmである。シルト質で東側と南側で一部かけるカ所がある。

Ⅳ層　明オリーブ灰色～明黄褐色粘土（2.5GY7/1～2.5



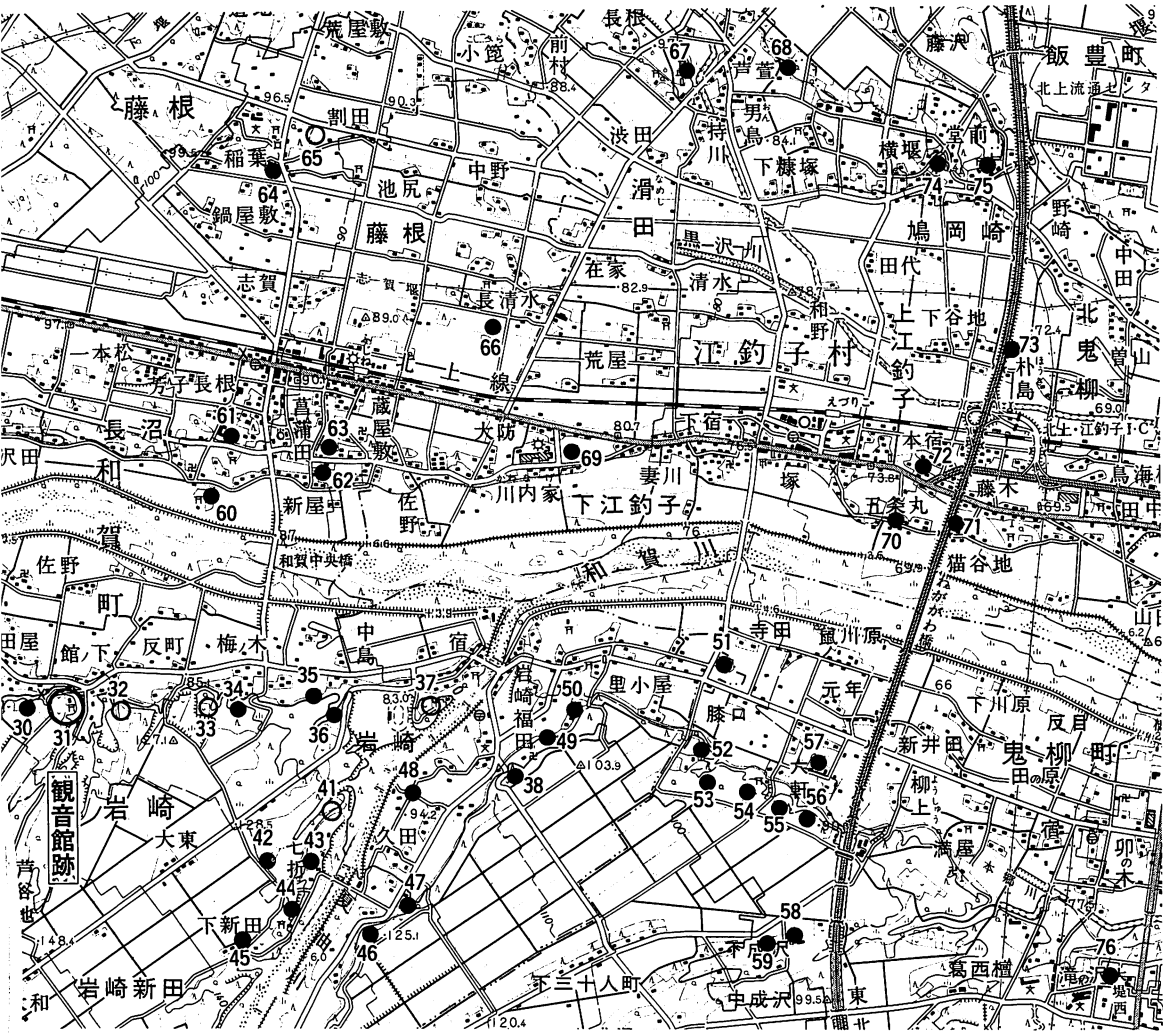
第３図　土層断面図

第４図　周辺の遺跡位置図



No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	法ケ松Ⅰ	散布地	縄文土器・石器	岩沢	22	月館	館跡散布地	堀、土塁、磁器、縄文土器	煤孫
2	水沢館	館跡	中世	岩沢	23	石曽根	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器・石器、弥生土器、土師器	煤孫
3	岩沢Ⅰ	散布地	縄文土器（後・晩期）	岩沢					
4	下岩沢Ⅰ	集落跡	土坑、縄文土器、弥生土器	岩沢	24	本郷	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器（中期）・石器、土師器、須恵器	煤孫
5	鳥谷森	散布地	縄文土器（晩期）・石器	横川目					
6	岩沢館	館跡	縄文土器、陶器	下仙人	25	荒屋沢	散布地	縄文晩期	煤孫
7	愛宕山	散布地	縄文土器・石器	横川目	26	林崎館	館跡	縄文土器、中世	煤孫
8	田代	集落跡	縄文土器（晩期）・石器	山口	27	中屋敷	散布地	土器、土師器	煤孫
9	福田	散布地	縄文土器（中・後期）・石器	山口	28	法量野Ⅰ	散布地	石器	煤孫
10	馬場館	館跡	中世	山口	29	法量野Ⅱ	散布地	縄文土器・石器	煤孫
11	福田塚	塚		山口	30	煤孫	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器（中期）、土師器、須恵器	煤孫
12	山口館	館跡	中世	山口					
13	八幡館	館跡	縄文土器（晩期）、弥生土器・石器	横川目	31	観音館	館跡	堀、土塁、土師器	煤孫
					32	上反町	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	煤孫
14	館森	散布地	縄文土器（中・後期）・石器	横川目	33	兵庫館	散布地	縄文土器・剥片石器	岩崎
15	大橋	散布地	縄文晩期注口土器・石器	横川目	34	梅ノ木台地Ⅱ	集落跡	弥生、土師器	岩崎
16	蛭川館	館跡	堀、土塁、縄文土器（中期）	横川目	35	梅ノ木台地Ⅰ	集落跡	縄文土器	岩崎
17	瀬の森古墳群	古墳群	古銭、人骨	横川目	36	岩崎城西	散布地	溝跡、縄文土器、陶器	岩崎
18	田中館	館跡	土師器、石器	山口	37	岩崎城	館跡	縄文土器、銅鉄銭、鉄塊	岩崎
19	八幡野Ⅰ	散布地	縄文土器	煤孫	38	岩崎台地遺跡	集落跡	竪穴住居跡、土師器、須恵	岩崎
20	八幡野Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	山口	39	望野Ⅰ	散布地	縄文土器（中期）・石器	煤孫
21	八幡館	館跡散布地	縄文土器、中世	山口	40	望野Ⅱ	集落跡	旧石器、縄文土器（前後期）	煤孫

1：50,000 北上・川尻



No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
41	七折館	館跡	中世	岩崎	60	菖蒲田古墳群	古墳群	土器、厥手刀	長沼
42	花會根上	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎	61	長沼古墳群	古墳群	厥手刀、勾玉、切子玉	長沼
43	七折	集落跡	縄文土器、石器、紡錘車	岩崎	62	念仏車	散布地	縄文土器、弥生土器	長沼
44	花會根	散布地	須恵器	岩崎	63	蔵屋敷	集落跡	弥生土器、土師器	江釣子
45	新田Ⅰ	散布地	石碑、土師器、須恵器	岩崎	64	稲葉Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	藤根
46	八天板	散布地	土師器、須恵器	岩崎	65	蓮見館	館跡	縄文土器、土師器、須恵器	藤根
47	久田Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	岩崎	66	長清水Ⅰ	散布地	縄文土器（前期末）、土師器	藤根
48	寺村	散布地	縄文土器、土師器	岩崎	67	新平	駅家跡	縄文、弥生土器、土師器	江釣子
49	小寺	散布地	土師器、須恵器	岩崎	68	芦萱	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
50	小平	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎	69	下江釣子羽場	集落跡	土師器	江釣子
51	里小屋	散布地	土師器、須恵器	岩崎	70	五条丸古墳群	古墳群	土師器	江釣子
52	上鬼柳Ⅰ	集落跡	弥生竪穴住居、土師器	上鬼柳	71	猫谷地古墳群	古墳群	厥手刀、勾玉、土師器	江釣子
53	上鬼柳Ⅱ	集落跡	竪穴住居跡（平安）	上鬼柳	72	本宿	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
54	上鬼柳Ⅲ	集落跡	竪穴住居跡（縄文・平安）、掘立柱建物跡、土師器窯跡	上鬼柳	73	下谷地	散布地	平安	相去
					74	鳩岡崎高台	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
55	上鬼柳Ⅳ	集落跡	土坑（縄文）、竪穴住居跡（平安）、畑跡（平安）	上鬼柳	75	鳩岡崎上の台	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
					76	滝ノ沢	集落跡	土坑、縄文土器（中期）	相去
56	柳上	集落跡	縄文土器、竪穴住居跡（平安・縄文）	鬼柳					
57	六軒	散布地	縄文土器（晩期）	鬼柳					
58	下成沢Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	成沢					
59	成沢	集落跡	土師器、須恵器	成沢					

YR6/6）基盤層で層厚は2.5～3mと厚く堆積をしている。

Ⅴ層　灰～オリーブ灰色粘土（N6/0～2.5GY6/1）砂礫層で、径10～30cm大の亜円礫を多く含む。一部に水酸化鉄斑の帯状の堆積が見られる。層厚は確認していない。

4．周辺の遺跡

第4図の遺跡分布図を概観すると、そのほとんどは和賀川の丘陵縁辺部や低・中位段丘上及び開析された小支谷に沿って集中している。縄文時代～平安時代の遺跡に関してはその傾向が顕著である一方、中世の城館跡は丘陵地の縁辺地の深く入り込んだ沢や急崖を利用している遺跡が多い。

旧石器時代の遺跡は僅かで、(7)愛宕山遺跡から4カ所の石器集中区と土坑を1基検出している。遺物は(24)本郷遺跡からナイフ形石器、(67)新平遺跡から尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は前期～中期に属するものが多くみられる。集落は前期末葉大木6式～中期初頭大木7式期が(30)煤孫遺跡・(35)梅ノ木台地Ⅰ遺跡、中期大木8式期が(26)林崎館遺跡・(24)本郷遺跡で検出されている。県内でも検出例が少ない早期末葉のフラスコ形土坑、晩期末葉の大洞A′式期の竪穴住居跡は(23)石曽根遺跡から検出している。

弥生時代に関連する遺跡の分布は希薄であるが和賀川左岸に3遺跡、右岸に10遺跡確認されている。初頭頃の竪穴住居跡を検出したのは(52)上鬼柳Ⅰ遺跡7棟、(53)上鬼柳Ⅱ遺跡1棟である。同時期の土坑を検出したのは(27)中屋敷遺跡、(32)上反町遺跡、(55)上鬼柳Ⅳ遺跡等である。土器は初頭の谷起島式が(62)念仏車遺跡・(63)蔵屋敷遺跡、後期の天王山式が(35)梅ノ木台地Ⅰ遺跡・(36)岩崎台地西遺跡・(72)本宿遺跡、前～中期の埋葬施設と考えられる埋設土器が(34)梅ノ木台地Ⅱ遺跡から出土している。

古墳は和賀川左岸に奈良時代の(17)瀬の森古墳群、(60)菖蒲田古墳群、(61)長沼古墳群、(70)五条丸古墳群、(71)猫谷地古墳群が分布する。右岸では少なく(38)岩崎台地遺跡群から古墳時代末期の古墳が7基検出している。

平安時代の遺跡は和賀川右岸に集中し、大規模な集落も確認されている。(38)岩崎台地遺跡群では117棟の竪穴住居跡・井戸跡2基、(54)上鬼柳Ⅲ遺跡でも22棟の竪穴住居跡と同時期の掘立柱建物跡12棟が検出している。他に(20)八幡野Ⅱ遺跡9棟、(30)煤孫遺跡13棟等がある。(52)上鬼柳Ⅰ遺跡からは火葬墓に伴う蔵骨器を出土している。

中世城館の分布状況を地域的にみると、和賀川右岸では段丘縁部に近隣して立地する傾向があるのに対し、支流である尻平川右岸や夏油川では散在しているという特徴が見られる。複数の郭からなる複郭型の城館は(18)田中館跡、(26)林崎館跡、(31)観音館跡、(37)岩崎城跡等である。(33)兵庫館跡からは、薬医門跡2基と土橋施設が検出されている。また、岩崎城跡は当地方を代表する岩崎氏の居館である。

Ⅲ．調査経過と調査方法

1．調査の経過（平成４年度）

４月15日（水）発掘器材を搬入し現場設営を行う。午後日本道路公団と立木伐採の件について現地で立会を行う。

４月17日（金）雨天のため野外作業は中止とする。

４月20日（月）雑物の撤去作業を開始する。

４月27日（月）調査区内における立木の伐採がほぼ終了する。午後に切り替え道路部分の調査範囲について日本道路公団・県教委文化課と現地で立会を行う。

４月30日（木）伐採木の枝葉除去作業と焼却を開始する。

５月６日（水）伐採木の搬出が堀側の一部を除き終了する。

５月11日（月）館跡の地形測量基準点設置作業を開始する。

５月13日（水）遺跡の調査前の近景写真撮影を行う。

５月18日（月）伐採木の枝葉除去作業が終了する。

５月19日（火）セスナ機による館跡の空撮を行う。試掘作業を開始し、延べで５日間行う。

５月26日（火）１号堀の粗掘りを開始する。

６月２日（火）調査区の基軸線の設置を行う。

６月９日（火）調査区南側ＢⅣ区の粗掘りを並行して開始する。

６月16日（火）１号堀の断面写真撮影と実測を開始する。

６月26日（金）三郭平場の粗掘りと遺構検出を並行して開始する。

７月２日（木）ベルトコンベヤー８台を搬入し、１号堀の掘り上げを開始する。

７月13日（月）堀の盛土除去と一部粗掘りは重機（ユンボ）を使用することとし、８月31日まで延べ25日間稼働した。

７月20日（月）１号堀の平面実測を開始する。

７月27日（月）２号堀の掘り上げを開始する。

７月30日（木）２号堀の断面実測と写真撮影を行う。

８月17日（月）３号堀の掘り上げを開始する。

９月２日（水）３号堀の断面実測と写真撮影を行う。

９月４日（金）三郭平場の精査と実測を開始する。

９月10日（木）県教委文化課の調査終了確認を受ける。

９月30日（水）野外調査を終了する。

10月７日（水）発掘器材を搬出して現地を撤収する。

2．調査の方法

(1)調査区の設定　調査区の区画設定は任意の基準点１・２を設置し、２点間を見通す直線と基準点を通りこれに直交する直線を座標の基軸線とした。各基準点の平面直角座標第Ｘ系による成果は次のとおりである。基準点１を原点にして40×40ｍの大区画を設定し、東西にローマ

基準点１　Ｘ＝－80,220.000ｍ、　Ｙ＝＋16,040.000ｍ、　Ｈ＝127.170ｍ

基準点２　Ｘ＝－80,220.000ｍ、　Ｙ＝＋16,080.000ｍ、　Ｈ＝127.493ｍ

数字、南北にアルファベットを付した。さらに４×４ｍの小区画に細分し、東西に数字の０～９、南北にアルファベットのａ～ｊを付した。調査区の名称はアルファベット・ローマ数字・数字の組合わせでＡⅠａ０・ＢⅡｂ０区というように呼称した。

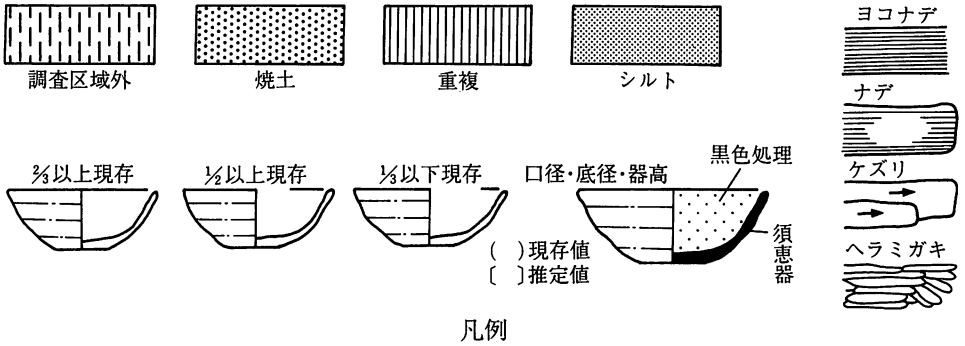
(2)粗掘り・精査　雑物の除去と刈払い作業から開始し、試掘トレンチ、粗掘り、遺構検出の順に進めた。表土及び堀の排土搬出にはベルトコンベヤーを８台と重機を使用して行った。

(3)実測・写真撮影　実測は簡易遣り方測量を設定して行ったが、一部平板測量も併用した。遺構実測図は20分の１を基本としている。写真撮影は６×７㎝判１台（モノクロ）と35㎜判２台（モノクロ・リバーサル）を使用して行った。６×７㎝判については省略した遺構もある。

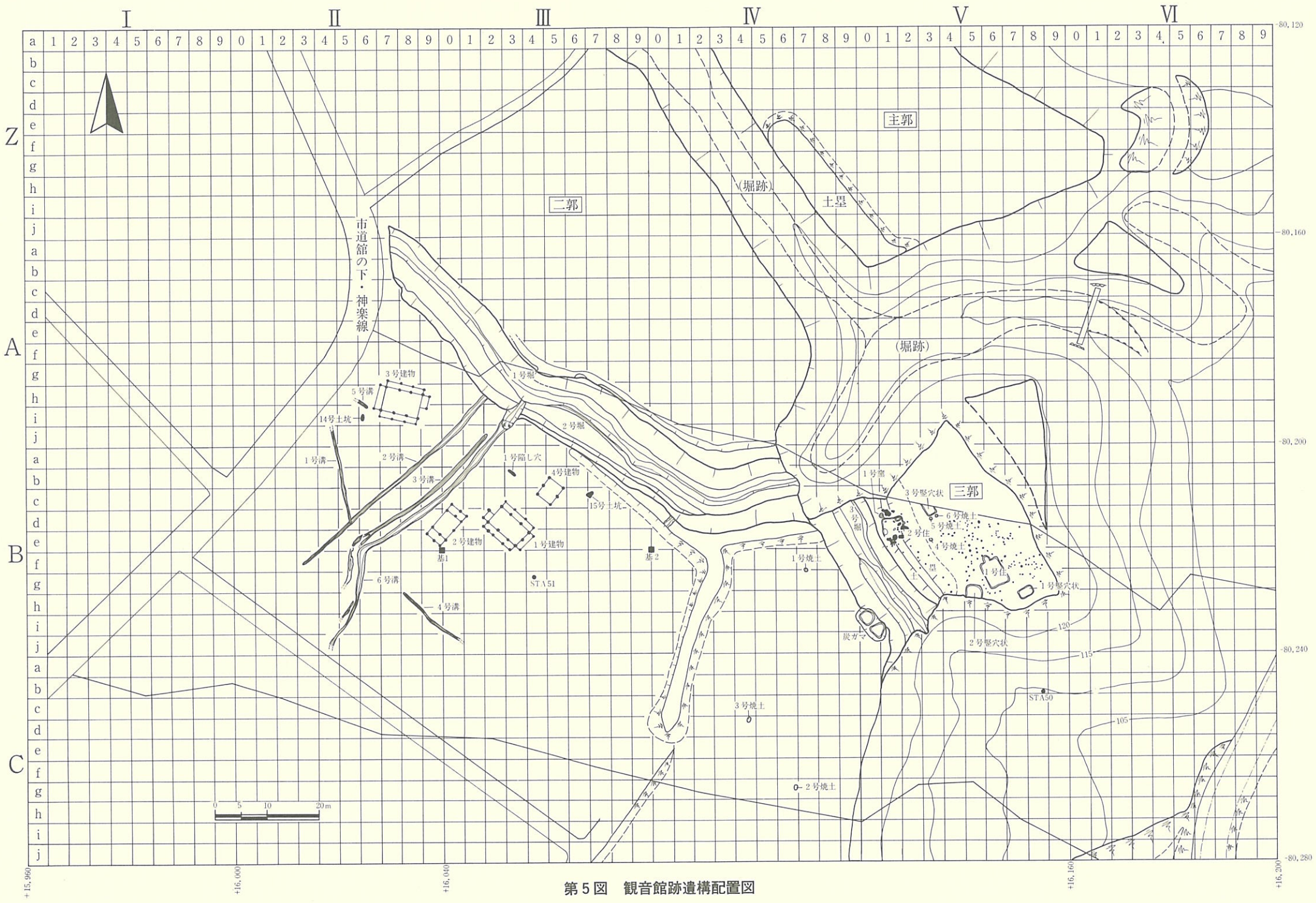
3．室内整理の方法

(1)作業手順　室内整理は現場で残った遺物の注記から開始し、遺物ごとの仕分け、土器の接合復元、石膏入れ、遺物の実測、土器の拓本、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版作成の順に作業を進めた。また、これらの作業と並行して遺物の計測、諸鑑定、原稿の執筆を行い報告書に掲載した。

(2)図面　遺構図版の縮尺は焼土20分の１、土坑40の１、竪穴住居跡60分の１などである。遺物図版の縮尺は、石器・鉄製品２分の１、土器・拓影３分の１を原則としているが、器種の大小に応じて適宜縮尺を変えてスケールを付した。図版中の調査区域外、焼土、重複、シルトは次のようなスクリントーンを使用している。また、石はＳ、土器はＰ、小穴・柱穴はP_1・P_2…で図示した。その他は下記の凡例図版による。



凡例



第５図　観音館跡遺構配置図

Ⅳ．調査の結果

1．概要

平成２・４年度に検出された遺構は縄文時代の陥し穴状遺構１基、平安時代の竪穴住居跡１棟・土師器の窯跡１基、中世の竪穴住居跡１棟・城館に関連する三郭（平場）・堀跡３条・土塁２基、土坑15基、焼土９基、溝跡６条、竪穴状遺構３棟、掘立柱建物跡４棟、柱穴状土坑158基、近世以降の炭窯２基等である。

出土遺物の総量は大コンテナ５箱余である。大部分は平安時代の土師器の坏と甕で占められている。このほかに縄文時代の土器・石器、須恵器、土製品、刀子、鉄鏃、砥石、硯、坩堝、古銭（元豊通寶、寛永通寶）、陶磁器類が出土している。縄文時代と中世に伴う遺物の出土量は僅かである。

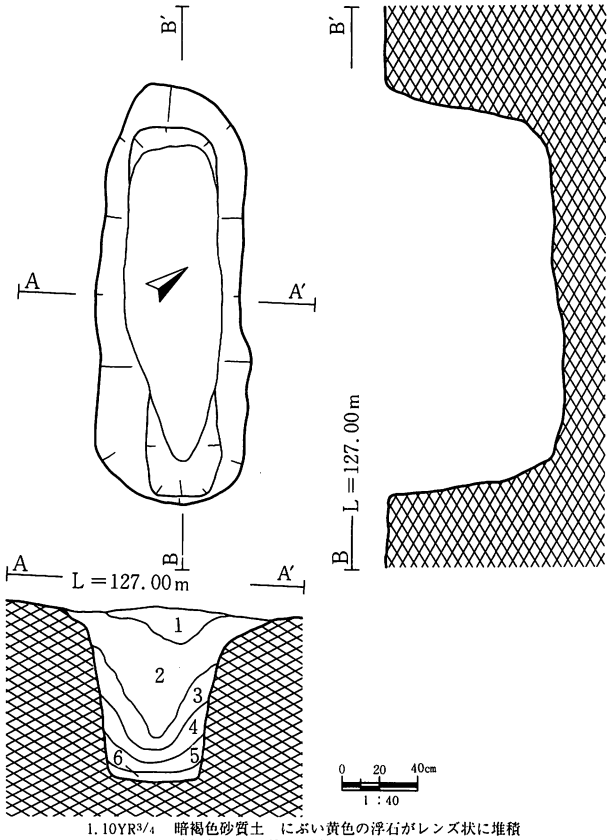
2．縄文時代の遺構

(1)陥し穴状遺構

１号陥し穴状遺構（第６図）

調査区の西側（ＢⅢａ３区）に位置している。平面形は北西～南東方向に長軸を有する溝状を呈し、規模は開口部が220×76㎝、底部が170×52㎝、深さが中央部で93㎝を測る。断面形は短軸方向が開口部のやや広がるＵ字形である。主軸方向は北に対して約56度西偏する。底部は中央部付近に多少凹凸が見られる。

埋土はシルト質を主体とする６層で構成されている。上位はにぶい黄色浮石を含む暗褐色砂質土、中位が暗褐色シルト質土と黒色土の混合土層、下位は壁崩壊落土の明黄褐色粘土と黒褐色粘土質土の互層である。いずれも開口部からの流れ込みの自然堆積の様相を示している。時期を



1. 10YR3/4　暗褐色砂質土　にぶい黄色の浮石がレンズ状に堆積
2. 10YR3/3　暗褐色シルト質土　黒色土の混合土層
3. 10YR2/1　黒色シルト質土　黒褐色の混合土層
4. 2.5YR6/6　明黄褐色粘土質土　黒褐色土が斑状に堆積
5. 10YR6/6　明黄褐色粘土質土
6. 10YR2/2　黒褐色粘土質土　明褐色土が混入

第６図　１号陥し穴状遺構

決定する遺物は出土していないものの、形態等の類例から縄文時代に属する陥し穴状遺構と推測される。

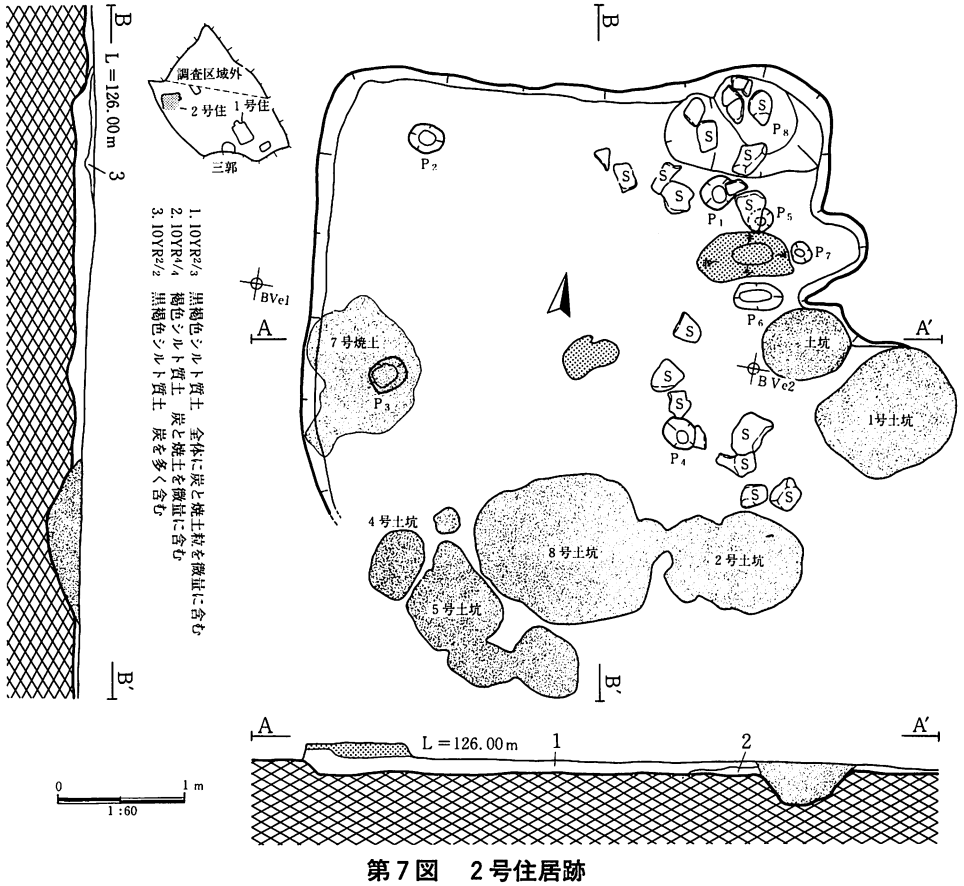
3．平安時代の遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

2号住居跡（第7～9図、写真図版3・31）

調査区東側三郭（ＢＶｄ１区）の西端部に位置し、3号堀東側土塁の下位から検出している。遺構の南半部は削平が著しく、また土坑や焼土と重複することから平面形と規模の詳細が不明である。検出された規模は東西辺4×南北辺（3.7）ｍで、遺存する形状から隅丸方形状を呈すると推測される。

埋土は炭と焼土粒を混入する黒褐色シルト質土主体の3層に大別され、全体的に堅く締まっている。壁は削平のため南壁側が不明であるものの床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高



第7図　2号住居跡

は東壁11cm、西壁10cm、北壁12cmを測る。床面はほぼ平坦で堅く締まっている。柱穴はP_1～P_4の4基で、東西方向に長い長方形状の柱穴配置を示している。平面形はいずれも楕円形状を呈し、規模は径23～30cmである。埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成されている。北東壁

P_{NO}	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
直径cm	28×23	28×24	30×25	27×23	20×18	38×21	17×14	126×78
深さcm	24	23	6	32	12	17	6	18

コーナーからP_8の土坑が検出されている。平面形は楕円形で、規模は126×78cm、深さ18cmである。埋土は暗褐色シルト質土と焼土粒の混合土で、上部には径10～25cm大のカマド袖部の芯材に使用した亜角礫が数個埋設している。

カマドは東壁側の北東コーナー寄りに設置されている。煙道部と煙出し部は削平され、燃焼部の焼土が僅かに遺存するだけで本体規模・構造が不明である。カマド南北側の床上には本体部に使用された亜角礫が散在している。燃焼部は壁から55cm内側に位置し、規模は72×35cm、層厚10cmの楕円形状を呈する焼土が形成されている。燃焼部の南北側にはP_5・P_6の小穴があり、位置的にカマド袖部の芯材痕と推測される。P_7の小穴は支脚痕で、規模が17×14cm、深さ6cmを測る。

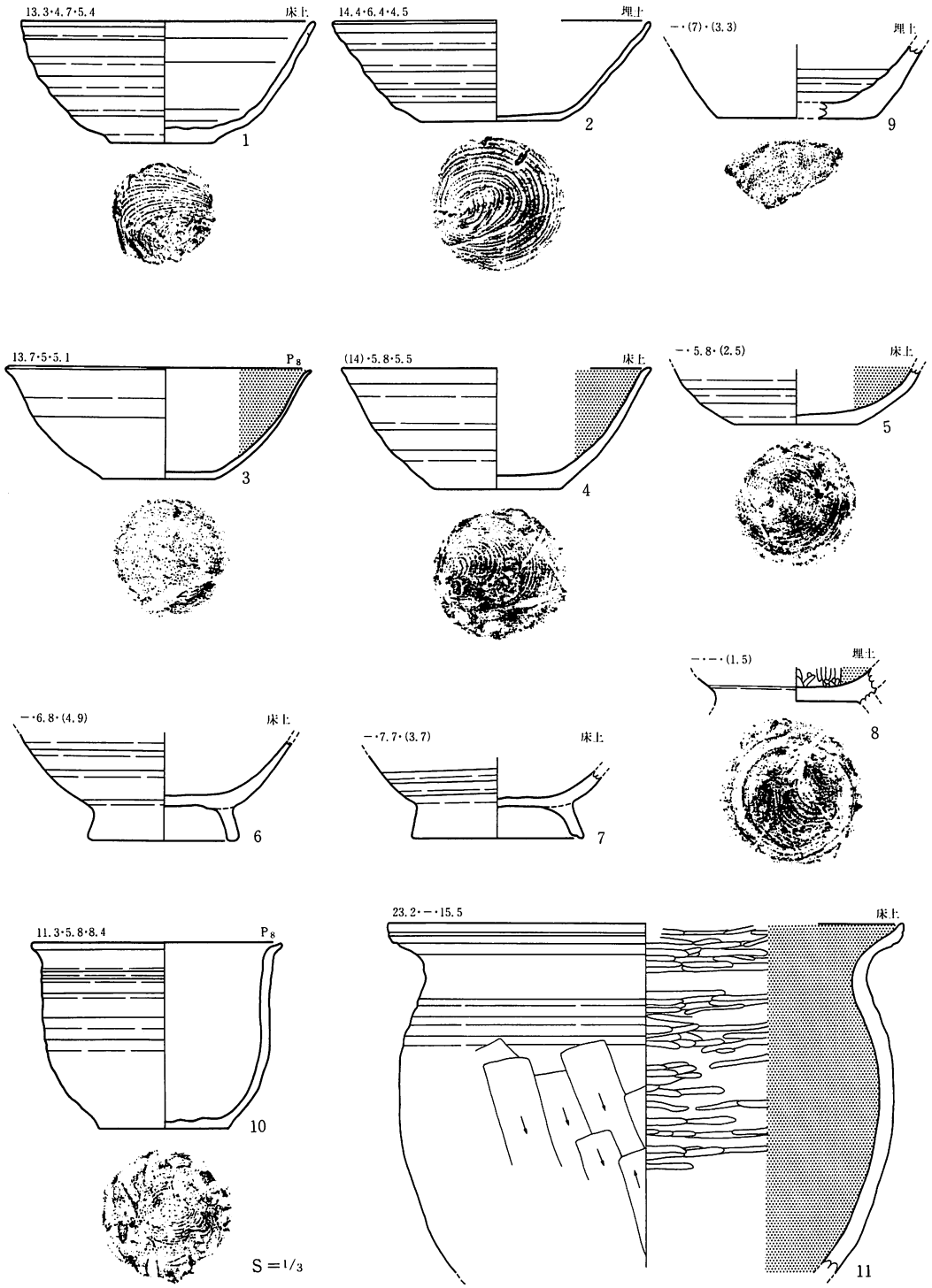
遺物はカマド周辺と土坑から土師器、須恵器、土製支脚、石器が出土している。土師器の大部分は破片で占められ、図化できたのは11点ほどである。

1～8はロクロ使用の土師器の坏である。1は床上から出土のもので、口縁部は外傾して立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切りで、焼成は良好で胎土も緻密である。2の口縁部も1と同様に外傾し、口唇部は丸みをもっている。

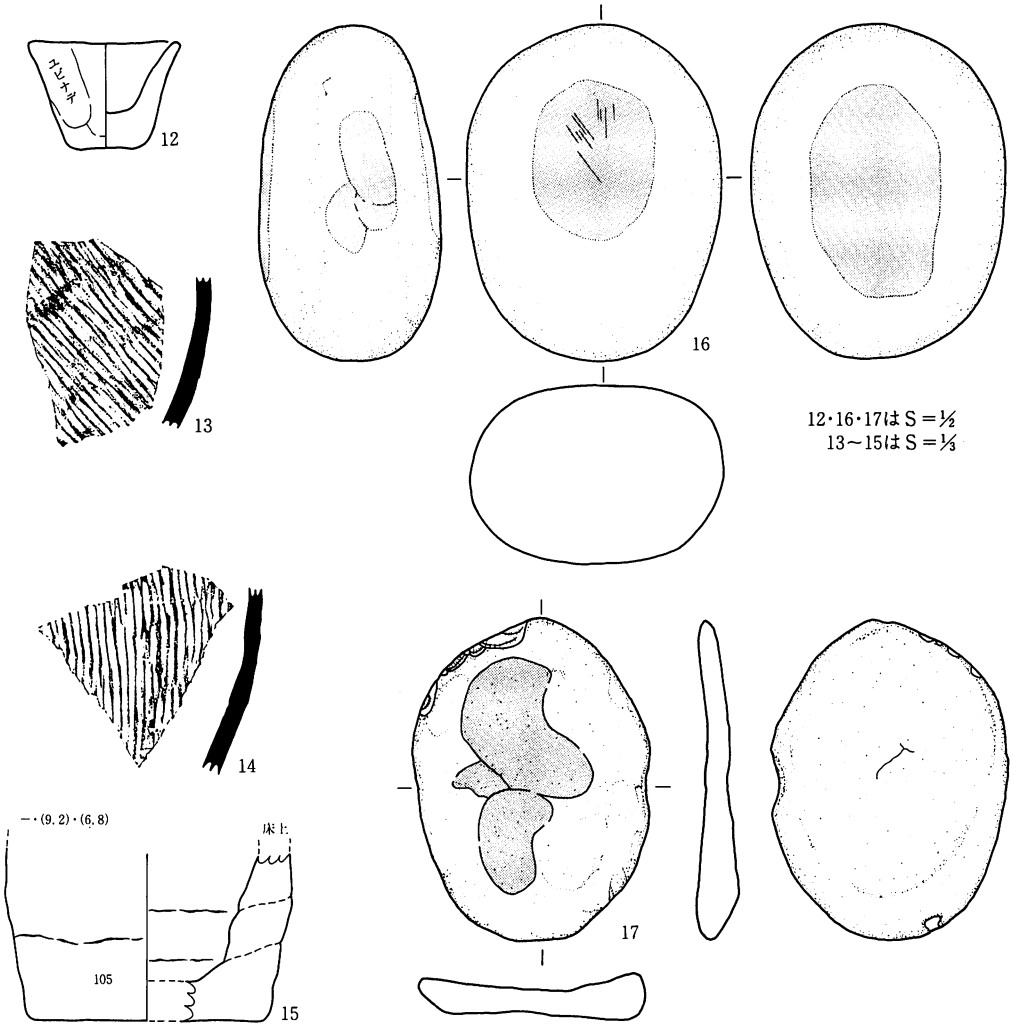
3～5は内面に黒色処理を施している。3はP_8土坑からの出土で、口縁部は外反気味に立ち上がっている。底部は磨滅しているが切り離しは回転糸切りである。4・5は床上からの出土で、4が3分の1ほど現存し、5の口縁部は欠損している。焼成は良好である。

6～8は高台坏で口縁部は欠損している。8は内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。いずれも底部の回転糸切り痕が明瞭で、高台との接合はやや粗雑である。

9から11はロクロ使用の土師器の甕である。9の底部は回転糸切りである。10は口径11.3cm、底径5.8cm、器高8.4cmの小型の甕で、口縁部は短少で外反している。底部は一部磨滅しているが回転糸切りである。11は底部を欠損する床上出土の大型甕破片である。体部は丸みをもち、口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇で直立している。体部外面上半部はロクロ成形痕が明瞭で、下半部は荒いヘラケズリ調整である。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。全体に焼成は良好で胎土も緻密である。



第8図　2号住居跡出土遺跡(1)



第9図　2号住居跡出土遺物(2)

12は口径4.1cm、底径1.9cm、器高2.8cmの盃形の手ずくね土器で、ユビナデ痕が見られる。13・14は須恵器の甕の体部破片で、外面がタタキメ調整を施している。

15はカマド周辺の床上から出土した土製支脚破片である。大部分は欠損しているものの円筒状を呈し、輪積痕が明瞭である。焼成は良好である。

16は両面に磨痕と側面に敲打痕が認められる楕円形状の石器で、長さ8.9cm、幅6.7cm、厚さ4.9cmを測る。石質は花崗閃緑岩である。17の石器は床上から出土しており、長さ8.5cm、幅6.3cm、厚さ1.2cmの楕円板状をしている。用途は片面に使用痕の凹面が認められたことから石皿的なものであろう。

(2)土坑

1～13号土坑（第10・11図、写真図版32）

土坑は三郭の西端部（ＢＶｄ１～２区）に位置している。３号堀東側土塁下位から検出しているが遺構の多くは土塁構築時における削平・攪乱を受けている。また、２号住居跡（平安）と１～９号土坑が重複しており、新旧関係は住居跡を切っていることから土坑の方が新しい。平面形・規模等の属性は下記の表に一括している。平面形は楕円形と不整形状で占められ、開口部は最大107×88cm、最小40×40cm、深さは11～25cmを測る。壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がるものが多い。底面はほぼ平坦で堅く締まっている。

埋土はシルト質の黒褐色土や暗褐色土の単層で構成され、焼土粒と土師器（坏・甕）が多く混在している。10号土坑は暗赤褐色シルト質土と焼土粒の混合土層、12号土坑上位には170×90cm、厚さ13cmの赤褐色焼土の堆積が見られる。

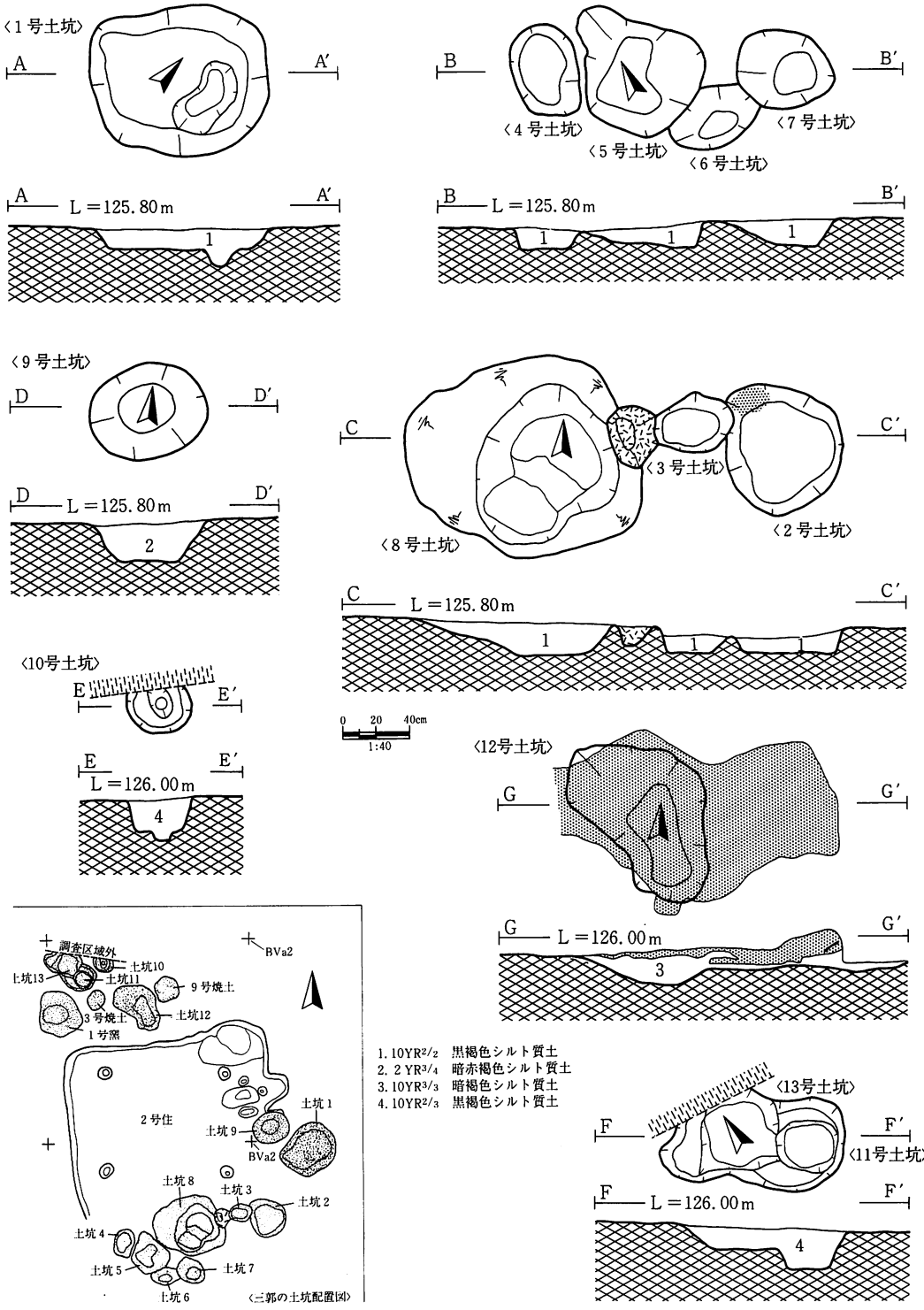
遺物はロクロ使用の土師器の坏・甕、羽口等が６～９・11号土坑から出土している。土器は破片が多く図面を掲載できたのは第11図の15点である。

18は６号土坑出土の坏の底部破片で、全体に磨滅が著しい。19・20は７号土坑から出土の甕と坏である。19は甕の底部破片で、焼成は良好で胎土に細礫と砂粒を含んでいる。底部の切り離しは回転糸切りである。20は半分欠損した高台坏で、口縁部は直線的に外傾して立ち上がっている。

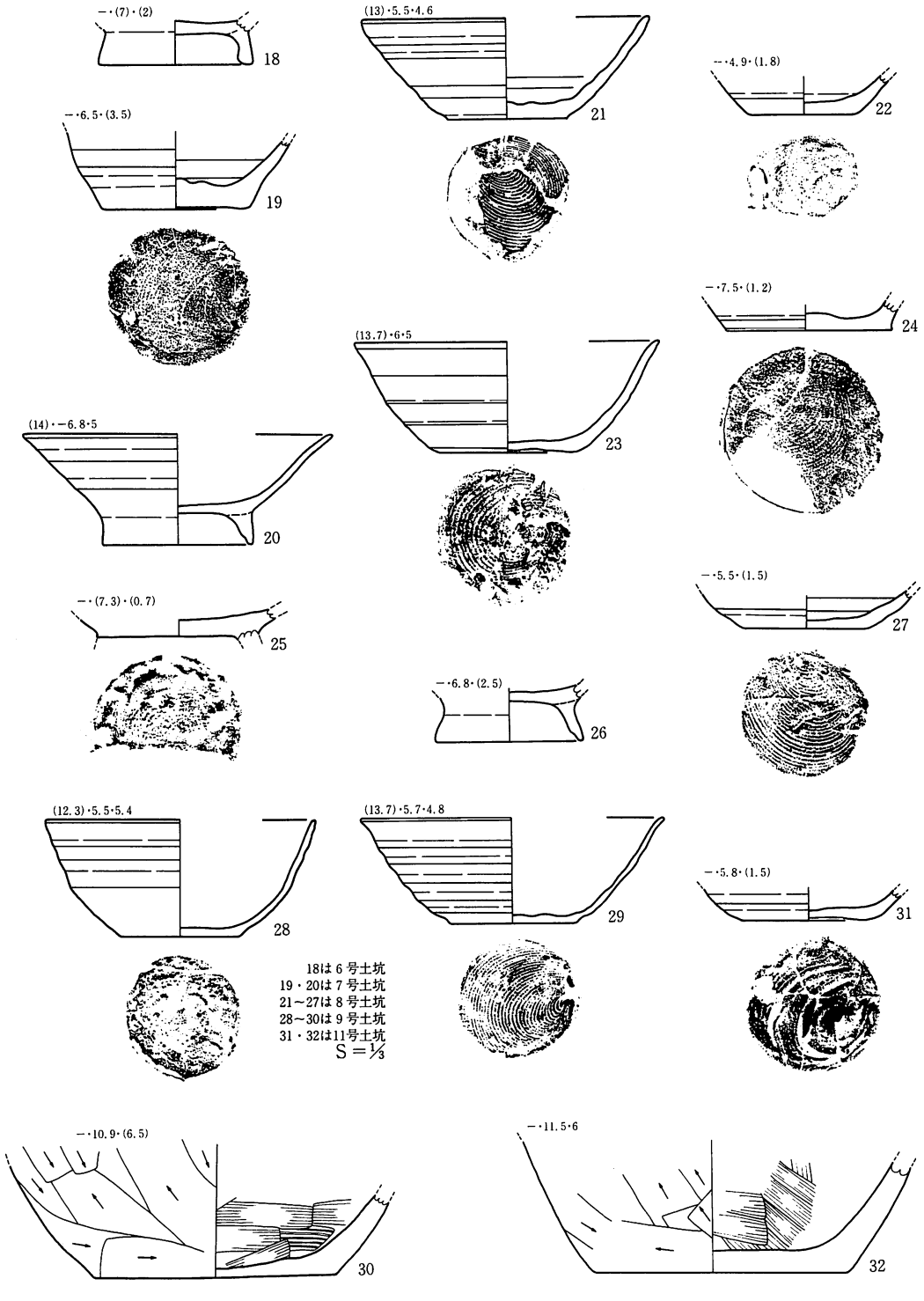
21～27は８号土坑から出土した坏である。21・23の口縁部は外傾しており、底部は回転糸切りである。23は器形の歪みが著しいものの、焼成は良好で胎土も緻密である。22・26・27は坏の底部破片で、いずれも底部の切離しは回転糸切りである。24は底部が回転糸切り調整の甕の破片である。破片で図化しなかったが羽口も出土している。

28～30は９号土坑から出土している。28の坏は器形の歪みが著しく、口縁部はやや直立気味に立ち上がっている。底部は磨滅しているが回転糸切りである。29の口縁部は外傾して立ち上がっている。30は甕の底部破片で、体部外面はヘラケズリ、内面はハケメ・ヘラナデ調整を施

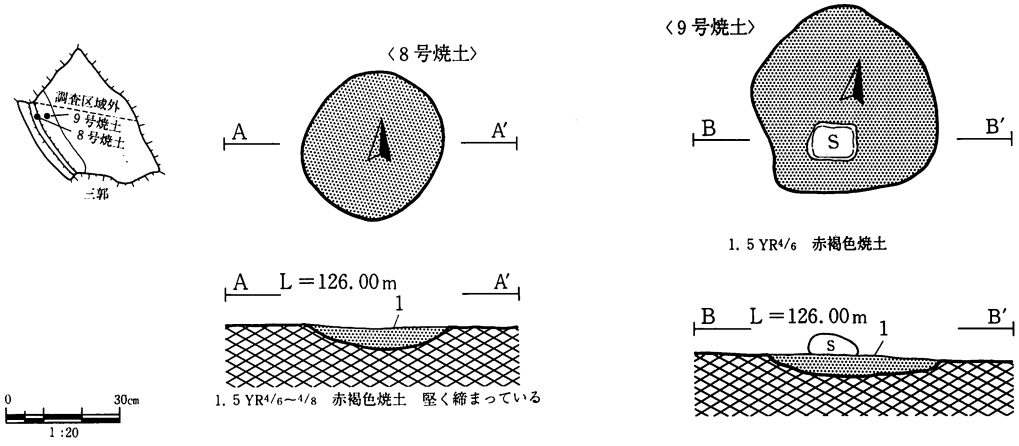
土坑No.	平面形	開口部cm	底部cm	深さcm	底面	遺物	土坑No.	平面形	開口部cm	底部cm	深さcm	底面	遺物
１号	不整楕円形	107×88	85×60	12	ほぼ平坦	ロクロ坏・甕	８号	不整形	130×118	95×80	21	ほぼ平坦	ロクロ坏・甕・羽口
２号	不整形	81×73	60×55	15	平坦	ロクロ坏・甕	９号	楕円形	70×56	33×27	25	凹凸あり	ロクロ坏・甕
３号	不円形	47×34	34×22	11	平坦	ロクロ甕	10号	円形	40×40	28×28	22	平坦	ロクロ坏
４号	不円形	55×40	42×30	13	ほぼ平坦	ロクロ坏	11号	楕円形	38×32	29×25	21	ほぼ平坦	ロクロ坏・高台・甕
５号	不整形	70×65	43×37	16	凹凸あり	ロクロ坏・底部・高台	12号	不整形	113×65	62×24	24	ほぼ平坦	ロクロ坏
６号	不円形	55×35	25×13	14	ほぼ平坦	ロクロ坏・内黒坏	13号	不整形	47×47	38×35	14	平坦	ロクロ坏
７号	不円形	58×47	25×24	16	ほぼ平坦	ロクロ坏・甕							


〈1号土坑〉
A
A′
L＝125.80m
1
〈4号土坑〉
〈5号土坑〉
〈6号土坑〉
〈7号土坑〉
B
B′
L＝125.80m
1
〈9号土坑〉
D
D′
L＝125.80m
2
〈3号土坑〉
〈2号土坑〉
〈8号土坑〉
C
C′
L＝125.80m
1
〈10号土坑〉
E
E′
L＝126.00m
4
0 20 40cm
1:40
〈12号土坑〉
G
G′
L＝126.00m
3
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土
2. 2 YR3/4 暗赤褐色シルト質土
3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土
4. 10YR2/3 黒褐色シルト質土
〈13号土坑〉
〈11号土坑〉
F
F′
L＝126.00m
4
調査区域外
BVa2
土坑10
土坑13
土坑11
9号焼土
3号焼土
土坑12
1号竈
2号住
土坑1
土坑9
BVa2
土坑8
土坑3
土坑2
土坑4
土坑5
土坑7
土坑6
〈三郭の土坑配置図〉

第10図　土坑（1）


—・(7)・(2)
18
—・6.5・(3.5)
19
(14)・—6.8・5
20
(13)・5.5・4.6
21
(13.7)・6・5
23
—・(7.3)・(0.7)
25
—・6.8・(2.5)
26
—・4.9・(1.8)
22
—・7.5・(1.2)
24
—・5.5・(1.5)
27
(12.3)・5.5・5.4
28
(13.7)・5.7・4.8
29
—・5.8・(1.5)
31
18は6号土坑
19・20は7号土坑
21～27は8号土坑
28～30は9号土坑
31・32は11号土坑
S＝1/3
—・10.9・(6.5)
30
—・11.5・6
32

第11図　土坑出土遺物



第12図 焼土(1)

している。焼成は良く胎土に砂粒を含んでいる。底部は多少歪んでおり、回転糸切り後にヘラケズリ調整を施している。

31・32は11号土坑から出土の坏と甕である。31は底部が回転糸切りの坏の破片である。32は厚みのある甕の底部破片で、体部外面はやや荒いヘラケズリ、内面はヘラナデ調整を施している。底部は回転糸切り調整後にヘラで再調整をしている。図面の掲載はしなかったが長さ10.4cm、幅5.1cm、厚さ4.9cmの表・裏・側面に磨痕のある石器も出土している。

(3)焼土

8号焼土（第12図）

三郭の西端部（ＢＶｄ１区）に位置し、３号堀東側土塁下位から検出している。遺構の東側に12号土坑が、西側に１号窯跡が隣接をする。平面形はやや楕円形で、規模は39×35cmである。焼成の厚さは５cmを測り、全体が堅く締まった赤褐色を呈する現地性の焼土である。遺物はロクロ成形の土師器坏の破片が僅かに出土していることから平安時代と推測される。

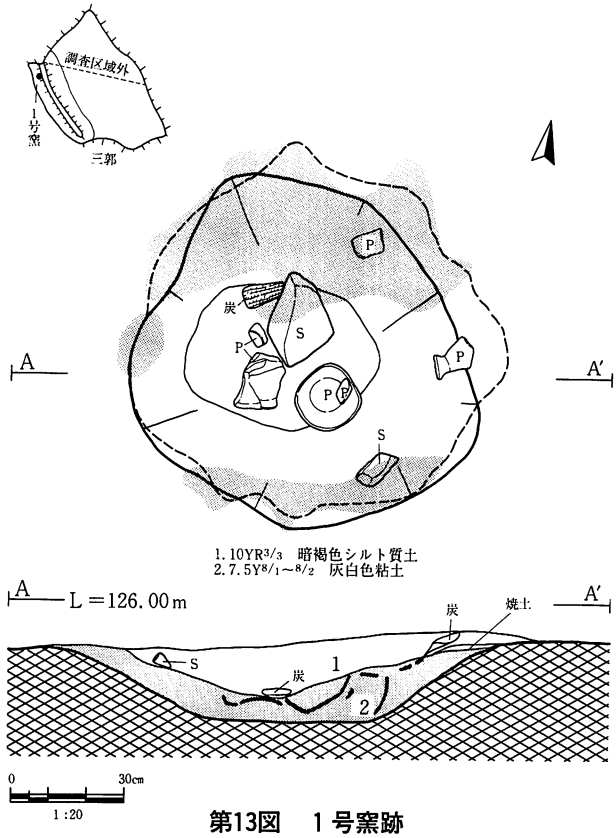
9号焼土（第12図）

８号焼土と同様に三郭の西端部に位置し、西側には12号土坑が隣接している。平面形は不整円形状を呈し、規模は50×48cmである。赤褐色に焼成され、厚さは最大で６cmを測る。焼土の上面には径13×10cm、厚さ13cm大の半分欠損した亜角礫が置かれてある。遺物は８号焼土と同様な土師器坏と甕の破片が出土しており、時期は平安時代と推測される。

(4)窯跡

1号窯跡（第13～15図）

調査区東側三郭（ＢＶｄ１区）の西端部に位置している。３号堀東側土塁下位から検出しており、遺構の北側は11・13号土坑、東側に８号焼土が隣接をする。平面形は開口部が不整円形で底部が楕円形を呈し、規模は開口部が90×84cm、底部が51×38cmである。壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がり、深さは中央部で最大20cmを測る。底面はほぼ平坦である。



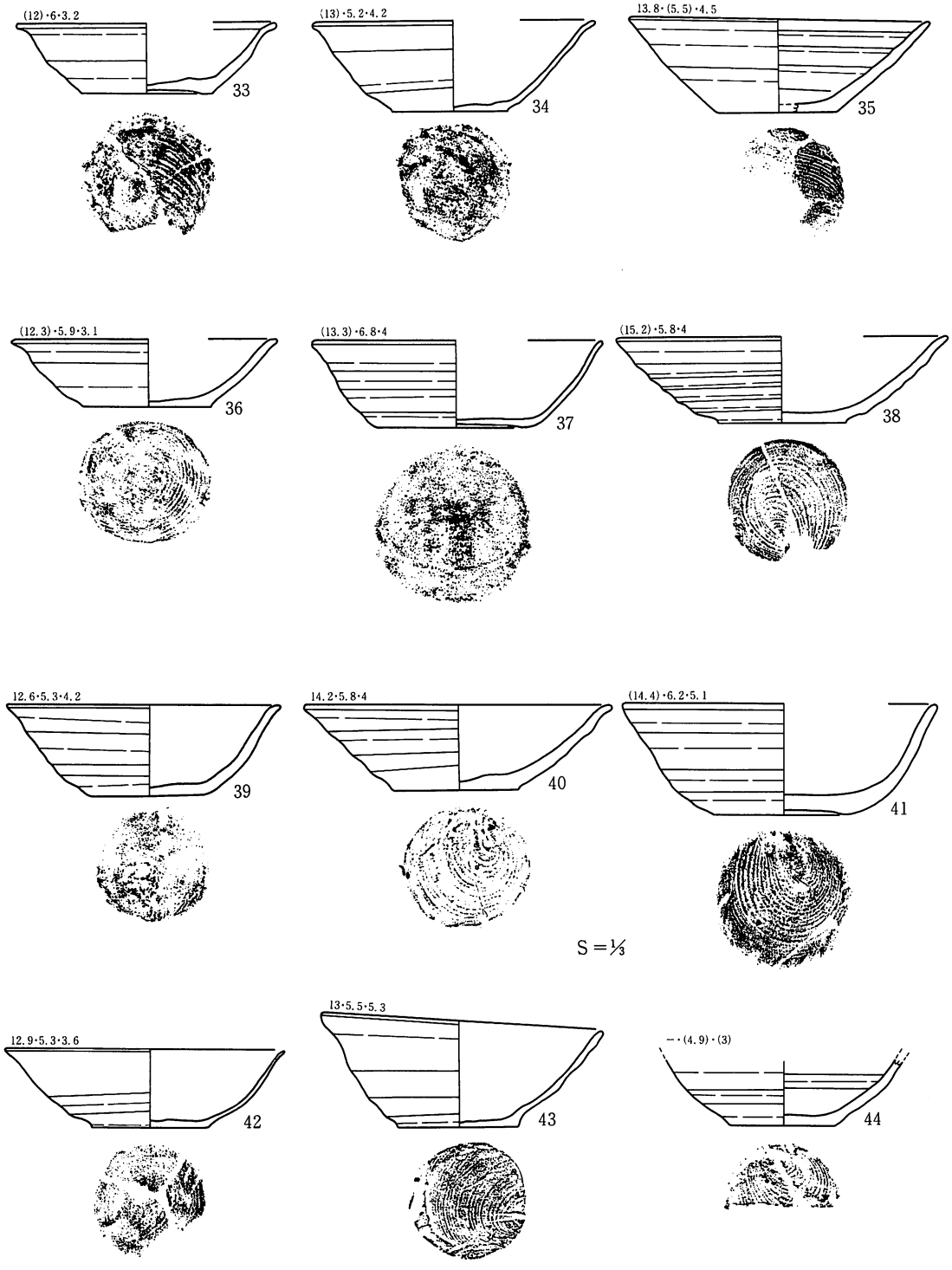
第13図　１号窯跡

埋土は２層に大別され、１層は炭と焼土粒を含む暗褐色シルト質土で堅く締まり、上位に土師器破片を含む。２層は比較的堅く締まった白色粘土で構成され、土師器の坏と甕を多量に混入する。また、中央付近には径20×17cm、厚さ10cm大の亜角礫が土師器と混在して埋設している。

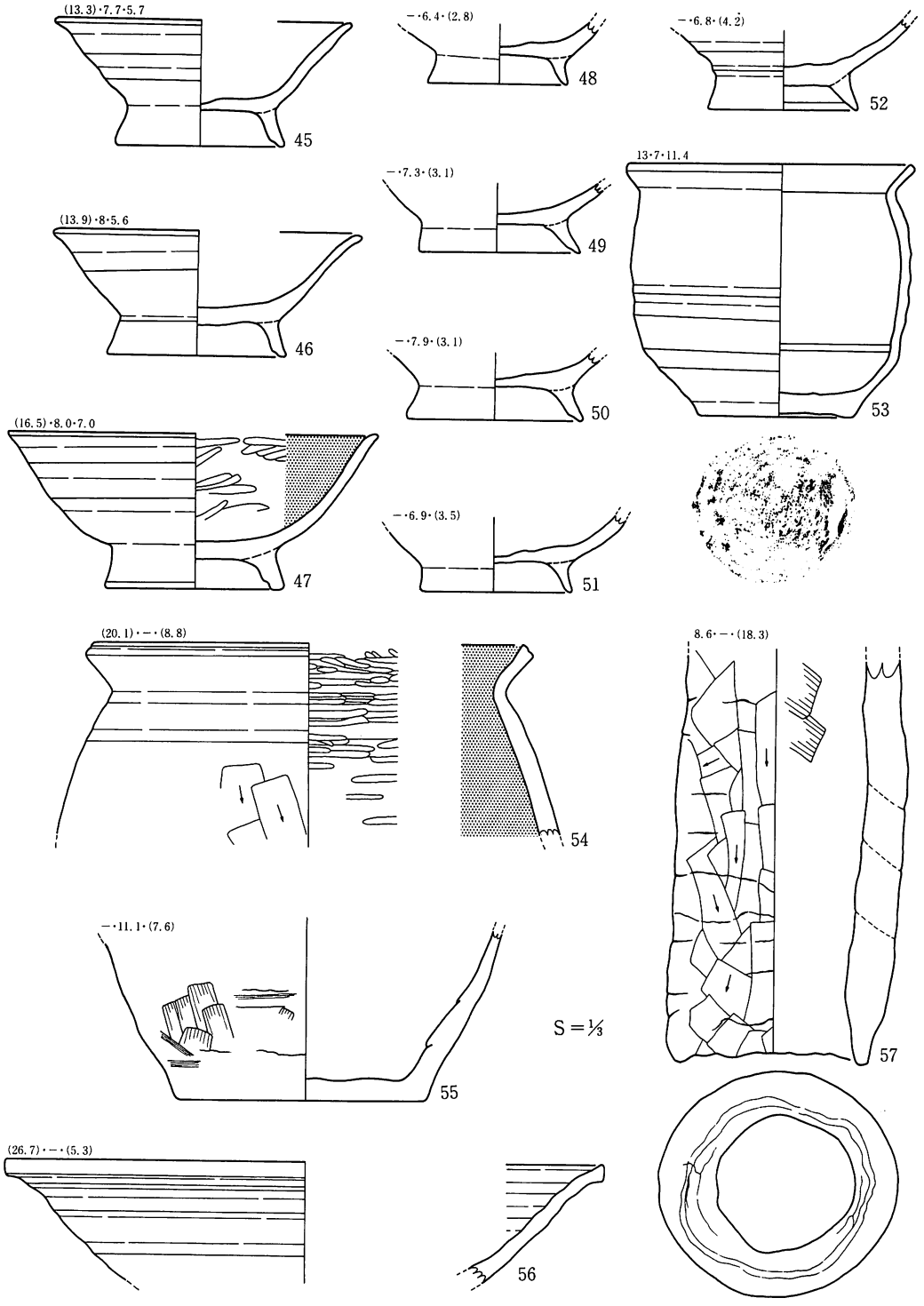
遺物は破片が多く図面掲載できたのは第14・15図の25点である。33～52はロクロ使用の土師器の坏である。33・36の底径は３cm前後と小さく、41・43は器高が５cm以上の深めのものである。口縁部立ち上がりは直線的な35・36・38、直立気味の39・41、外反する33・34等と多様である。37・42の底部は磨滅しているが、他と同様に切り離しは回転糸切りである。43は器形の歪みが著しい。

45～52は高台坏で、45・46の口縁部は直線的に外傾して立ち上がっている。焼成は良好で胎土も緻密である。底部の切り離しは回転糸切りで、高台との接合はやや粗雑である。47の口縁部は直立気味に立ち上がり、体部外面はロクロ成形痕が明瞭で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

53～55はロクロ使用の土師器の甕で、53は小型、54・55が大型の器形である。53の口縁部は短少で頚部からくの字状に外反して立ち上がっている。底部は磨滅しているが回転糸切りである。54は現存３分の１の口縁部破片で、頚部からくの字状に外反している。体部外面はロクロ



第14図　1号窯跡出土遺物(1)



第15図　1号窯跡出土遺物(2)

成形後に幅の広いヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。焼成は良好で、胎土も緻密である。55は底部破片で、体部外面にヘラナデ調整を施している。底部は回転糸切り後にヘラで再調整をしている。

56はロクロ使用の土師器の鍋形土器口縁部破片である。口縁部は外反し、口唇部が角ばっている。

57は端部を欠損した羽口状土製品である。現存長18.2cm、外径8.6cm、内径6.2cmを測り、円筒状を呈している。輪積痕も明瞭で、外面は荒いヘラケズリ調整が施され、一部に煤を付着している。

4．中世の遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

1号住居跡（第16図、写真図版5）

調査区東側三郭（BV区）の南側に位置しており、南東側3mに1号竪穴状遺構、南西側3mに2号竪穴状遺構が隣接している。検出はⅣ層上面で暗褐色土の広がりによって確認されたものである。平面形は北々西側に舌状の張り出し部を付随する隅丸長方形を呈し、規模は5.2×3.9mを測る。長軸方向は北々西～南々東を示している。

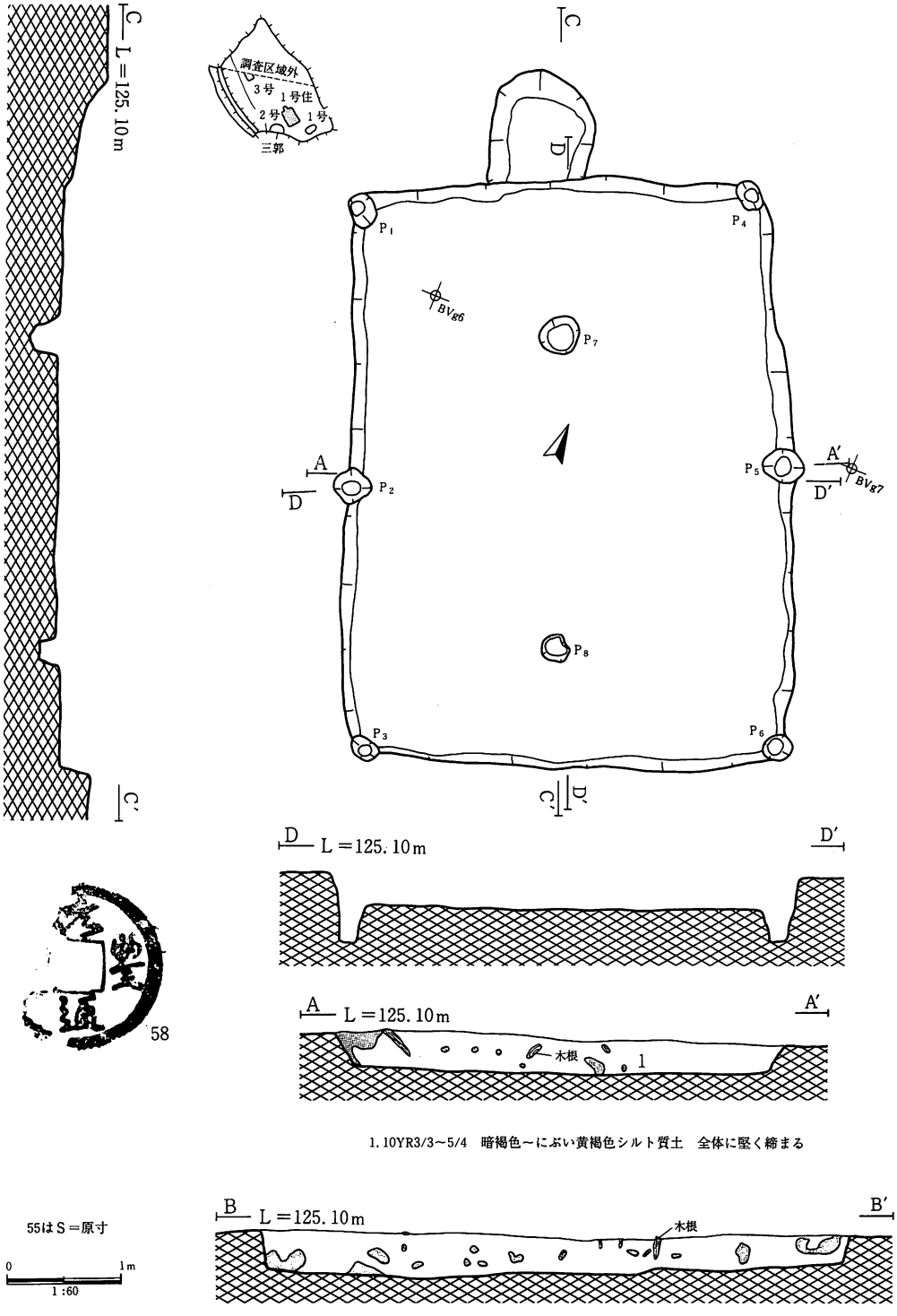
埋土は暗褐色土とにぶい黄褐色シルト質土の混合土で構成され、人為的に埋め戻された様相を示している。壁高は25～35cm前後である。北東壁側は攪乱・削平をうけ崩落しているものの床面から急傾斜で立ち上がっている。床面は基盤層の黄褐色粘土層を掘り込んでおり、木痕による凹凸が見られ全体に堅く締まっている。柱穴はP_1～P_8の8基が検出されている。内6基は壁際に、P_7・P_8が中央部寄りに位置している。平面形は円形ないし楕円形で、柱根は確認

P_{NO}	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
直径cm	30×23	34×30	25×18	28×18	35×30	25×23	36×34	24×21
深さcm	27	34	33	29	30	44	25	18

されない。埋土はP_1～P_6が黒色シルト質土、P_7・P_8が暗褐色土とにぶい黄褐色シルト質土の混合土である。

入口状の施設は北々西壁の中央部寄りに設置されている。平面形は舌状を呈し、規模は100×90cmを測る。床面とは5cmの段差を生じ、緩やかな傾斜で立ち上がっている。全体に堅い踏み締めが見られる。

遺物は58の中国宋朝銭の元豊通寶（初鋳造年1078）が埋土中から出土している。寶の部分を欠損しており、行書体で外径25mm、輪幅1mm、厚さ2mm、重さ（1.5）gである。



第16図　1号住居跡・出土遺物

(2)館跡の概要

観音館は、第17図に示すように主郭と複数の郭からなる複郭型城館である。本報告書では便宜的に各郭を主郭～九郭に呼称している。遺存する郭の現況は牧草地・畑地・山林等で占められており、主郭の中央部東寄りには古館神社が祀られている。北から西側にかけは市道館の下・神楽線が巡っており、二郭西側の一部と１・２号堀の北西側100ｍほどが改変や削平を受けている。

城館は和賀川右岸の河岸段丘（金ケ崎段丘）縁辺部に位置しており、やや北東方向に舌状に張り出したカ所を堀切りで遮断して城域としている。周囲の概観は北と東側の二方が急峻な崖を呈し、南側が芦谷地沢で開析された深い沢に面し、西側が段丘に続いている。堀切りによって主郭と二郭に大きく分けられ、主郭の南東から南側にかけて三郭～八郭を、北側に九郭が配置されている。標高は主郭と二郭が125～127ｍ前後で、北側の県道との比高は34ｍを測る。今回の調査区域は、城域の南側にあたる１～３号堀と三郭の一部が該当をしている。順に各郭の様相を述べることとする。

①主郭　主郭は古館神社境内一帯の平場で、北々西～南々東方向に長く延びている。平面形は南東側の一部が抉入する舌状を呈している。規模は北々西～南々東が160ｍ、東北東～西南西が118ｍ、面積は12,663㎡ほどである。標高は南北側が124ｍ、中央部寄りが125～126ｍ前後と比較的平坦である。

南東側の二郭とは、上幅５～10ｍの北々西～南々東方向に延びる空堀によって区画されており、南々東側は開析された深い沢に続いている。北側には帯郭（九郭）が東西方向に巡り、南側は沢を挟んで三・四郭が、南東側に五～八郭が配置される。南東端にある六・七郭とは堀切りされ、土塁を構築している。東側から九郭にかけての間は急峻な崖が続いている。主郭側の土塁は大部分が崩落や削平を受け南端部側に一部遺存するだけで、全長は35ｍ、上幅が５ｍ前後、高さが現地表面から1.6ｍを測る。

②二郭　二郭は主郭の南東側に位置しており、北西～南東方向に縦長に延びている。平面形は舌状を呈し、規模は北西～南東が170ｍ、北東～南西が52ｍ、面積は6,792㎡である。標高は北西側が126ｍ、南東端部で127ｍを測る。郭のほぼ中央部を農道が北東～南東方向に横断して主郭に至っている。

南西側には今回調査した１・２号堀が最大12ｍの上幅で北西～南東方向に巡っている。半分以上は市道によって削平されており、北西端部は崖線に続く。南東側は深い沢を挟んで三・四郭が約20ｍの距離で配置されている。土塁は南々東側の縁辺部に僅かに遺存するだけで、大部分は主郭と同様に崩落や削平を受けている。全長は25ｍほどで、上幅が２～３ｍ、下幅が最大で４ｍ、高さは現地表面から1.2ｍを測る。

③三郭　主郭の南側に位置する郭で、北西～南東方向に延びている。平面形は台形状を呈し、規模は北西～南東が38m、北東～南西が25m、面積は766㎡を測る。標高は125～126m前後でほぼ平坦である。北側は深い沢を挟んで主郭に面し、南西側は北々西～南々東方向に延びた3号堀によって区画され、北東側には四郭が配置されている。土塁は南西側に構築されており全長22m、上幅が1.5～2m、下幅が最大7mを測り、高さは現地表面から2mほどである。平場からは中世の竪穴住居跡・柱穴状土坑・時期が不明の竪穴状遺構、土塁の下からは平安時代の竪穴住居跡・窯跡・土坑等の遺構が検出されている。

④四郭　三郭の北東側に位置する小規模な郭である。平面形は二等辺三角形状を呈し、規模は北々西～南々東が29m、東北東～西南西が9m、面積は180㎡を測る。標高は122mで三郭との比高は3m前後である。北側は沢を挟んで主郭が、東と南側は急峻な崖に面している。

⑤五郭　主郭の南東側に配置されており、平面形は三角形状を呈している。規模は西北西～東南東が19m、北々東～南々西が8m、面積は141㎡を測る。標高は116m前後で、主郭南東端部との比高は8mである。郭の北東側は埋没しているが堀切りされ、南西側は深い沢に面している。

⑥六郭　主郭の南東側に配置された郭の一つで、五郭と八郭の中間に位置している。東西方向に延びており、平面形は舌状を呈する。規模は東西が16m、南北が16m、面積は229㎡を測る。標高は120m前後で、主郭南東端部との比高は4mである。西側は南北方向に延びる上幅3mの堀で区画し、土塁を構築している。土塁の全長は19m、上幅が4mである。南東側には七郭を配置し、南北の両側が堀切りされ、東側は急峻な崖に面している。

⑦七郭　主郭の南東端部に位置しており、東北東～西南西方向に延びている。平面形はやや孤状を呈し、規模は東北東～西南西が29m、北々西～南々東が7mを測り、面積は165㎡である。標高は112～114m前後で、六郭との比高は約7mである。北西側には六郭を配置し、南西側が埋没しているが堀切りされ、北と東側は急峻な崖に面している。

⑧八郭　主郭の南東側に位置している。平面形はくの字状を呈し、規模は南北が25m、東西が13m、面積は325㎡ほどである。標高は116～118mで、主郭の南東端部との比高は約8mを測る。東側は埋没しているが堀切りされており、南東側に六郭を配置している。六郭との比高は3mである。

⑨九郭　主郭の北側に位置しており、東西方向に長く延びている。東端部は古館神社の参道の一部となっている。平面形は帯状を呈しており、規模は東西が98m、南北11mを測り、面積は827㎡である。標高は東側で110m、西側が113mほどで主郭北側との比高は12mである。郭の西端部には南北方向に土塁が巡っており、全長は14m、上幅が3m前後、高さは現地表面から1.7mである。東西と北側の三方は急峻な崖に面し堅固な様相を示している。

第17図　観音館跡全域図

(3)堀跡

今回調査対象となったのは二郭南側の１・２号堀と三郭南西側の３号堀である。１・２号堀は城域の南西側を堀切りしたもので、一部が重複している。

１号堀（第18～22図、写真図版６～12）

堀は市道館の下・神楽線によって北々西側の半分以上が分断されており、規模の詳細が不明である。第18図から全長は203ｍと推測される。調査区域では市道の境から南東方向に長さ90ｍを測り、２カ所で屈曲しながら東側の開析された深い沢に続いている。上幅は５～最大12m、下幅は0.3～1.7ｍ前後である。断面形から見て薬研堀である。底部は北西側と中央部南東寄りで狭くなり、一部基盤の礫層を掘り込んでいる。また、二郭南東部側の土塁との比高は底面から5.7ｍを測る。

２号堀と重複しており、２号堀を一部人為的に埋め戻した後に当遺構を堀切りしている。新旧関係は前者方が旧い。

壁は遺存状態の良い北西側で底面から48～54度の急傾斜で立ち上がる。中央部から東側にかけては幅30～50㎝の細長い平坦面が見られる。

埋土の堆積は1.5～２ｍほどあり、上部が流れ込みや壁崩落土の褐色～黄褐色シルト質土、中位が黒褐色粘土と水酸化鉄斑との互層、下部が植物遺存体を多く含むグライ化した黒色～暗灰黄褐色粘土で構成されている。

遺物（第24図、写真図版34）は坩堝、陶磁器、石製品、縄文時代の石製品が出土している。

59は堀の底部から出土した坩堝で、口径が4.4㎝、底径が1.7㎝、器高が２㎝を測る。口縁にはＶ字状の切り込みを１カ所有し、内面は気泡状の凹凸が、外面は光沢をもつ硝子質の溶触物の付着が見られる。

60は堀の底部から出土した香炉（瓦質陶器）の口縁部破片で、菱形状の型押が施されている。

61は鬼板の化粧がけした擂鉢の口縁部、62は筒状をした花生の体部下半と思われる破片である。61・62はいずれも近世以降のものである。

65は蛇の目底の白磁破片（18世紀）である。64は常滑の大甕の体部破片（15～16世紀）で、63は瀬戸の祖母懐の壺の肩部破片である。

66は硯の陸部分の破片で、現存長が（4.7㎝）、幅が3.3㎝、厚さが1.8㎝を測る。表側には１～２㎜の彫り込みを有し、石質は淡緑色細粒凝灰岩である。

67～70は縄文時代の石器・石製品である。67は粘板岩製の石製品と思われる破片である。68は抉入部に片面から刃部加工を施した剥片石器である。69は両端部を打ち敲いて調整した石錐である。70は敲・磨石で、両面が磨滅し側面に敲打痕がある。

2号堀（第18～22図、写真図版13～15）

1号堀の精査段階において確認されたもので、最初に堀切りされた旧い方の堀である。1号堀を構築する際に人為的に埋め戻しを行っている。遺存するのは市道から北西側に約80mで、1号堀によって切られていることから規模の詳細は不明であるが、下幅は1.2～3.5mを測る。断面は箱形を呈すると推測される。底面は比較的平坦であり、壁は底面から43～45度の傾斜で立ち上がっている。

埋土の状況は上部が黒～黒褐色シルト質土、下部が暗褐色～黄褐色シルト質土に水酸化鉄斑が帯状に堆積する互層で構成されている。深さは1.6～2m前後である。

遺物は出土していない。

3号堀（第18・23図、写真図版16～18）

三郭の南西側を北々西～南々東方向に堀切りしたものである。北々西側が開析された深い沢に面し、南々東側が急傾斜面に続いている。規模は全長が29m、上幅が中央部付近で12m、下幅が1.2～3m前後を測る。両端部では3mの比高があり、南々東側が低位となっている。断面形は箱形状を呈している。底部は中央部から南々東端部にかけては雨裂崩壊で基盤の礫層が露出している。

壁は底面から40～50度の急傾斜で立ち上がっており、土塁側の方が急勾配となっている。土塁との比高は底面から5.2mである。

埋土は大部分が斜面崩落土と東側の土塁から流出した褐色～にぶい黄褐色シルト質土で占められている。堆積の深さは50～80cmで、1・2号堀に比較して浅くなっている。

西側の一部は段になっており1・2号堀と同様な時期差があると推測されるものの、埋土の様相からは確認されない。

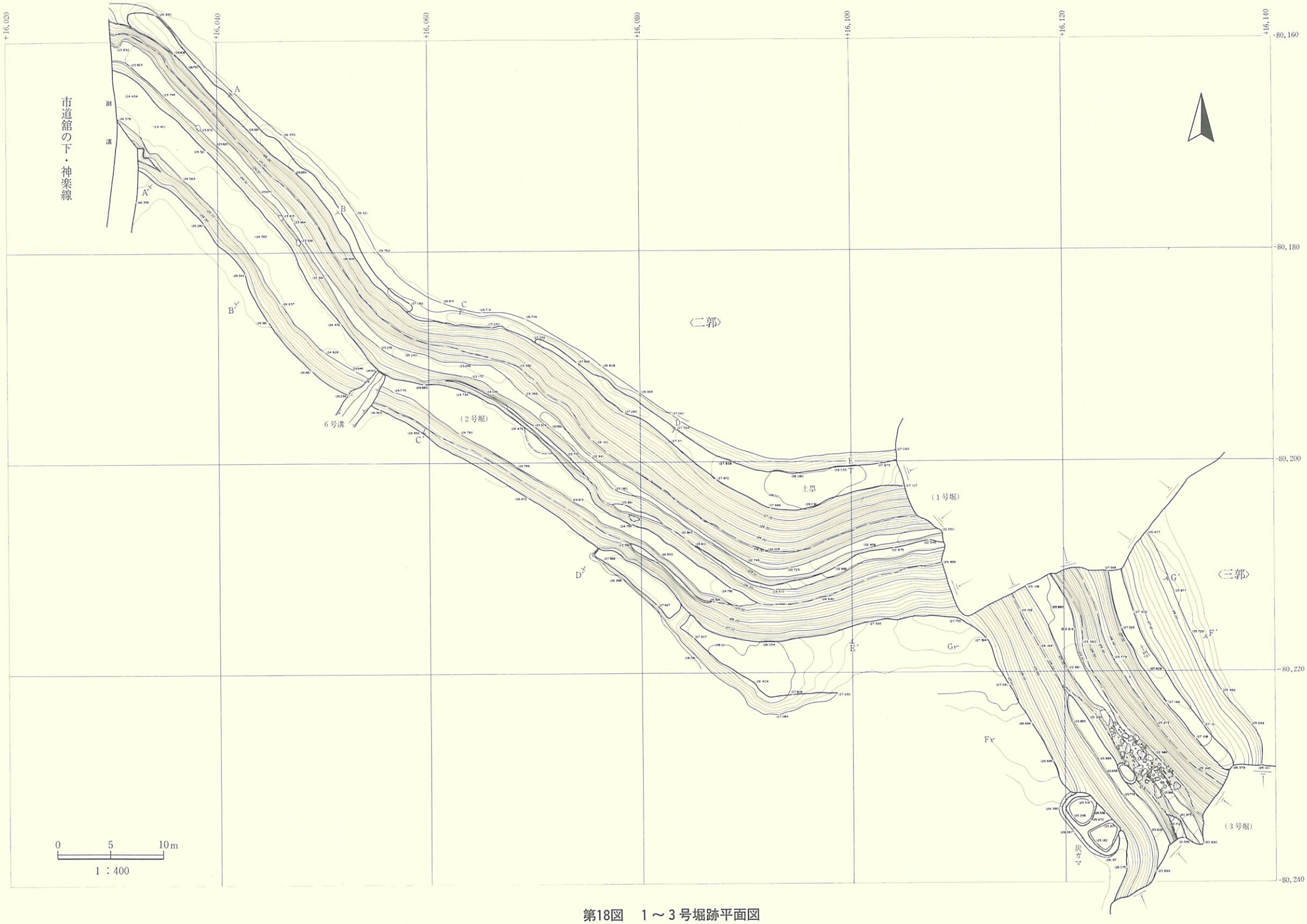
遺物（第25図、写真図版35）は手ずくね土器、平安時代の土師器・須恵器、縄文時代の土器・石器が埋土および斜面から出土している。

71・72は手ずくね土器で、72はユビナデ痕が認められる。73・74は土師器の坏の底部破片で、底部の切り離しが回転糸切りである。75はロクロ使用の土師器の甕で、体部上半が直立気味に立ち上がり、口縁部は頚部から外反する。外面はヘラケズリ調整を施している。

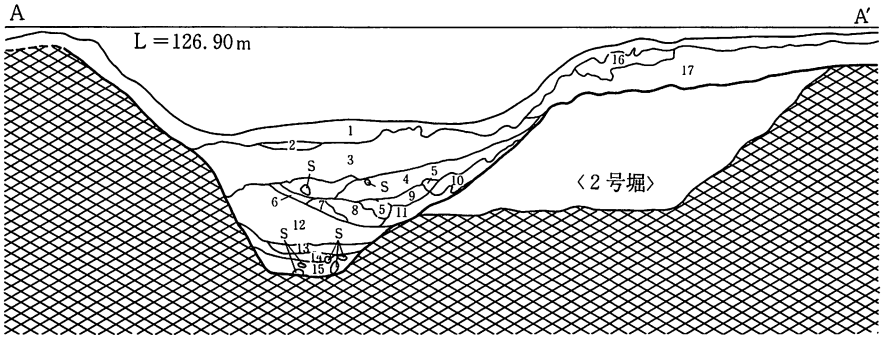
76は単口式の土師器の甑で、器全体が多少歪んでいる。口唇部は角ばり、外面はヘラケズリ調整を施している。

77は須恵器の甕の体部破片で、外面は平行タタキメ調整である。

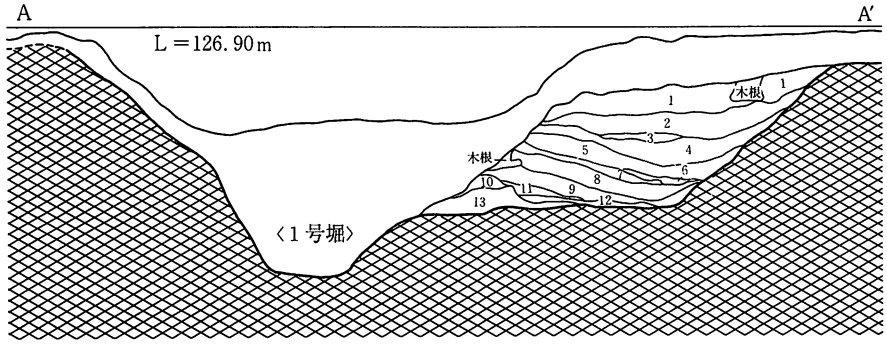
78は縄文時代晩期の壺の破片、79は石器の剥片である。



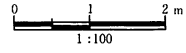
第18図　1～3号堀跡平面図



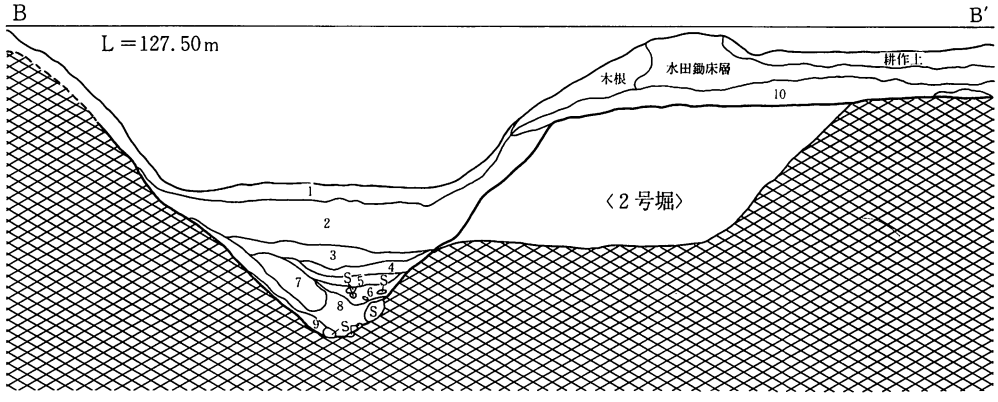
1. 10YR2/3　黒褐色土　表土層
2. 10YR3/2　黒褐色土シルト質土　黄褐色土と砂が互層に堆積をする
3. 10YR2/3　黒褐色土シルト質土　炭を微量に含む
4. 10YR2/3　黒褐色土シルト質土　炭を微量に含む
5. 10YR3/4　暗褐色粘土　黄褐色との混合土
6. 10YR3/2　黒褐色粘土　小礫を含む
7. 7.5YR3/4　暗褐色粘土　砂との混合土で堅く締まる
8. 7.5YR3/2　黒褐色粘土　砂を多く含み堅く締まる
9. 10YR2/2　黒褐色粘土　炭を微量に含む
10. 7.5YR2/3　暗褐色粘土　明黄褐色土粒を微量に含む
11. 10YR2/3　黒褐色粘土　堅く締まる
12. 10YR5/6　黄褐色粘土　壁と土塁の崩落土
13. 10YR6/6　明黄褐色粘土　壁崩落土で水酸化鉄斑が帯状に堆積をする
14. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘土　グライ化層で植物遺存体を多く含む
15. 2.5Y2/1　黒色粘土　グライ化が著しく植物遺存体を多く含む
16. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　黄褐色粘土がブロックで堆積をする
17. 10YR2/3　黒褐色シルト質土　炭を微量に含む



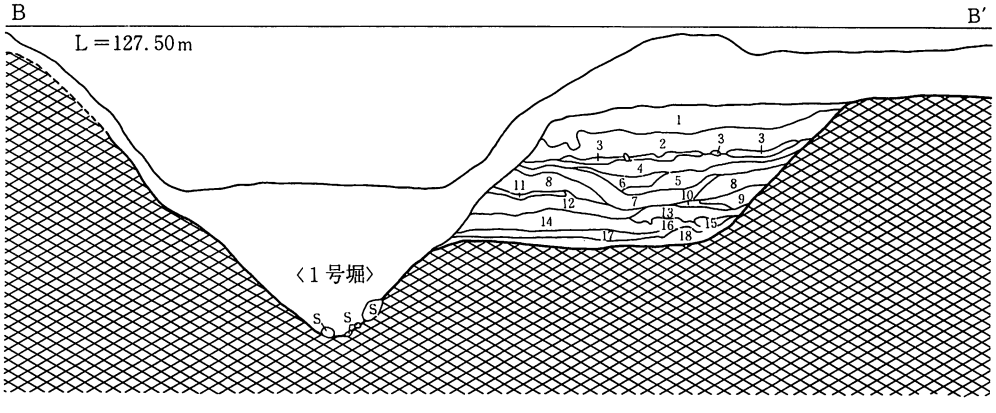
1. 10YR2/2～3/2　黒褐色シルト質土　砂と浮石との互層で堅く締まる
2. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　砂と浮石との互層で炭を微量に含む
3. 10YR2/3～3/3　黒褐～暗褐色砂質シルト　砂との互層
4. 10YR3/1～3/2　黒褐色砂質シルト　2層に類似する
5. 10YR2/2　黒褐色砂質シルト　黒褐色土が帯状に堆積する
6. 10YR1.7/1　黒色シルト質土　浮石を微量に含む
7. 10YR3/1～3/2　黒褐色砂質シルト　全体に堅く締まる
8. 10YR3/2　黒褐色砂質シルト　5層に類似をする
9. 10YR2/3　黒褐色砂質シルト　浮石を多く含み黒褐色土が帯状に堆積をする
10. 10YR3/3　暗褐色シルト質土　砂と浮石との互層
11. 10YR3/4～4/4　暗褐～褐色シルト質土　径2～4㎝大の浮石との互層
12. 10YR4/4　褐色シルト質土　全体が砂質に富む
13. 10YR2/1　黒色シルト質土　水酸化鉄斑との互層



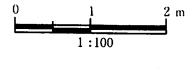
第19図　1・2号堀断面図(1)



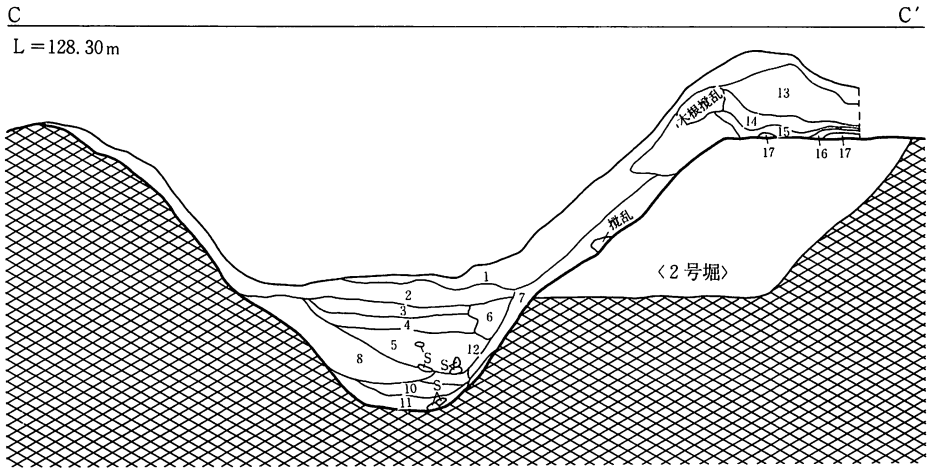
1. 10YR3/2　黒褐色土　表土層
2. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　炭を微量に含む
3. 10YR4/4　褐色粘土　黄褐色土との混合土層
4. 10YR3/1　黒褐色粘土　水酸化鉄斑との互層
5. 2.5YR3/1　黒褐色粘土　水酸化鉄斑との互層
6. 10YR2/1　黒色粘土　植物遺存体を多く含む
7. 10YR6/6～7/6　明黄褐色粘土　壁と土塁の崩落土
8. 2.5GY6/1　オリーブ灰色粘土　明黄褐色土との混合土
9. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘土　水酸化鉄斑との互層
10. 10YR2/2　暗褐色シルト質土　炭を微量に含む



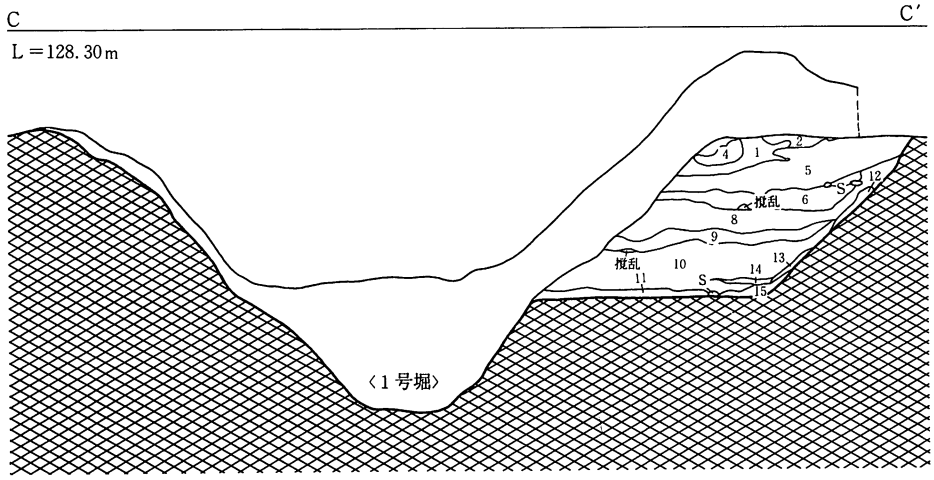
1. 10YR2/2　黒褐色シルト湿度　浮石流火山灰津土との混合土
2. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　炭と焼土粒を少量含む
3. 10YR2/3～3/3　黒褐～暗褐色砂質シルト　褐色土を帯状に堆積をする
4. 10YR2/1　黒色シルト質土　全体に堅く締まる
5. 10YR2/2～3/2　黒褐色砂質シルト　黒色土が帯状に堆積をする
6. 10YR3/3～4/3　暗褐～にぶい黄褐色砂質シルト　浮石を多く含む
7. 7.5YR3/3～4/3　暗褐～褐色砂質シルト　堅く締まり浮石を多く含む
8. 7.5YR3/4～4/4　暗褐～褐色砂質シルト　水酸化鉄斑を帯状に堆積をする
9. 10YR3/4～4/4　暗褐～褐色シルト質土　砂との互層
10. 10YR2/2～4/4　黒褐色～褐色シルト質土　水酸化鉄斑がブロック状に堆積をする
11. 10YR2/2～3/2　黒褐色シルト質土　水酸化鉄斑との互層
12. 10YR3/4～4/4　暗褐～褐色シルト質土　砂と褐色土が帯状に堆積をする
13. 7.5YR4/4～4/6　褐色シルト質土　12層と同様
14. 10YR2/1　黒色シルト質土　径1～4㎝大の浮石との混合土
15. 10YR4/2　灰黄褐色シルト質土　黒色土を帯状に堆積をする
16. 7.5YR1/6　褐色砂質シルト　径1～2㎝大の石と浮石を多く含む
17. 10YR5/4　にぶい黄褐色シルト質土　水酸化鉄斑が大ブロックで堆積をする
18. 2.5Y4/1　黄灰色粘土　植物遺存体を多く含む



第20図　1・2号堀断面図(2)



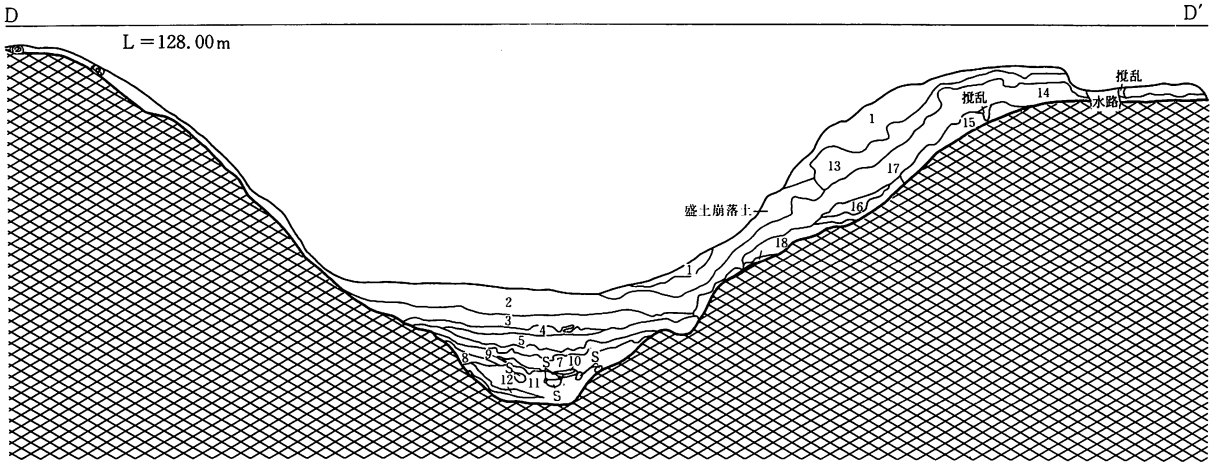
1. 10YR3/4　暗褐色土　表土層で壁崩落土を含有する
2. 10YR2/3　黒褐色土　表土層で堅く締まる
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質土　炭を微量に含む
4. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　水酸鉄化斑との互層
5. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　水酸鉄化斑との互層
6. 10YR2/2　黒褐色粘土　撹乱層
7. 2.5Y3/1　黒褐色粘土　炭を微量に含む
8. 10YR6/4～6/6　にぶい黄橙～明黄褐色粘土壁と土塁の崩落土
9. 7.5Y4/1　黄灰色粘土　水酸化鉄斑が多く堆積をする
10. 2.5GY6/1　オリーブ灰色粘土　植物遺存体を多く含む
11. 2.5Y2/1　黒色粘土　径5～10cm大の礫を含む
12. 10YR3/3　暗褐色粘土　水酸化鉄斑との互層
13. 10YR5/6　黄褐～明黄褐色粘土　土塁の盛土層
14. 10YR2/3　黒褐色粘土　水酸化鉄斑が互層で堆積をする
15. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土
16. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土
17. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　堅く締まる



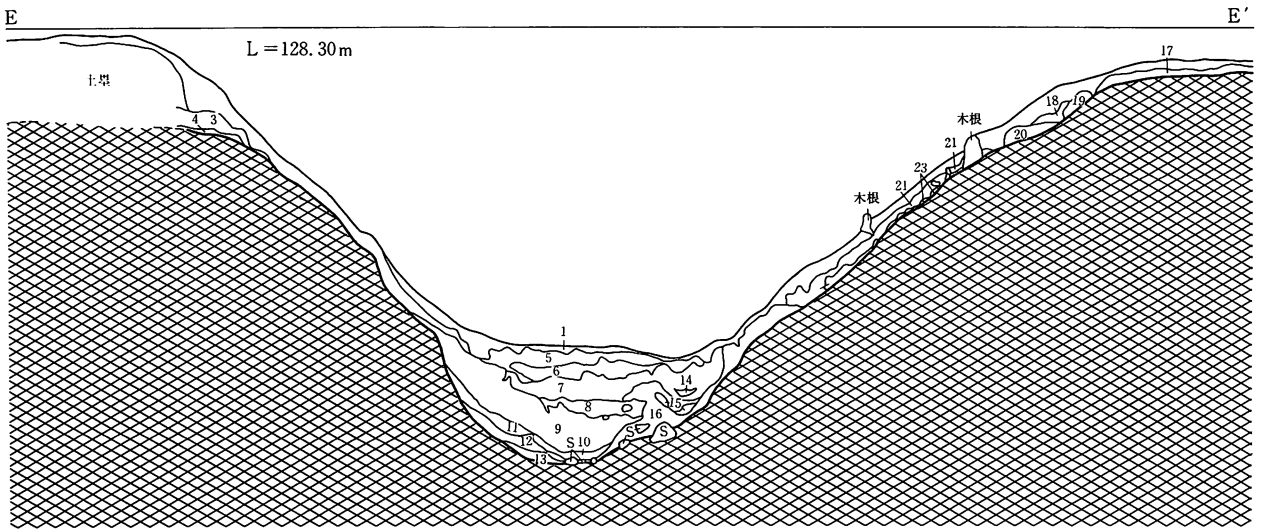
1. 10YR3/3～3/4　暗褐色シルト質土　炭を少量含む
2. 10YR4/4　褐色シルト質土　水酸化鉄斑がブロック状に堆積をする
3. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　全体に堅く締まる
4. 10YR3/3　暗褐色シルト質土撹乱層
5. 10YR3/3　暗褐色シルト質土　全体に炭が散在する
6. 10YR3/4～4/4　暗褐～褐色シルト質土　浮石流火山灰と褐色土の混土層
7. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質土　炭を微量に含む
8. 10YR3/3　暗褐色シルト質土　浮石粒と炭を微量に含む
9. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　砂が帯状に堆積をする
10. 10YR3/3～4/3　暗褐～にぶい黄褐色砂質シルト　砂と暗褐色土の互層
11. 10YR4/4　褐色シルト質土　黒色シルトの互層
12. 10YR6/4～6/6　にぶい黄褐～黄褐色シルト質土　壁崩落土
13. 10YR4/2　灰黄褐色シルト質土　水酸化鉄斑が帯状に堆積をする
14. 10YR4/2　灰黄褐色シルト湿度　水酸化鉄斑が帯状に堆積をする
15. 10YR6/3～6/6　にぶい黄褐～明黄褐色浮石流火山灰土　壁崩落土

0　1　2 m
1:100

第21図　1・2号堀断面図(3)



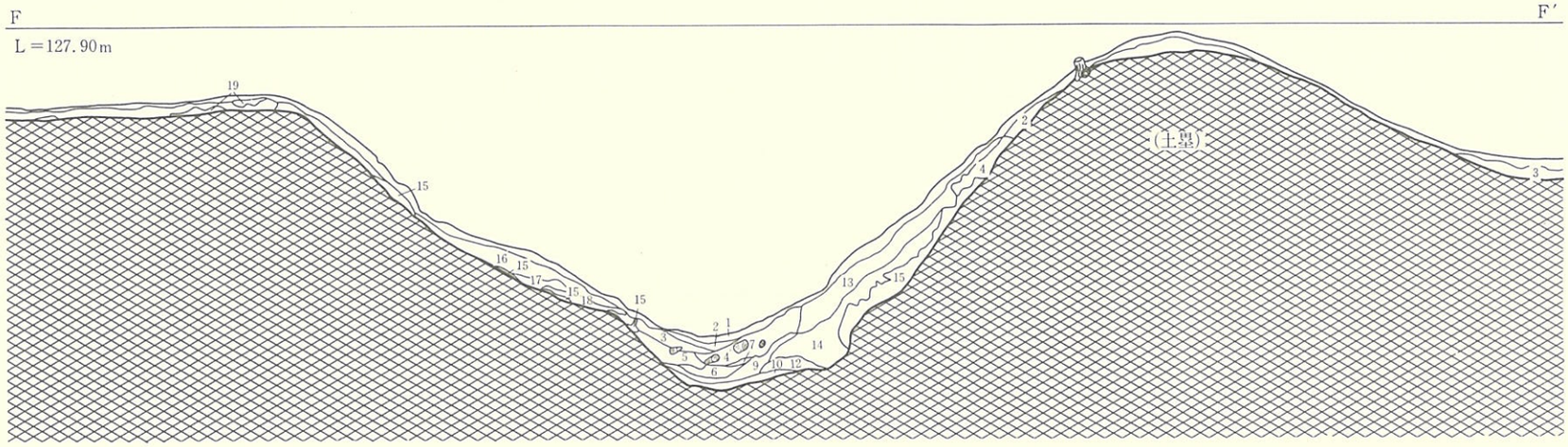
1. 10YR3/3　暗褐色土　表土層
2. 10YR3/3　暗褐色土　表土層
3. 10YR3/4　暗褐色シルト質土
4. 10YR2/2　黒褐色粘土
5. 10YR2/3　黒褐色粘土
6. 10YR4/4～6/6　褐色～明黄褐色粘土
7. 10YR2/1　黒色粘土
8. 2.5YR4/1　黄灰色粘土
9. 10YR3/1　黒褐色粘土
10. 2.5GY2/1　明オリーブ灰色粘土
11. 2.5Y2/1　黒色粘土
12. 2.5GY6/1　オリーブ灰色粘土
13. 10YR5/6　黄褐色粘土
14. 10YR3/3　暗褐色シルト質土
15. 10YR5/6　黄褐色粘土
16. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土
17. 10YR3/3　暗褐色シルト質土
18. 7.5YR3/4　暗褐色粘土



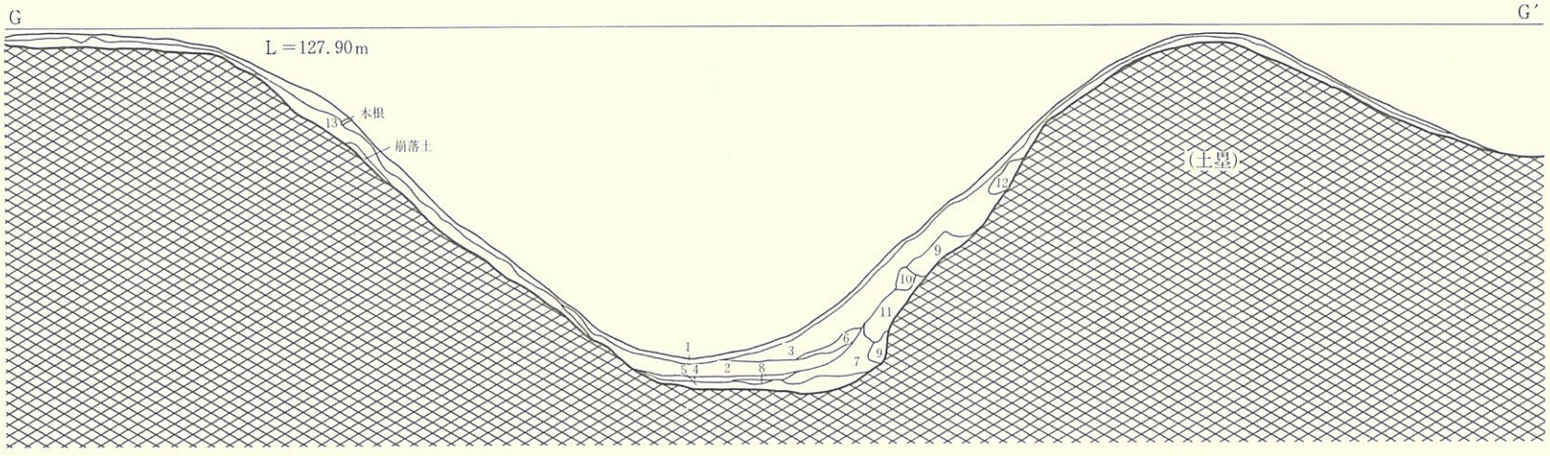
1. 10YR3/3　暗褐色土　表土層
2. 10YR6/6　明黄褐色粘土
3. 10YR3/1　黒褐色粘土
4. 10YR4/4　褐色粘土
5. 10YR2/3　黒褐色土
6. 10YR3/3　暗褐色シルト質土
7. 10YR3/4　暗褐色シルト質土
8. 2.5YR3/2　黒褐色粘土
9. 10YR6/8　明黄褐色粘土
10. 10YR4/6　褐色粘土
11. 2.5Y4/6　オリーブ褐色粘土
12. 2.5Y4/1　黄灰色粘土
13. 7.5Y6/1　灰色粘土
14. 10YR4/4　褐色シルト質土
15. 10YR2/3　黒褐色シルト質土
16. 10YR6/8　明黄褐色粘土
17. 10YR7/8　明黄褐色シルト質土
18. 10YR4/3　にぶい黄褐色土
19. 10YR8/6　黄橙色シルト質土
20. 10YR2/2　黒褐色粘土
21. 10YR3/3　暗褐色シルト質土
22. 10YR8/6　黄橙シルト質土
23. 10YR5/6　黄褐色シルト質土

0　1　2 m
1:100

第22図　1・2号掘断面図(4)

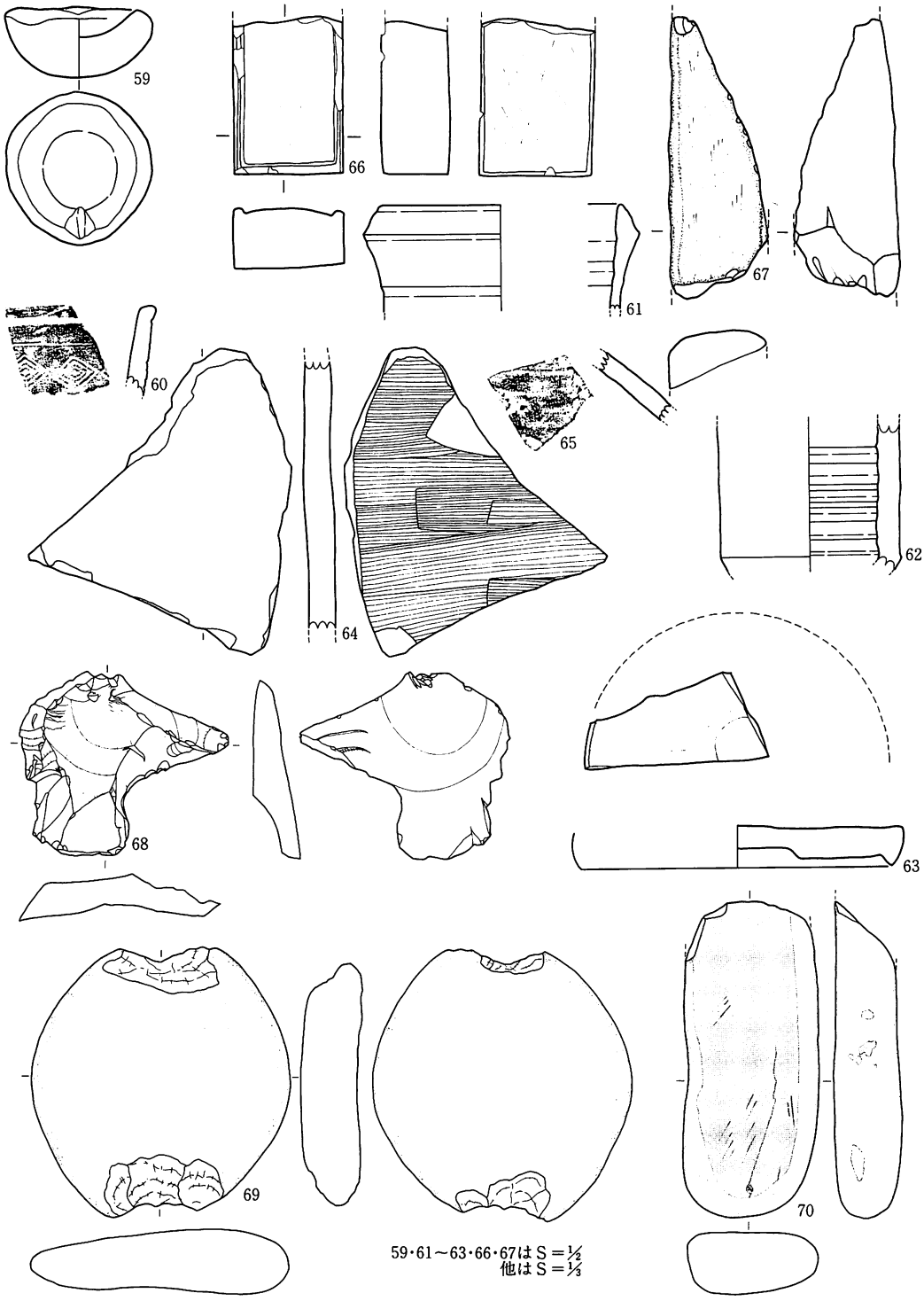


1. 10YR4/4　褐色シルト質土　表土層
2. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　グライ化が著しい
3. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　締まりはよくなく軟質である
4. 10YR4/4　褐色シルト質土　全体に堅く締まる
5. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　堅く締まる
6. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　壁崩落土がブロック状に堆積をする
7. 10YR4/4　褐色シルト質土　水酸化鉄斑が小ブロックで堆積をする
8. 10YR5/6　黄褐色シルト質土　水酸化鉄斑が帯状に堆積をする
9. 10YR2/1　黒色粘土　全体に堅く締まる
10. 10YR3/1　黒褐色粘土　9層と同様
11. 10YR4/4　褐色シルト質土　壁の崩落土
12. 10YR4/6　褐色シルト質土　水酸化鉄斑との混合土
13. 10YR3/2　暗褐色シルト質土　黄褐色土を少量含む
14. 10YR4/4　褐色シルト質土　炭と浮石を微量に含む
15. 10YR6/8　明黄褐色浮石流火山灰土　壁の崩落土
16. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　やや堅く締まる
17. 10YR3/4　暗褐色シルト質土
18. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質土　堅く締まる
19. 10YR3/4　暗褐色シルト質土

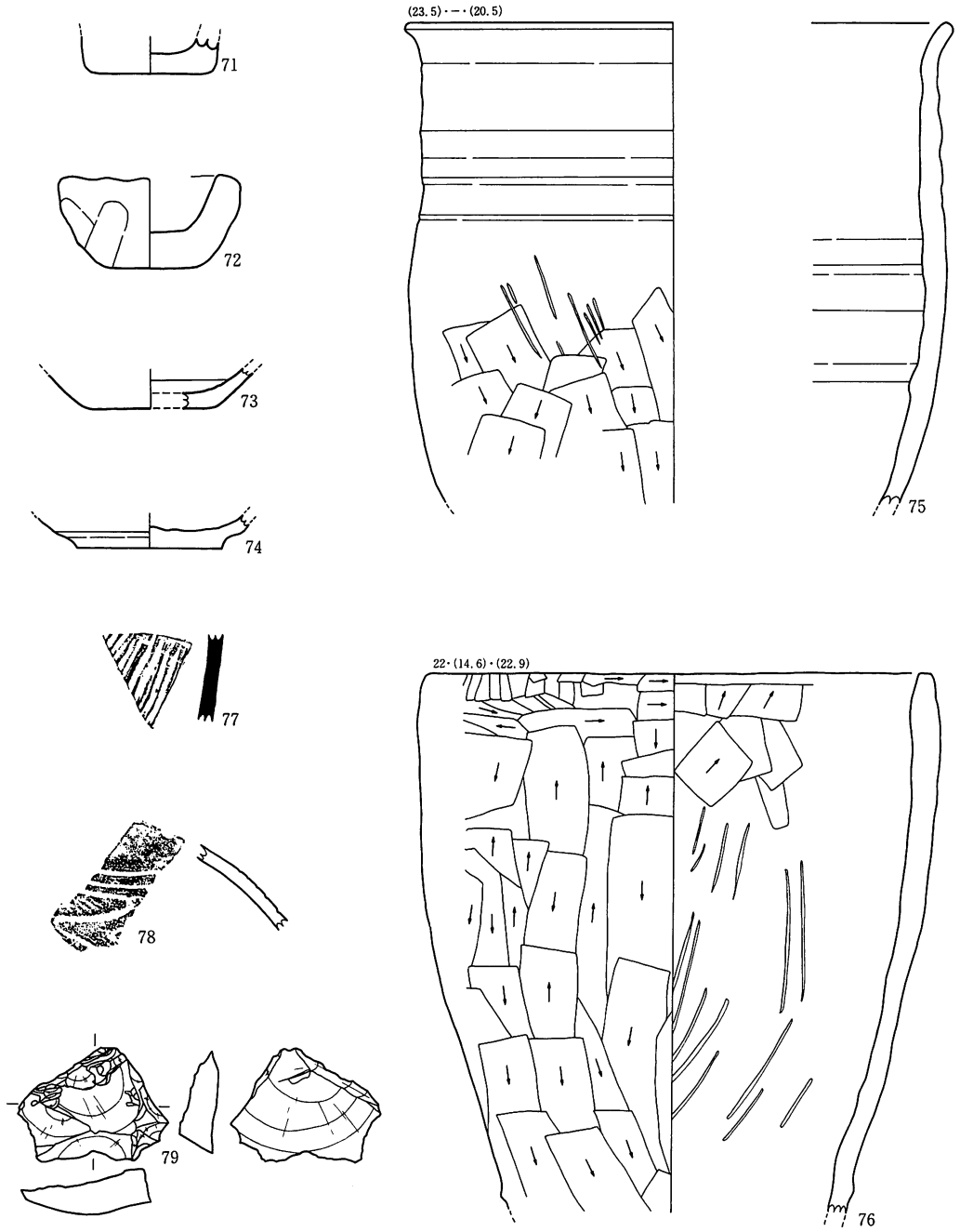


1. 10YR4/4　褐色シルト質土　表土層
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質土　浮石と水酸化鉄斑を含む
3. 10YR4/4　褐色シルト質土　堅く締まる
4. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　水酸化鉄斑を帯状に堆積をする
5. 7.5YR4/6　褐色砂質土　水酸化鉄斑との混合土
6. 10YR5/4　にぶい黄褐色粘土　壁の崩落土
7. 10YR4/4　褐色シルト質土　6層と同様
8. 10YR4/4　褐色シルト質土　締まりはなく軟質である
9. 10YR6/6　明黄褐色火山灰土　壁の崩落土
10. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質土　木根撹乱
11. 10YR4/4　褐色シルト質土　壁の崩落土
12. 10YR3/2　黒褐色土　締まりはなく軟質である
13. 10YR3/2　黒褐色土

第23図　3号堀断面図



第24図　1号堀出土遺物



71・72・79はS＝½
他はS＝⅓

第25図　3号堀出土遺物

(4)土塁

調査区では１・２号堀の東端部北側と３号堀東側の２カ所で検出されている。

１・２号堀土塁（第26図、写真図版19）は二郭の南東部に構築している。堀の北側は近年における牧草地造成、南側が改田工事等による攪乱・削平を受けている。本来は堀の北側全域に土塁を巡らしていたと推測される。遺存するのは全長25ｍほどで、崩落や流出のために詳細な規模は不詳である。上幅は２～３ｍ、下幅が４ｍ前後を測り、高さは現地表面から1.2m、１・２号堀の底面から5.7ｍである。

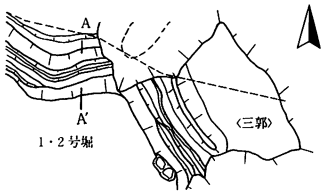
Ａ～Ａ′は土塁東側の断面で７層に大別される。１層は暗褐色土の表土層で植生根の混入が著しい。２～６層は盛土層で、黄褐色と明黄褐色シルト質土が互層で堆積をしている。径１～５㎝大の石を少量含み、全体に堅く締まっている。６層は褐色と黄褐色シルト質土の混合土でよく締まっている。盛土層は旧表土の上で厚さ約１ｍを測るものの、多くは堀側に崩落して堆積する様相を示している。７層は旧地表土で厚さ15～30㎝を測り、炭を微量に含み比較的堅く締まっている。

堀の南側は50～70㎝の厚さで黄褐色シルト質土の盛土整地層があり、防御用施設の外側に人為的な工事をしている事が確認された。旧地表面の上に盛土しており、１・２号堀東端部から３号堀の西側の縁沿いに幅４～６ｍ前後で巡っている。また、二郭側土塁と南側盛土整地層との比高は約50㎝である。

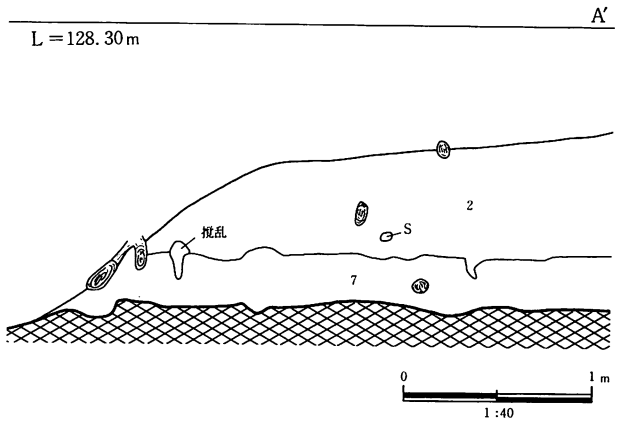
３号堀土塁（第27図、写真図版20・21）は堀の東側三郭に構築されており、現況は山林で遺存状態も良好である。規模は全長が約22ｍ、上幅が1.5～２ｍ、下幅が６～７ｍである。高さは現地表面から２ｍ前後で、３号堀の底面から5.2ｍを測る。

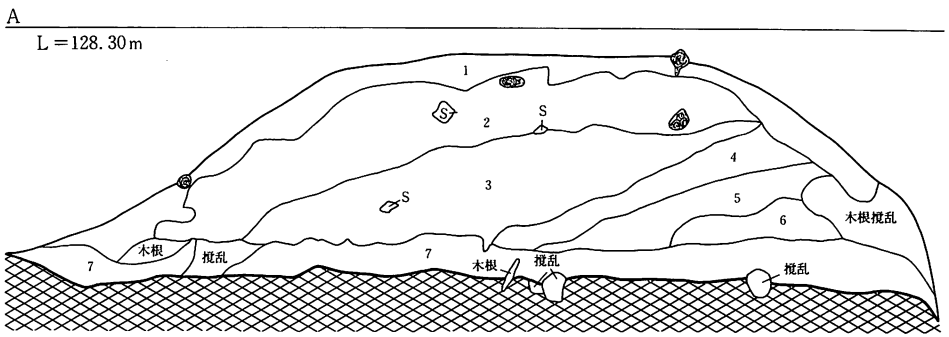
Ｂ～Ｂ′は土塁中央部南東側の断面で10層に大別される。表土層はすでに大部分が流出している。１～９層は盛土層で、１層は褐色シルト質土で乾燥が著しく全体に堅く締まっている。２層は黄褐色シルト質土と褐色土の混合土で堅く締まる。３・４層は黄褐色土を小ブロック状に含む混合土である。５～８層は黄褐色シルト質土で構成され、厚さが1.2ｍを測り、全体に堅く締まりやや粘性に富んでいる。８層は黒色土をブロック状に堆積している。９層は黒色シルト質土で締まりはなく軟らかい。10層は厚さ30～40㎝の旧地表土で微量の炭を含み、上半部から平安時代の土師器の坏と甕を多く出土している。特に中央部から北側に遺物が多く集中している。

堀の西側は旧地表土の上面に、にぶい黄褐色シルト質土の盛土整地層の広がりが確認され、１・２号堀の南側と同様に人為的な工事を行っている。厚さは20～30㎝を測り、幅４ｍ前後で堀の縁辺部を巡っている。三郭側土塁と西側盛土整地層との比高は80㎝ほどである。

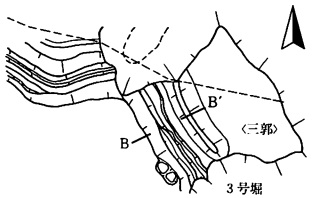


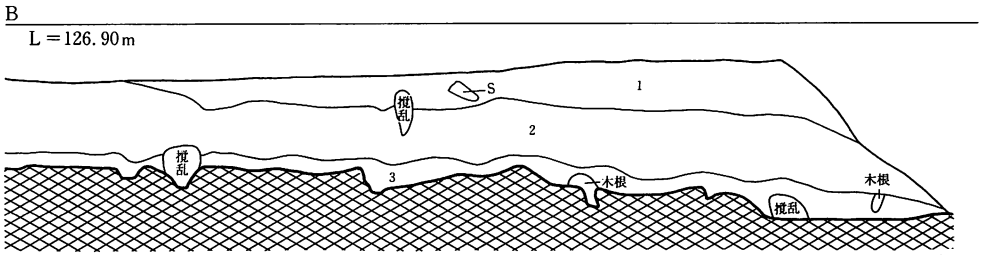
1. 10YR3/3　暗褐色土　表土層
2. 10YR5/6　暗褐色シルト質土　全体に堅く締まる
3. 10YR6/6　明黄褐色シルト質土　〃
4. 10YR5/6　黄褐色シルト質土　〃
5. 10YR6/6　明黄褐色シルト質土　〃
6. 10YR4/6　褐色シルト質土　黄褐色シルト質土との混合土
7. 10YR2/3　黒褐色シルト質土　炭を微量に含む旧地表土





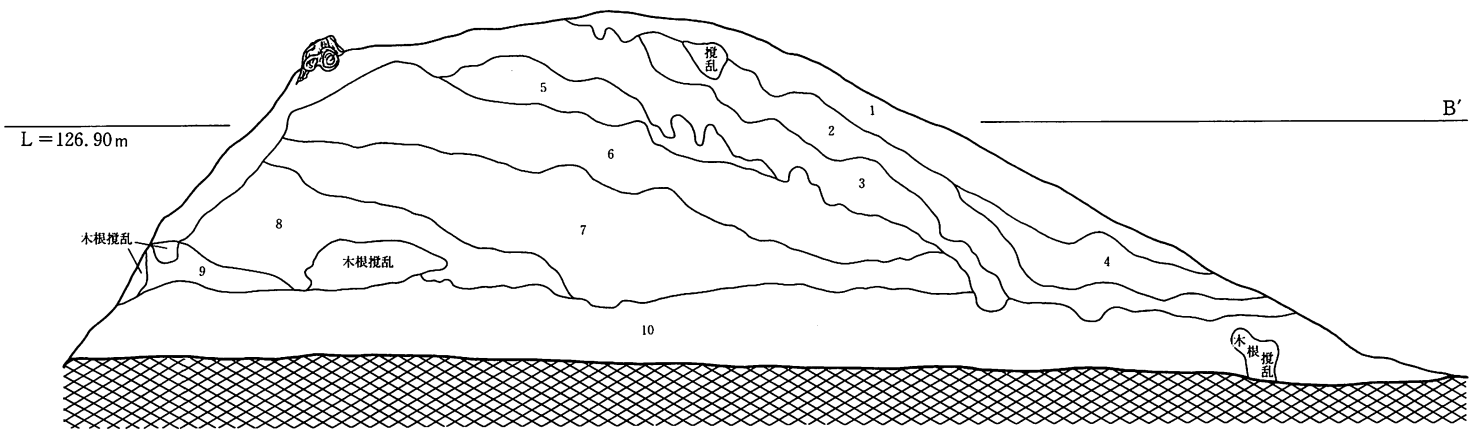
第26図　土塁（1）





1. 10YR3/1～5/4　黒褐色～にぶい黄褐色シルト質土　堅く締まった盛土
2. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　炭を微量に含む
3. 10YR3/2　黒褐色シルト質土　褐色土が小ブロックで含む

1. 10YR4/4　褐色シルト質土　全体に堅く締まる
2. 10YR3/4　暗褐色シルト質土　黄褐色土と褐色土の混合土
3. 10YR2/2　黒褐色シルト質土　黄褐色土を小ブロックで含む混合土
4. 10YR3/3　暗褐色シルト質土　浮石流火山灰土で全体に堅く締まる
5. 10YR5/6　黄褐色シルト質土　浮石流火山炭土で全体に堅く締まる
6. 10YR5/6　黄褐色シルト質土　流石流火山炭土で全体に堅く締まる
7. 10YR5/6　黄褐色シルト質土　流石流火山炭土で全体に堅く締まる
8. 10YR5/6　黄褐色シルト質土　流石流火山炭土で全体に堅く締まる
9. 10YR2/1　黒色シルト質土　締まりはなく全体に軟質である
10. 10YR1.7/1　黒色シルト質土　炭を微量に含み土師器を多量に出土する



第27図　土壁（2）

(5)柱穴状土坑

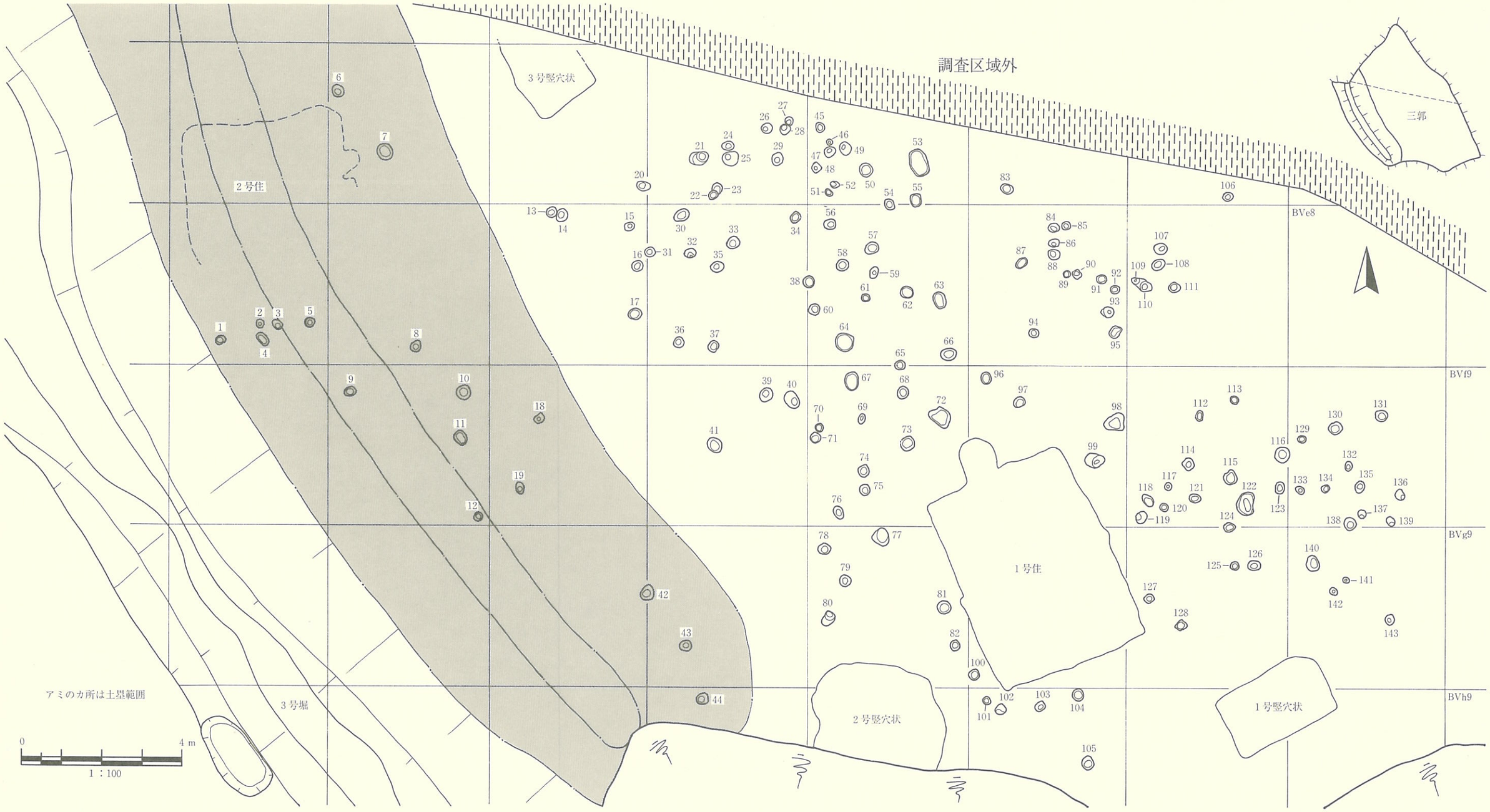
1～143号柱穴状土坑（第28図）

三郭の平場と3号堀東側の土塁下から大小合わせて143基検出しており、表土下位20～30cmのⅣ層上面において確認されたものである。平面形は方形20基、円形を基調とするもの29基、不整形30基、楕円形64基で、半数近くが楕円形で占められる。規模は長軸径が20～35cm、短軸径が20～30cmの範疇に約8割があり、深さは3.5cmから最大で61.8cmを測り、平均は18.3cmである。柱痕を確認できたのは深さが比較的深い数基だけで、径は10cm前後を測る。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成され、やや堅く締まっている。分布状況は崖線の内側から北西方向に散在しており、一部は北側の調査区域外に広がる様相を呈している。また、三郭から検出した5棟の住居跡との重複関係はなく、柵列や建物跡になる規則的な配置は認められない。

柱穴状土坑一覧表

柱穴No.	直径cm	深さcm	平面形	柱穴No.	直径cm	深さcm	平面形	柱穴No.	直径cm	深さcm	平面形
1	24×23	17.8	円形	49	32×26	9.2	楕円形	97	29×25	6.8	不整形
2	20×16	14.1	楕円形	50	32×31	10.4	円形	98	56×42	14.2	〃
3	31×20	7.5	〃	51	19×15	19.6	楕円形	99	44×36	18.0	〃
4	36×23	6.5	〃	52	24×15	2.6	〃	100	26×25	11.9	方形
5	24×22	31.2	円形	53	65×44	3.5	方形	101	19×17	22.0	楕円形
6	30×24	13.9	楕円形	54	31×22	13.0	楕円形	102	27×22	7.2	〃
7	38×37	4.0	円形	55	31×26	25.9	方形	103	27×20	14.1	〃
8	30×24	22.4	楕円形	56	30×27	25.0	楕円形	104	28×28	10.8	円形
9	29×26	9.0	〃	57	33×30	6.5	円形	105	35×30	21.5	楕円形
10	35×34	24.1	円形	58	28×27	14.3	円形	106	21×19	17.0	円形
11	38×26	11.9	楕円形	59	29×19	19.6	方形	107	32×30	21.5	不整形
12	24×23	7.8	円形	60	29×25	6.3	不整形	108	31×25	19.3	楕円形
13	31×26	35.7	円形	61	22×21	9.4	楕円形	109	21×20	10.3	不整形
14	36×28	36.0	楕円形	62	32×31	5.3	〃	110	28×27	15.4	楕円形
15	26×20	20.0	〃	63	40×28	7.1	〃	111	27×24	8.3	不整形
16	31×28	16.2	〃	64	48×45	4.8	〃	112	25×22	10.3	〃
17	31×29	25.6	〃	65	27×25	17.0	方形	113	21×19	13.5	楕円形
18	29×27	5.6	不整形	66	40×32	35.9	楕円形	114	26×25	20.8	方形
19	30×23	8.6	楕円形	67	44×35	29.0	〃	115	31×30	12.5	不整形
20	31×26	24.4	〃	68	32×30	10.3	〃	116	37×34	20.1	楕円形
21	45×30	27.7	方形	69	27×19	22.4	〃	117	20×19	8.3	〃
22	23×22	17.3	円形	70	23×21	13.8	〃	118	37×25	13.1	〃
23	27×20	8.0	不整形	71	30×27	23.2	円形状	119	32×27	14.6	方形
24	29×27	18.7	方形	72	49×43	5.8	不整形	120	20×18	9.0	円形
25	48×33	19.7	不整形	73	36×33	14.1	楕円形	121	28×21	10.1	楕円形
26	27×26	21.5	方形	74	30×26	21.9	方形	122	60×39	62.5	不整形
27	22×19	12.1	不整形	75	25×24	8.1	円形	123	31×21	72.5	楕円形
28	26×23	24.5	円形	76	36×23	8.7	楕円形	124	30×23	7.9	方形
29	33×29	22.3	楕円形	77	43×40	29.4	方形	125	22×18	13.1	楕円形
30	40×28	12.4	〃	78	32×27	18.7	楕円形	126	30×26	37.5	〃
31	29×26	25.4	方形	79	29×26	9.1	円形	127	22×20	15.4	〃
32	27×26	32.1	円形	80	43×27	19.2	不整形	128	26×21	9.5	方形
33	33×30	41.2	〃	81	35×32	19.4	楕円形	129	20×17	10.3	楕円形
34	26×23	14.1	方形	82	26×26	24.3	円形	130	33×27	11.2	不整形
35	30×29	13.5	不整形	83	31×25	7.4	方形	131	31×31	29.6	円形
36	31×27	28.0	〃	84	27×24	10.8	不整形	132	27×17	17.5	楕円形
37	29×24	27.0	〃	85	22×21	8.8	楕円形	133	24×17	57.4	〃
38	30×30	12.3	円形	86	29×20	15.3	不整形	134	19×18	12.9	〃
39	35×30	24.6	不整形	87	30×22	4.8	楕円形	135	30×23	61.8	不整形
40	50×30	13.5	〃	88	27×23	9.8	方形	136	27×23	29.4	楕円形
41	40×32	7.4	方形	89	19×17	7.0	楕円形	137	23×18	65.6	〃
42	39×35	13.6	円形	90	24×18	17.5	不整形	138	33×31	38.7	〃
43	31×30	24.4	〃	91	23×22	13.8	円形	139	23×18	29.3	〃
44	29×27	20.6	〃	92	22×19	8.2	楕円形	140	37×27	60.7	不整形
45	26×22	13.6	〃	93	33×25	22.2	不整形	141	17×15	12.5	〃
46	18×16	13.2	〃	94	25×25	17.7	円形	142	19×17	21.8	楕円形
47	27×23	9.9	楕円形	95	30×24	12.6	方形	143	24×23	30.1	〃
48	35×27	13.7	不整形	96	27×25	12.9	楕円形				



第28図　柱穴状土坑（三郭）

5．その他の遺構

(1)土坑

14号土坑（第29図、写真図版22）

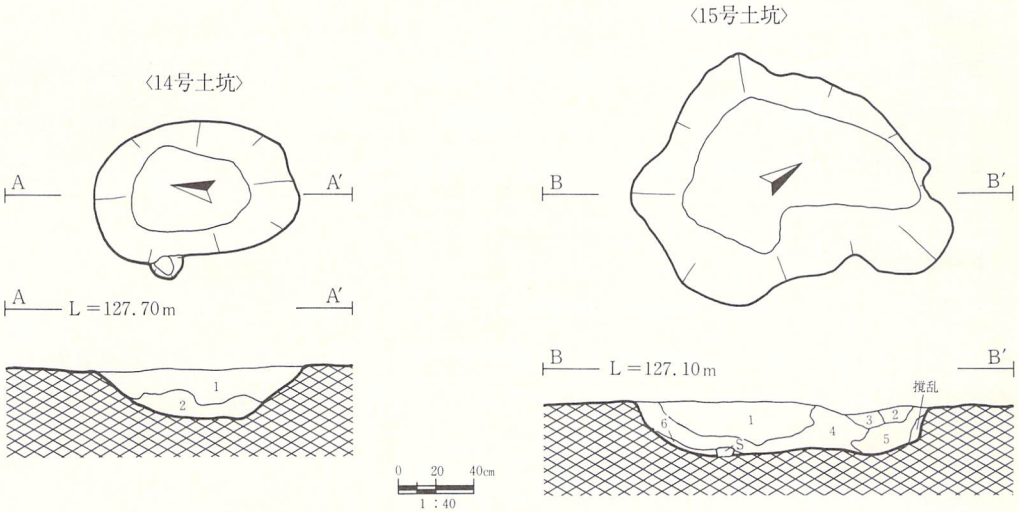
調査区の西側（ＡⅡｉ６区）に位置し、Ⅳ層上面において検出されている。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部が110×72cm、底部が63×40cmである。壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がり、深さは中央部付近で26cmを測る。底面はほぼ平坦で堅く締まっている。

埋土は黒褐色シルト質土で構成され、上位に黄褐色土が小ブロック状に堆積し、全体に炭化物を少量混入している。遺物の出土はなく時期は不明である。

15号土坑（第29図、写真図版22）

14号土坑と同様に西側調査区（ＢⅢｃ６～７区）に位置している。平面形は不整形状を呈し、規模は開口部が160×110cm、底部が117×80cm、深さが最大28cmを測る。壁は西側で緩やかに、東側がやや急傾斜で底面から立ち上がっている。底面は多少凹凸があり、締まっている。

埋土はシルト質粘土を主体とする３層に大別される。上位は明黄褐色粘土で堅く締まり、下位は黒褐色シルト質土で構成され、壁際に明黄褐色粘土がブロック状に堆積をしている。時期は遺物の出土がないために不明である。



1. 10YR$^{2/2}$　黒褐色シルト質土　炭化物を少量混入
2. 10YR$^{3/1}$　黒褐色シルト質土　〃

1. 10YR$^{6/8}$　明黄褐色粘土　堅く締まる
2. 10YR$^{6/6}$　明黄褐色粘土　黒褐色土を斑状に混入
3. 10YR$^{2/2}$　黒褐色シルト質土　明黄色褐色粘土がブロック状で混入
4. 10YR$^{2/2}$　黒褐色シルト質土
5. 10YR$^{3/2}$　黒褐色シルト質土　黄褐色土が少量混入
6. 10YR$^{5/6}$　黄褐色粘土　２層に類似

第29図　土坑（２）

(2)焼土

1号焼土（第30図、写真図版23）

調査区の中央部北側（BⅣg7区）に位置している。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層にかけてである。平面形は不整形状に広がり、規模は55×40cm、焼成の厚さが4cmである。赤褐色に強く焼成を受けて堅く締まっている。現地性の焼土で、時期は遺物の出土がなく不明である。

2号焼土（第30図、写真図版23）

調査区中央部の南側（CⅣg6区）に位置している。検出はⅣ層上面である。平面形は楕円形状を呈し、規模は83×62cmである。炭と黒褐色シルト質土を含む混合土で、焼成の厚さは最大で3cmを測る。現地性の焼土で、遺物の出土はなく時期が不明である。

3号焼土（第30図、写真図版23）

調査区中央部の南寄り（CⅣd4区）に位置し、Ⅳ層上面において検出されている。木根による攪乱が著しく平面形はやや不整円形状に広がり、規模は63×57cm、焼成の厚さが最大9cmである。一部は強く焼成を受けて赤褐色を呈しており、炭と暗褐色シルト質土を含む混合土である。1・2号焼土と同様に現地性の焼土で、遺物の出土はなく時期が不明である。

4号焼土（第30図、写真図版23）

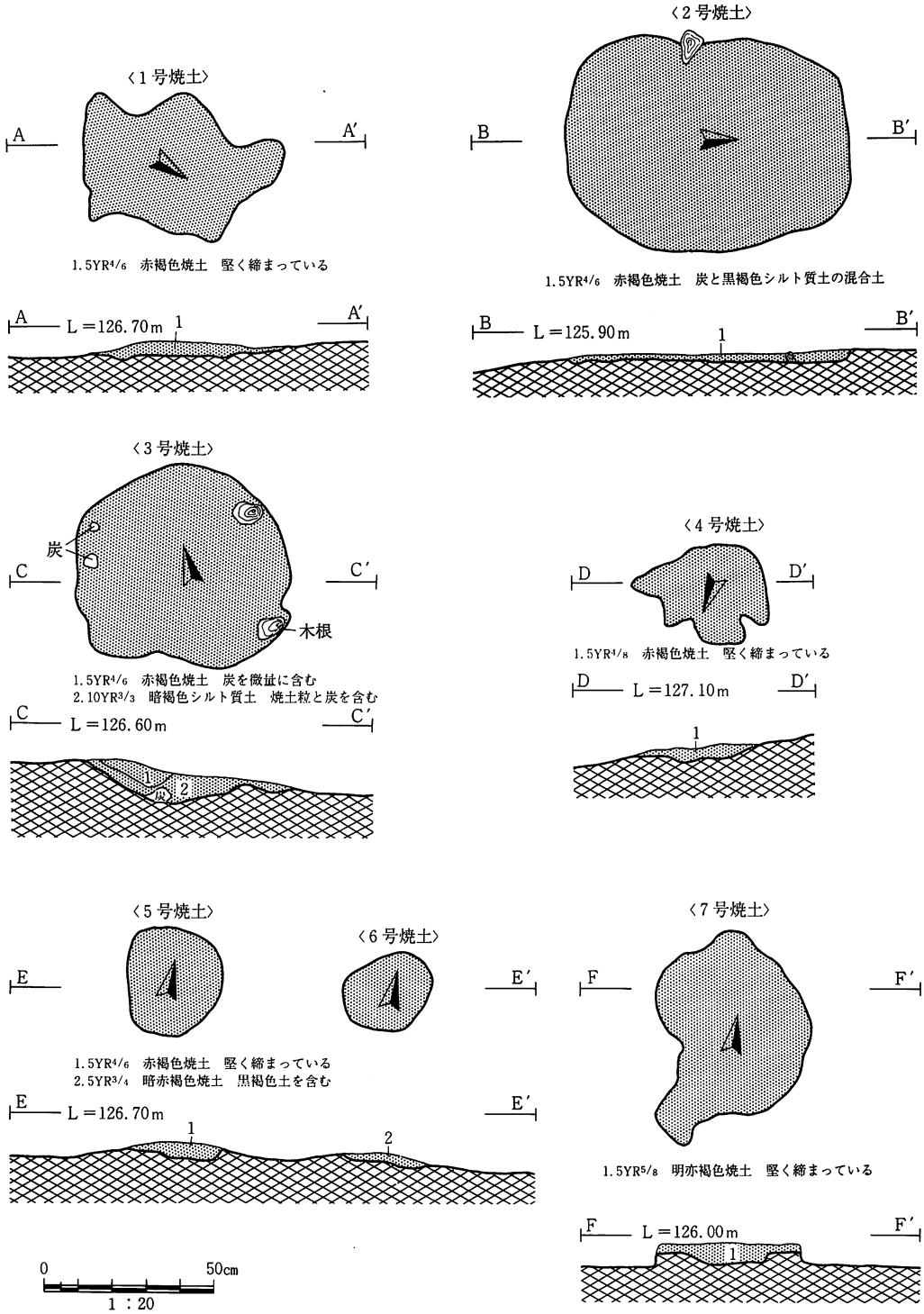
調査区東側の三郭（BVe2区）に位置している。検出はⅣ層上面である。平面形は不整形状に広がり、規模は40×30cmである。比較的強く焼成を受けて堅く締まり、厚さは4cm前後を測る。現地性の焼土で、時期は遺物の出土がなく不明である。

5号焼土（第30図）

三郭（BVd3区）の西側に位置し、東側35cmに6号焼土が隣接をしている。検出はⅣ層上面である。平面形はやや楕円形気味を呈し、規模は32×27cm、焼成の厚さが最大4cmである。赤褐色に焼成を受けている現地性の焼土で、遺物の出土はなく時期は不明である。

6号焼土（第30図）

三郭の5号焼土東側35cmに位置している。検出面は5号焼土と同様である。平面形は楕円形気味を呈し、規模は37×22cmである。黒褐色シルト質土との混合土で、焼成の厚さは3cm前後である。現地性の焼土で、時期は遺物の出土がなく不明である。


〈1号焼土〉
A
A′
1.5YR4/6　赤褐色焼土　堅く締まっている
A
L＝126.70m
1
A′
〈2号焼土〉
B
B′
1.5YR4/6　赤褐色焼土　炭と黒褐色シルト質土の混合土
B
L＝125.90m
1
B′
〈3号焼土〉
炭
C
C′
木根
1.5YR4/6　赤褐色焼土　炭を微量に含む
2.10YR3/3　暗褐色シルト質土　焼土粒と炭を含む
C
L＝126.60m
C′
1
2
炭
〈4号焼土〉
D
D′
1.5YR4/8　赤褐色焼土　堅く締まっている
D
L＝127.10m
D′
1
〈5号焼土〉
〈6号焼土〉
E
E′
1.5YR4/6　赤褐色焼土　堅く締まっている
2.5YR3/4　暗赤褐色焼土　黒褐色土を含む
E
L＝126.70m
E′
1
2
〈7号焼土〉
F
F′
1.5YR5/8　明赤褐色焼土　堅く締まっている
F
L＝126.00m
F′
1
0
50cm
1：20

第30図　焼土（2）

7号焼土（第30図、写真図版23）

三郭の西端部（ＢＶｄ１区）の３号堀東側土塁下位に位置している。検出はⅣ層上面である。南北方向に長軸を有す不整形状の広がりを呈し、規模は54×45cm、焼成の厚さが最大６cmである。５・６号焼土と同様に現地性の焼土である。遺物の出土はなく時期は不明である。

(3)溝跡

1号溝跡（第31・32図、写真図版24）

調査区西側のＡⅡｊ４～ＢⅡｄ５区にかけ位置している。検出はⅢ層中位～Ⅳ層において確認されている。南端部で２号溝と重複しており、新旧関係は切っていることから当遺構の方が新しい。上部は改田工事等による攪乱・削平があり、北側は市道の下に続いているために詳細な規模は不明である。北々西～南々東方向に延びており、全長は18.5m、上幅が40～75cm、下幅が34～70cm、深さ4.5～最大9.3cmを測る。南側に行くにしたがって深さは浅くなっている。断面形は皿状を呈している。底面は多少凹凸が見られる。

埋土は黒褐色シルト質土を主体とする２層で構成されている。下端部には黄褐色土をブロック状に含み、やや堅く締まり粘性に富んでいる。

遺物は出土していないが、埋土の様相から比較的新しい溝と推測される。

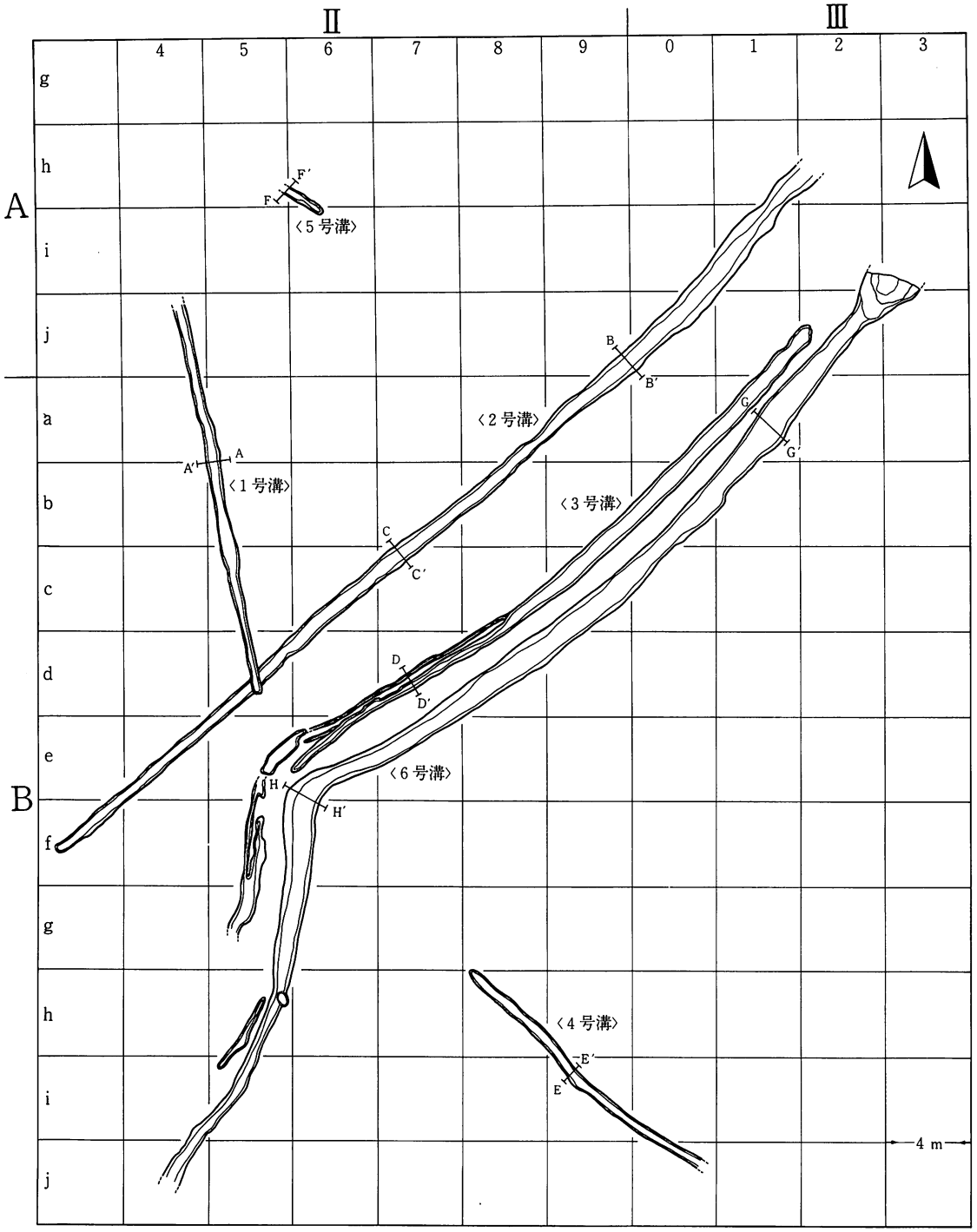
2号溝跡（第31・32図、写真図版24）

調査区の西側に位置し、Ⅳ層上面で検出している。南東側2.5～５ｍに３号溝が並行し、南西側で１号溝、北東側で１・２号堀と重複している。新旧関係は切り合いから新しい順に１号溝、２号溝、１・２号堀となる。１号溝と同様に遺構の削平が著しく、下部が遺存するだけで規模の詳細は不明である。北東～南西方向に直線的に延びており、全長は約48m、上幅が50～125cm、下幅が25～60cm、深さが12～24cm前後を測る。中央部の北寄りで攪乱カ所があるものの、幅は北東側が南東側に比べて広くなっている。断面形は皿状ないし逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。

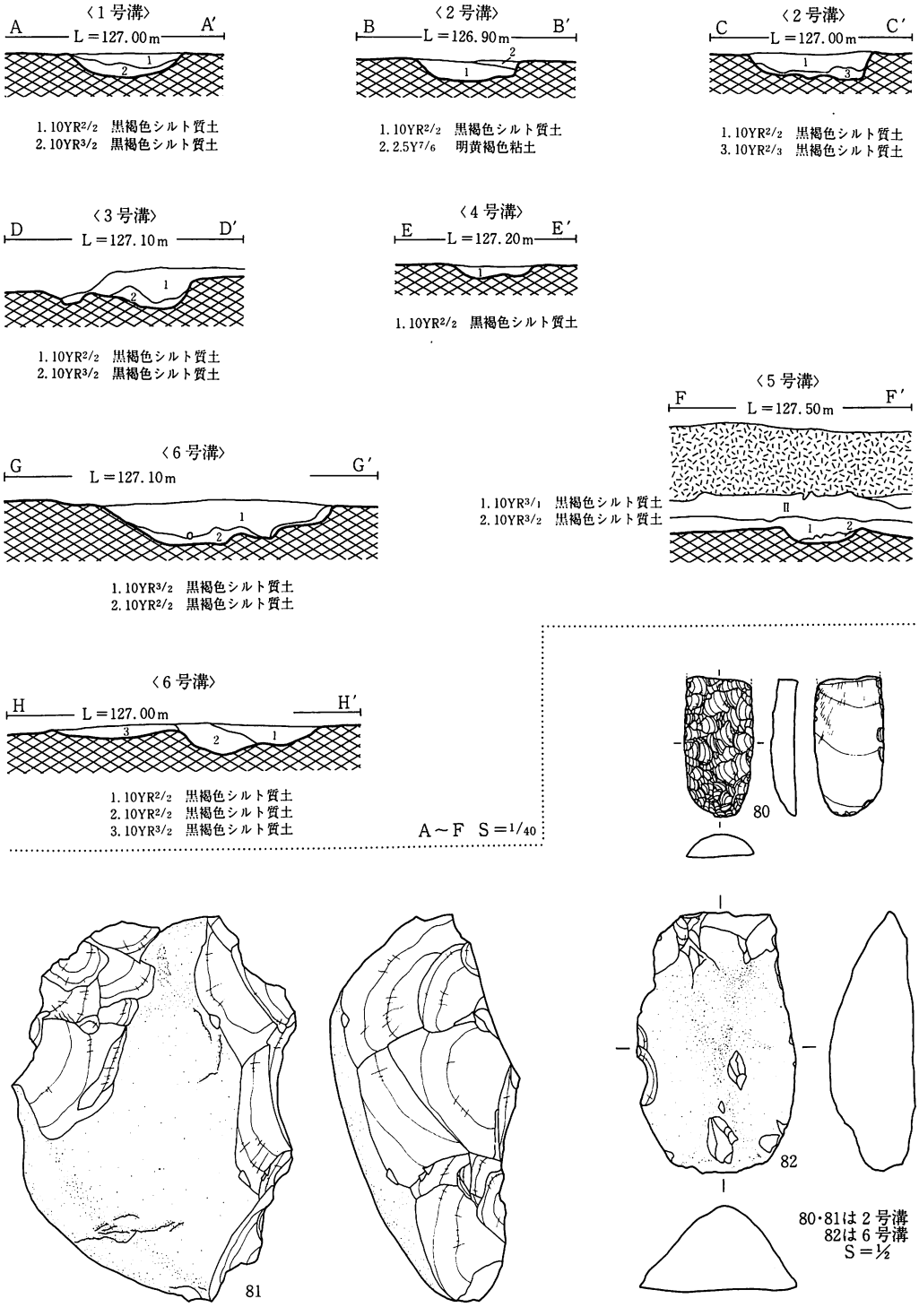
埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成されている。下部や壁際には明黄褐色～にぶい黄色粘土がブロック状に堆積し、全体に堅く締まっている。

遺物は埋土から流れ込みと思われる縄文時代の石器が数点出土しており、図面を掲載したのは内２点である。80は頭部を欠損した石箆で、刃部は片面から丁寧に調整加工を施している。現存長4.2cm、幅2.1cm、厚さ0.7cmを測る。石質は珪質細凝灰岩である。81は側面と裏面に剥離痕がある石核で、石質は珪質細凝灰岩である。長さ11.4cm、幅8.3cmである。

時期は不明であるが、旧水田に伴う用水路と推測される。


Ⅱ
Ⅲ
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
g
h
i
j
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
A
B
〈5号溝〉
〈2号溝〉
〈1号溝〉
〈3号溝〉
〈6号溝〉
〈4号溝〉
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
4 m

第31図　溝跡


〈1号溝〉
A
A′
L＝127.00m
1
2
1. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
2. 10YR3/2　黒褐色シルト質土
〈2号溝〉
B
B′
L＝126.90m
2
1
1. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
2. 2.5Y7/6　明黄褐色粘土
〈2号溝〉
C
C′
L＝127.00m
1
3
1. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
3. 10YR2/3　黒褐色シルト質土
〈3号溝〉
D
D′
L＝127.10m
1
2
1. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
2. 10YR3/2　黒褐色シルト質土
〈4号溝〉
E
E′
L＝127.20m
1
1. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
〈5号溝〉
F
F′
L＝127.50m
Ⅱ
1
2
1. 10YR3/1　黒褐色シルト質土
2. 10YR3/2　黒褐色シルト質土
〈6号溝〉
G
G′
L＝127.10m
1
2
1. 10YR3/2　黒褐色シルト質土
2. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
〈6号溝〉
H
H′
L＝127.00m
3
2
1
1. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
2. 10YR2/2　黒褐色シルト質土
3. 10YR3/2　黒褐色シルト質土
A～F　S＝1/40
80
81
82
80・81は2号溝
82は6号溝
S＝½

第32図　溝跡・出土遺物

3号溝跡（第31・32図、写真図版24）

調査区西側のＡⅢｊ２～ＢⅡｇ５区にかけ位置している。検出はⅣ層上面において確認されている。北西側2.5～５ｍに２号溝、南東側30㎝～1.3ｍに６号溝が並行している。他の溝と同様改田工事等による削平が著しく、下部が遺存するだけで詳細な規模は不明である。溝は北東～南西方向に向かって19ｍほど直進し、次にやや西北西に向きを変え14.5ｍ行き、南側にくの字状に湾曲しながら８ｍ延びている。南西部の一部と南端部は削平を受けて遺存していない。全長は41.5ｍ、上幅が60～95㎝、下幅が45～70㎝、深さ６～19㎝前後を測る。南西側中央部寄りから北東側の底面は浅い段になっており、一部に凹凸や攪乱が見られるものの平坦である。断面形は浅いⅢ状や逆台形と一定していない。

埋土は黒褐色シルト質土で構成されており、黄褐色土をブロック状に含んでいる。やや堅く締まり粘性がある。

遺物の出土はなく時期が不明である。

4号溝跡（第31・32図、写真図版25）

調査区西側南寄りのＢⅡｈ８～ＢⅢｊ０区にかけ位置し、Ⅳ層上面において検出している。南側は削平や攪乱が著しく、下端部が遺存するだけで詳細な規模は不明である。北西～南東方向に多少曲がりながら延びており、全長は14ｍ、上幅が45～56㎝、下幅が35～45㎝である。深さは３～最大10㎝を測る。断面形はⅢ状や逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成されている。にぶい黄褐色土を少量含み、堅く締まり粘性に富んでいる。

遺物の出土はなく３号溝と同様に時期が不明である。

5号溝跡（第31・32図、写真図版25）

調査区西端部のＡⅡｈ６区に位置している。検出はⅢ層中位～Ⅳ層上面において確認されている。上部は削平や攪乱があり、北西側が市道の下に続いているために詳細な規模は不明である。北西～南東方向に直線的に延びており、全長は約４ｍ、上幅が40㎝前後、下幅が15～30㎝を測る。深さは全体的に浅く４～６㎝である。断面形は浅いⅢ状を呈し、底面は凹凸もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で、やや粘性があり堅く締まっている。下端部には暗褐色土がブロック状に含んでいる。

遺物の出土もなく時期は不明である。埋土は１号溝と同様である事から比較的新しい溝と推測される。

6号溝跡（第31・32図、写真図版24・25）

調査区西側のＡⅢｉ３～ＢⅡｊ４区にかけ位置し、Ⅳ層上面において検出している。北東部で１・２号堀（中世）と重複し、新旧関係は堀を切っていることから当遺構の方が新しい。西側30cm～1.3mに３号溝が並行し、南側11mに４号溝が隣接している。３号溝と同様に削平が著しく、下部が遺存するだけで詳細な規模は不明である。溝は北東～南西方向に向かってやや弓状を呈しながら38m行き、南側にくの字状に湾曲しながら19m延びている。南端部は削平を受けて遺存していない。全長は約57m、上幅が50～140cm、下幅が25～100cm、深さ２～25cm前後を測る。断面形は浅い皿状や逆台形状である。底面は浅い段差が見られ、ほぼ平坦である。

埋土は黒褐色シルト質土を主体としており、下部に黄褐色土のブロックや水酸化鉄斑を含んでいる。全体に堅く締まり粘性がある。

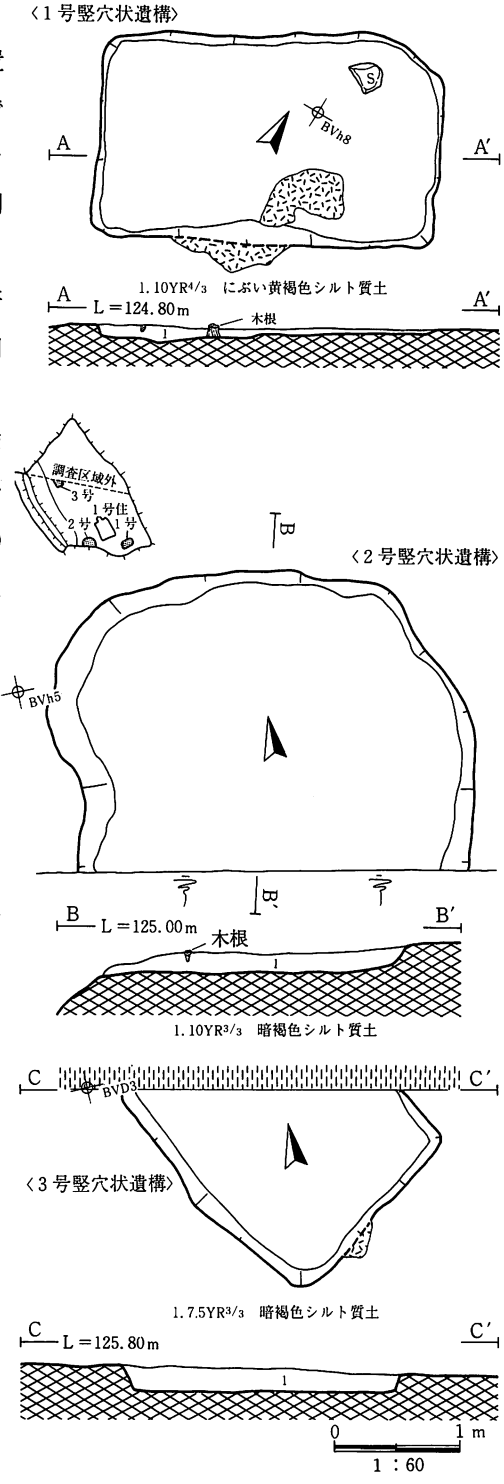
遺物は流れ込みの縄文時代の石器が１点出土している。82は剥片で側縁の一部に調整加工が見られ、石質は珪質泥岩である。

時期は近年の水田に伴う用水路と推測される。

(4)竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第33図、写真図版26）

調査区東側の三郭（ＢＶ区）に位置しており、北西側３mに１号住居跡、西側７mに２号竪穴状遺構が隣接する。Ⅳ層上面において確認されているが、上部の大部分は削平を受け僅かに床面近くが遺存するだけである。平面形は東北東～西南西方向に長軸を有する隅丸長方形状を呈し、規模は2.7×1.7mである。



第33図　１～３号竪穴状遺構

埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層で構成され、堅く締まっている。人為的に埋め戻された様相を示している。壁は床面から直に立ち上がり、壁高は東壁11cm、西壁５cm、南壁10cm、北壁４cmを測る。床面は木痕による凹凸が多少あるものの全体に堅く締まっている。柱穴は検出されない。北隅の床上には径25×22cm、厚さ５cmの半分欠損した亜角礫が置かれてある。用途は不明である。

時期を決定する遺物は出土していない。

２号竪穴状遺構（第33図、写真図版26・27）

三郭（ＢＶ区）の南側に位置しており、北東側３ｍに１号住居跡、東側７ｍに１号竪穴状遺構が隣接する。検出はⅣ層上面で確認されている。遺構の南側は流出や崩落をしていることから平面形の詳細が不明である。遺存する形状から不整長方形ないし楕円形状を呈すると推測される。検出された規模は東西3.2×南北（2.4）ｍを測る。

埋土は暗褐色シルト質土の単層で構成され、全体に堅く締まり微量の炭を含んでいる。壁は床面から緩やかに立ち上がり、壁高は東壁15cm、西壁18cm、北壁24cmである。床面は多少攪乱や凹凸があり堅く締まっている。柱穴は検出されない。

遺物は流れ込みのロクロ成形の土師器の破片が埋土上位から数点出土したのみで、時期が不明である。

３号竪穴状遺構（第33図、写真図版27）

三郭（ＢＶ区）の中央部西寄りに位置し、Ⅳ層上面において確認されている。西南西側約５ｍに２号住居跡が隣接している。遺構の上部の大部分は削平されており、下部が僅かに遺存するのみである。北側は調査区域外に続くことから、平面形と規模の詳細が不明である。検出された規模は（2.1）×1.74ｍで、平面形は１号竪穴状遺構と類似する隅丸長方形を呈すると推測される。

埋土は暗褐色シルト質土の単層で構成され、黄褐色土がブロック状に含まれる。やや締まりがあり、人為的に埋め戻された様相を示している。壁は床面から急傾斜に立ち上がり、壁高は11～20cm前後を測る。床面は木痕による凹凸があるものの、ほぼ平坦で堅く締まっている。柱穴は検出されない。

遺物は埋土上位から流れ込みのロクロ成形の土師器（坏と甕）破片が数点出土している。１・２号竪穴状遺構と同様に時期は不明である。

(5)掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第34図、写真図版28）

調査区の中央部西寄りに位置しており、北東側5mに4号掘立柱建物、西側4mに2号掘立柱建物が隣接している。規模は桁行3間（7.20m）、梁行2間（4m）である。四面に庇ないし縁と思われる柱穴配置を持ち、棟方向は北西～南東を示し、北に対して49度西偏している。

身舎の桁行柱間寸法は南西側柱穴ＢＰ$_1$から2.40m＋2.35m＋2.35m、北東側柱穴ＤＰ$_1$から2.45m＋2.45m＋2.35mである。梁行柱間寸法は南西側柱穴ＢＰ$_1$から3.95m、南西側柱穴ＢＰ$_4$から2.15m＋1.90mである。庇は南西側柱穴ＡＰ$_1$から1.05m＋1.30m＋2.40m＋2.40m、北東側柱穴ＥＰ$_1$から2.40m＋2.40m＋2.45m、北西側2m、南東側4.20mである。北東列は歪んでおり身舎とは直行していない。

柱穴の掘り方規模は径21～50cm、深さ13～52cmを測り、平面形は円形を基調とするものが多くを占めている。礎石を遺存する柱穴は桁行側のＤＰ$_3$と庇側のＥＰ$_1$である。柱痕は11柱穴から確認されており、径8～22cmを測り、庇側の規模が小さい。埋土は黄褐色～明黄褐色土と黒褐色土を斑状に含む混合土で占められている。

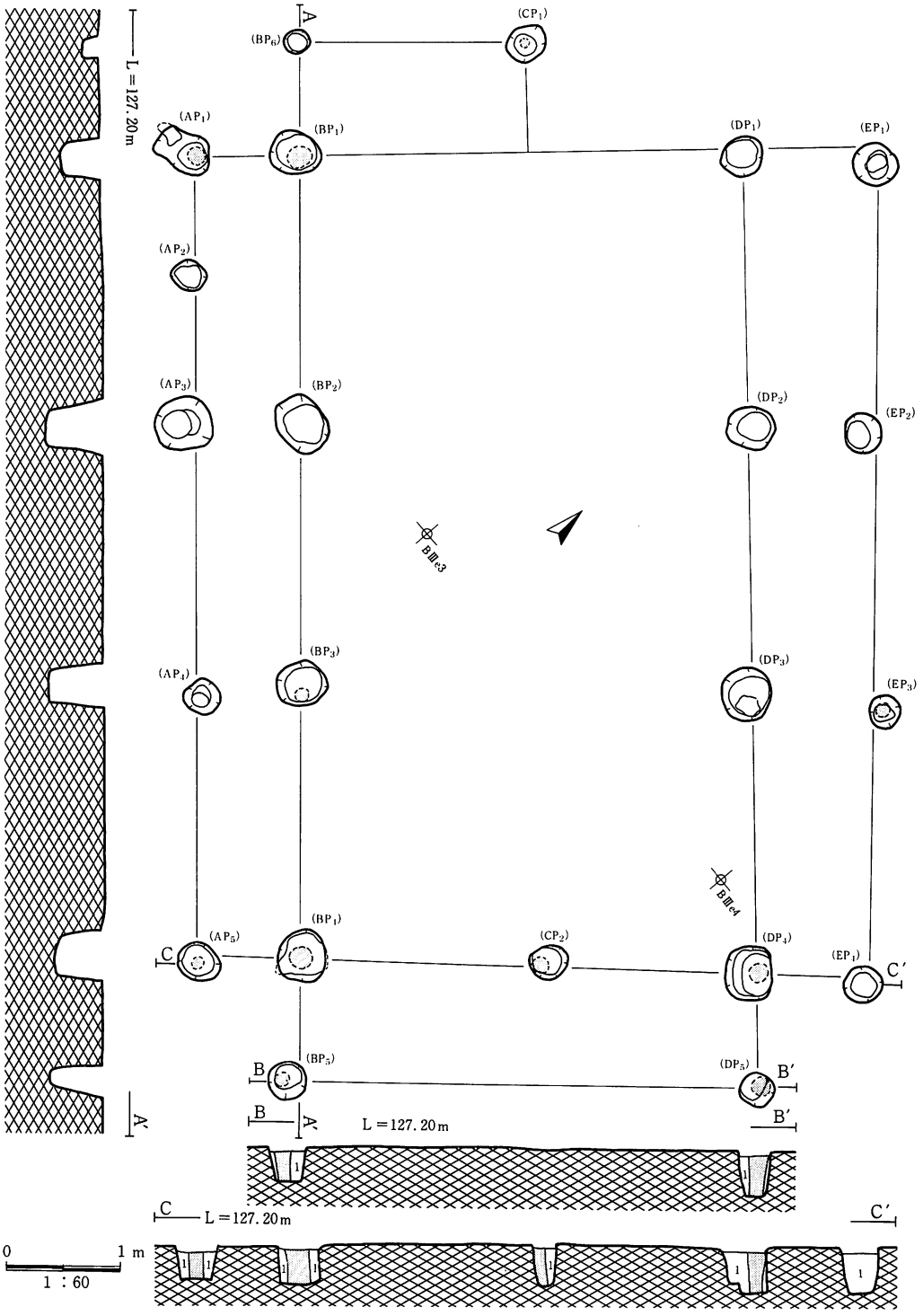
PNO	ＡＰ$_1$	ＡＰ$_2$	ＡＰ$_3$	ＡＰ$_4$	ＡＰ$_5$	ＢＰ$_1$	ＢＰ$_2$	ＢＰ$_3$
直径cm	50×34	30×26	50×45	31×29	37×33	46×37	50×41	45×38
深さcm	27	18	31	32	38	35	52	50
PNO	ＢＰ$_4$	ＢＰ$_5$	ＢＰ$_6$	ＣＰ$_1$	ＣＰ$_2$	ＤＰ$_1$	ＤＰ$_2$	ＤＰ$_3$
直径cm	46×41	34×33	24×21	36×31	33×28	36×34	41×36	45×45
深さcm	42	46	14	13	42	46	38	40
PNO	ＤＰ$_4$	ＤＰ$_5$	ＥＰ$_1$	ＥＰ$_2$	ＥＰ$_3$	ＥＰ$_4$		
直径cm	47×42	28×27	38×35	35×31	29×27	34×31		
深さcm	46	41	41	40	28	38		

時期は遺物の出土がなく不明である。

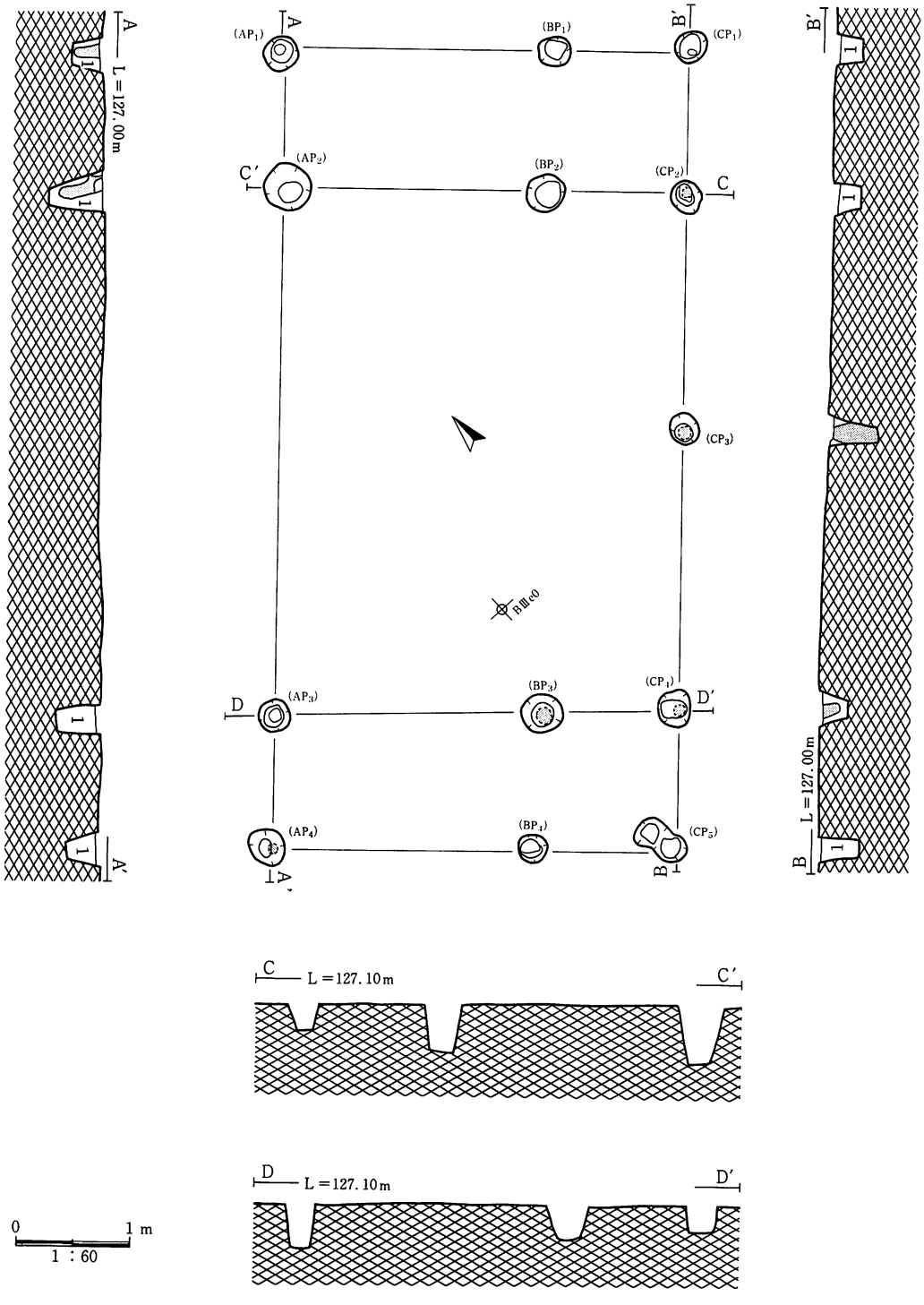
2号掘立柱建物跡（第35・36図、写真図版29・35）

調査区西側に位置しており、東側約4mに1号掘立柱建物が隣接し、北西側1.50mに6号溝が並行している。規模は桁行2間（4.63m）、梁行2間（3.55m）で、北東と南西側の二面に庇を持っている。棟方向は北東～南西を示し、北に対して約43度東偏している。

身舎の桁行柱間寸法は北西側柱穴ＡＰ$_2$から1間4.65m、南東側柱穴ＣＰ$_2$から2.15m＋2.45m



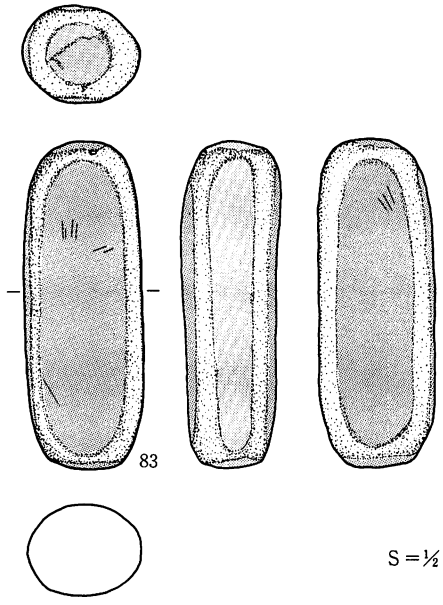
第34図　1号掘立柱建物跡



第35図　2号掘立柱建物跡

である。梁行柱間寸法は北東側柱穴ＡＰ$_2$から2.35ｍ＋1.20ｍ、南西側柱穴ＡＰ$_3$から2.35ｍ＋1.20ｍである。庇は北東側柱穴ＡＰ$_1$から2.45ｍ＋1.20ｍ、南西側柱穴ＡＰ$_4$から2.30ｍ＋1.25ｍを測る。身舎との距離は1.2～1.25ｍである。

柱穴の掘り方規模は径24～47㎝、深さ20～最大52㎝である。平面形は円形を基調とするものと楕円形があり、前者が大部分を占めている。柱痕は６柱穴から確認されており、径が８～15㎝前後である。埋土は１号掘立柱建物と同様な明黄褐色土に黒褐色土を斑文状に含む混合土で構成されている。



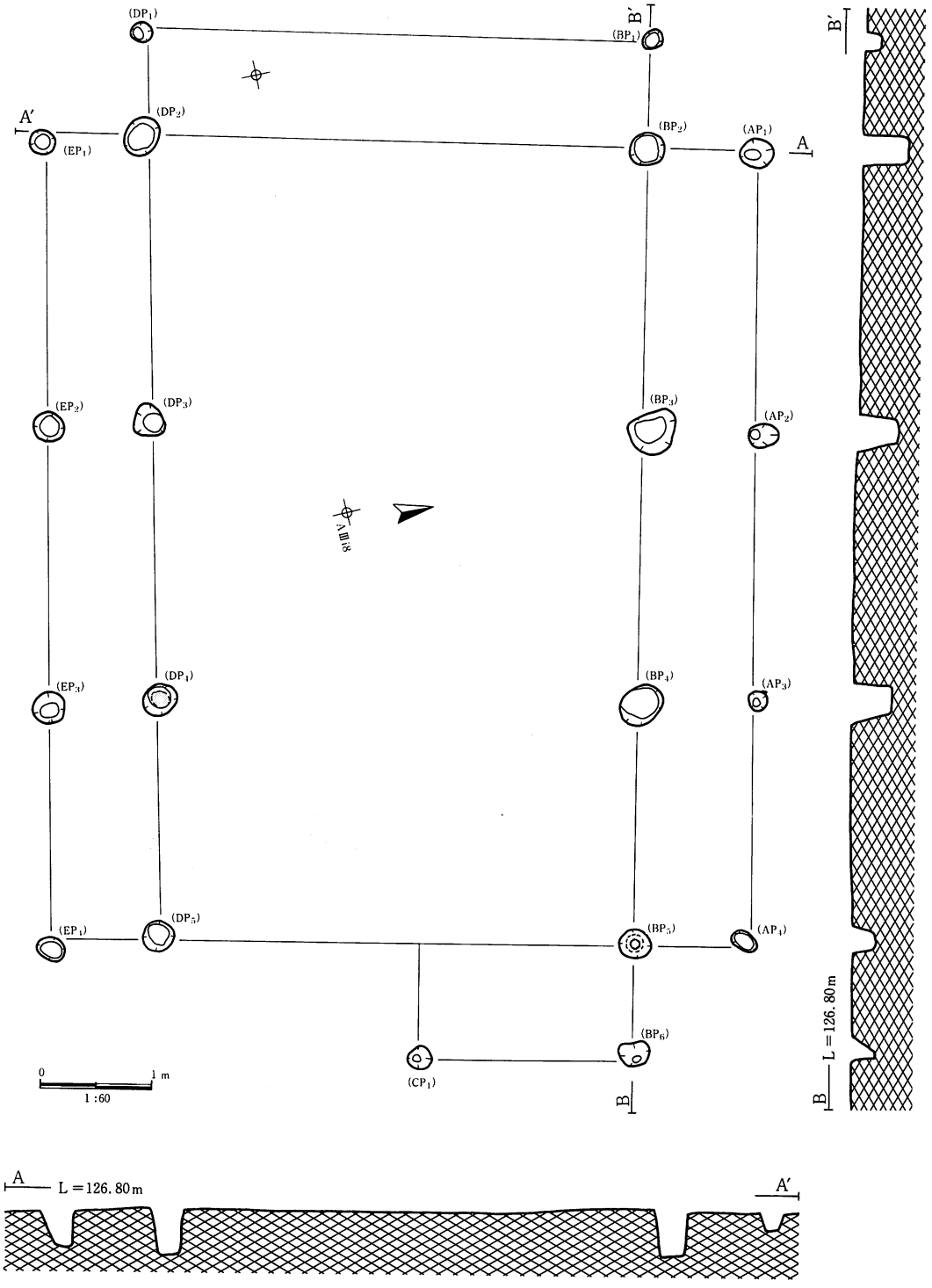
第36図　２号掘立柱建物跡出土遺物

PNO	ＡＰ$_1$	ＡＰ$_2$	ＡＰ$_3$	ＡＰ$_4$	ＢＰ$_1$	ＢＰ$_2$	ＢＰ$_3$
直径㎝	30×28	41×40	27×27	32×30	28×25	35×33	37×34
深さ㎝	27	52	40	30	20	42	30
PNO	ＢＰ$_4$	ＣＰ$_1$	ＣＰ$_2$	ＣＰ$_3$	ＣＰ$_4$	ＣＰ$_5$	
直径㎝	26×24	30×26	27×27	30×25	34×28	47×25	
深さ㎝	28	29	23	45	24	36	

遺物はＡＰ$_3$の埋土から83の磨・敲石が１点出土している。長さ8.8㎝、幅3.1㎝で手に握れるほどの大きさである。両端部に敲打痕があり、四面に磨滅や擦痕が見られる。石質は濃緑色凝灰岩である。

３号掘立柱建物跡（第37図、写真図版30）

調査区の西端部に位置している。北東側11ｍに１・２号堀（中世）が、南東側６ｍに２号溝が、西側１ｍに５号溝が隣接している。規模は桁行３間（7.20ｍ）、梁行１間（4.40ｍ）である。四面に庇か縁と思われる柱穴配置を持つ東西棟の建物で、北に対して78度西偏している。



第37図　3号掘立柱建物跡

身舎の桁行柱間寸法は北側柱穴ＢＰ$_2$から2.55m＋2.50m＋2.15m、南側柱穴ＤＰ$_2$から2.55m＋2.50m＋2.15mである梁行柱間寸法は西妻が4.50m、東妻が4.30mを測り、西妻側がやや広くなっている。庇は北側柱穴ＡＰ$_1$から2.55m＋2.45m＋2.15m、南側柱穴ＥＰ$_1$から2.55m＋2.55m＋2.15m、東側柱穴1.95m、西側柱穴4.60mである。身舎とは約１mを測る。

柱穴の掘り方規模は径14～最大44cm、深さ７～41cm前後である。平面形は円形ないし楕円形を基調としている。柱痕は９柱穴から確認されており、径が10～15cmである。埋土は黄褐色土に黒褐色土がブロック状に含む混合土で占められる。時期は遺物の出土がなく不明である。

PNO	ＡＰ$_1$	ＡＰ$_2$	ＡＰ$_3$	ＡＰ$_4$	ＢＰ$_1$	ＢＰ$_2$	ＢＰ$_3$
直径cm	27×26	27×21	17×16	25×14	19×15	32×29	44×37
深さcm	31	21	14	7	13	41	36
PNO	ＢＰ$_4$	ＢＰ$_5$	ＢＰ$_6$	ＣＰ$_1$	ＤＰ$_1$	ＤＰ$_2$	ＤＰ$_3$
直径cm	44×33	27×26	26×20	21×19	20×17	37×30	30×28
深さcm	35	20	20	22	8	38	35
PNO	ＤＰ$_4$	ＤＰ$_5$	ＥＰ$_1$	ＥＰ$_2$	ＥＰ$_3$	ＥＰ$_4$	
直径cm	31×27	28×27	23×22	26×26	28×28	25×20	
深さcm	41	24	15	20	24	10	

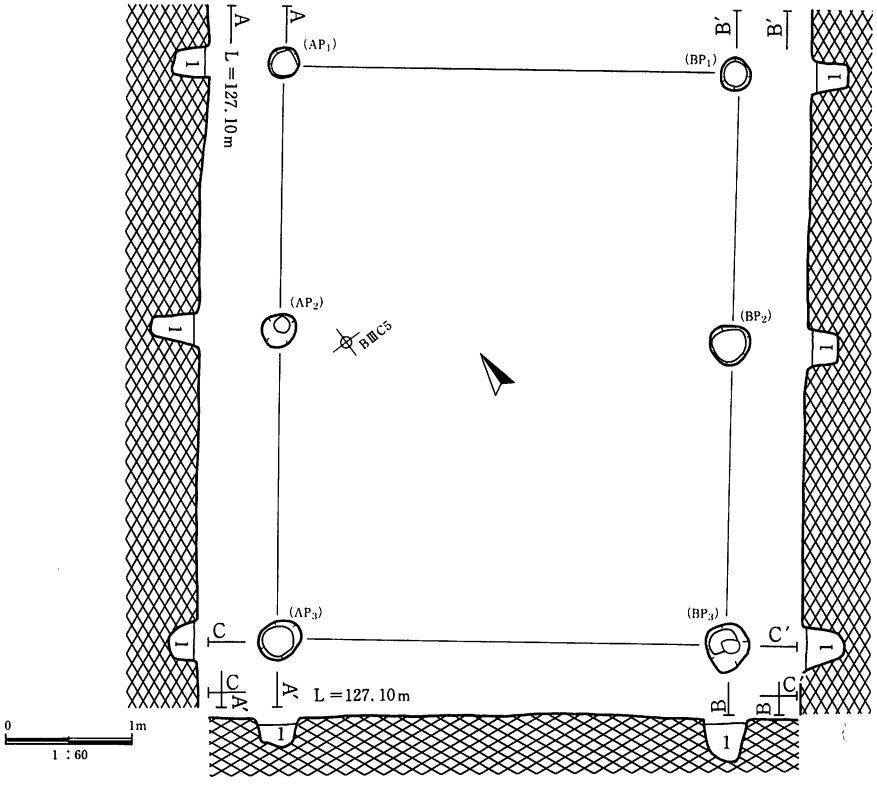
４号掘立柱建物跡（第38図、写真図版30）

調査区中央部西寄りに位置し、北東側7.40mに１・２号堀（中世）が、南西側約５mに１号掘立柱建物が隣接している。規模は桁行２間（4.55m）、梁行１間（3.60m）である。棟方向は北東～南西を示し、北に対して38度東偏している。

身舎の桁行柱間寸法は北西側ＡＰ$_1$から2.10m＋2.45m、南東側ＢＰ$_1$から2.15m＋2.40mである。梁行柱間寸法は北東妻が3.60m、南西妻が3.55mを測る。

柱穴の掘り方規模は径24～最大36cm、深さ25～40cmである。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈している。埋土は黄褐色粘土に黒褐色土がブロック状に含む混合土の単層で構成されている。時期は遺物の出土がなく不明である。

PNO	ＡＰ$_1$	ＡＰ$_2$	ＡＰ$_3$	ＢＰ$_1$	ＢＰ$_2$	ＢＰ$_3$
直径cm	24×24	28×26	36×29	26×24	33×32	35×33
深さcm	30	40	23	29	25	25



第38図　4号掘立柱建物跡

6．遺構外の出土遺物

遺構外からは石器、土器、鉄製品、古銭が出土している。土器は縄文土器、平安時代の土師器・須恵器、陶磁器で、大部分が破片で占められている。平安時代に属する遺物の多くは3号堀東側土塁下位とその周辺部から出土しており、破片の総点数は3,800点ほどである。他の遺物の出土量は少ない。

(1)**石器**（第39～43図、写真図版36～38）

石器は剥片石器を中心に石製品、石斧、敲・磨石、石錘、砥石等である。大部分は縄文時代に属している。剥片石器は定型的な84～86と不定形な87～108がある。

84は摘み状の小突起を持つ横型石匙である。縁辺の調整剥離は両面に、刃部は片面調整でつくり出している。摘み部は両面から調整剥離を施している。石質は硬質泥岩である。

85は石錐で錐部の一部は欠損している。摘み部の形状は三角形で、錐部の断面形は菱形を呈している。石質は泥質凝灰岩である。

86は基部が欠損した石箆で、両面調整剥離で刃部をつくり出している。

87・94・102は剥片の側縁に直線的に刃部をつくり出した掻・削器である。刃部の調整剥離は片側から施している。88～93・95～101・103～108は使用痕のある不定形剥片で、刃状の細かい剥離調整痕が観察されるものを一括した。石質は細粒凝灰岩、泥岩、粘板岩である。

109は石製品で一部が欠損している。端部と側面は丁寧に面が取られ、表面に細かな擦痕が見られる。石質は粘板岩である。

110は粘板岩製の磨製石斧破片である。112～114は敲・磨石の二つの機能を持つもので、113は両端部に敲打痕、114は片面が良く磨かれている。115～118は磨石で両面と一部側面に磨痕が認められる。石質は115が輝石安山岩、116が花崗内緑岩、117・118が淡緑色凝灰岩である。

119は石鍬で、荒い刃部加工が両面から施され側面も丁寧な面が取られている。石質は流紋岩質凝灰岩である。120は流紋岩の石核で、径1㎜の穿孔を行っている。

121～124は石錘で、楕円形状を呈する石の両端部を打ち敲いて整形している。石質は淡緑色凝灰岩である。125は流紋岩質凝灰岩の砥石で、一部が欠損するものの四面が使用され擦痕と条痕が認められる。

(2)縄文土器（第44図、写真図版39）

縄文時代中期と晩期の土器を出土しているが、破片のために器形の全容は不明である。出土点数は僅かである。中期の土器は127・128・131～134・137・139～141である。127・128は鉢ないし浅鉢の口縁部破片で、縄文原体の側面圧痕が施されている。132は粘土紐による貼付文である。晩期の土器は126・129・130・135・136で、平行する沈線文や磨消縄文を主体とする中葉の大洞C_1・C_2式に比定される。130・135・136は壺、他は深鉢の器形である。

(3)須恵器（第44図、写真図版39）

須恵器の出土点数は僅かで、いずれも破片である。142は甕の口縁部破片で、体部上半に浅い沈線が巡り、口頸部はくの字状に直立気味に立ち上がっている。外面は平行タタキメ調整を施し、胎土に小石を多く含んでいる。

143は甕の体部破片である。内外面には平行タタキメ調整を施し、焼成も緻密である。148は甕の肩部破片で、外面に平行タタキメ調整を施している。144・146・147・149・150も甕や壺の体部破片と推測される。

(4)土師器（第45～48図、写真図版40～42）

土師器は1点を除いてすべてロクロ使用のもので、器種は坏と甕の二種類がある。破片が多く図面掲載したのは次の50点である。

坏は底部切り離しが回転糸切りの151～178、高台坏の179～194がある。口縁部は外傾する152～154・159～161・163・164・166・167、外反する151・156～158・162・165、内湾気味に立ち上がる155がある。器形の大部分は歪みを呈し、外面はロクロ成形痕が明瞭である。

154は内外面に煮零ぼれした炭化物の付着が認められる。胎土には小石と砂粒が多く含まれており、全体に粗雑なつくりである。177の口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部が片削ぎされている。外面のロクロ成形痕が明瞭で、内面は細いヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。176も内面黒色処理である。178は口縁部を欠損するものの、内外面が細いヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。焼成は良好で、胎土も緻密である。

179～181は高台坏である。高台部から外傾して立ち上がり、口縁部は外反している。いずれもロクロ成形痕が明瞭で、胎土には小石と砂粒を多く含んでいる。高台との接合面にはひびが入っており、器形も全体が歪みを呈している。

182～194は高台部の破片で、高さは0.8～最大1.2cmを測る。全体に歪みやや粗雑である。

195はロクロ不使用の小型の甕で、器形は多少歪みを呈している。口縁部は短小で直立気味に立ち上がり、体部外面が荒いヘラケズリ調整を施している。

196～200はロクロ使用の甕である。196は口縁部破片で、頸部に浅い一条の沈線が巡り、径5mmの補修孔がある。197の口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部に浅い沈線が巡っている。体部外面はロクロ成形痕が明瞭で、一部にヘラケズリ調整をしている。198～200は底部破片である。外面はヘラケズリ調整、底面はヘラナデ再調整を施している。胎土には小石や砂粒が多く含まれ、焼成も良好である。

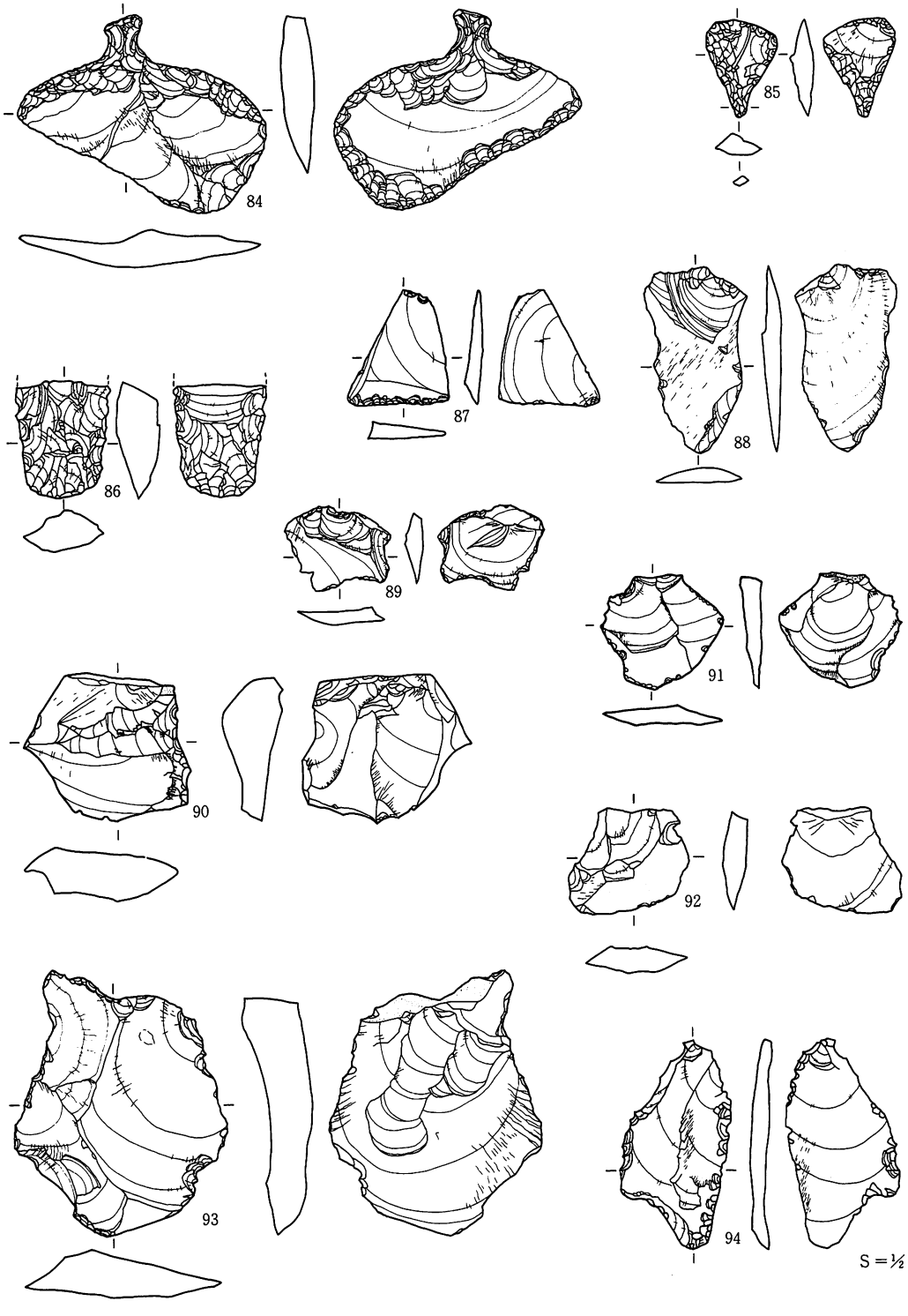
(5)鉄製品（第48図、写真図版42）

201は鉄鏃と推測される先端部と基部で、錆のために詳細が不明である。長さは先端部が11.3cm、基部が8.6cm、重さが両方で14.6gを測る。基部の断面形は5×3mmの長方形状を呈し、先端部がやや尖がっている。

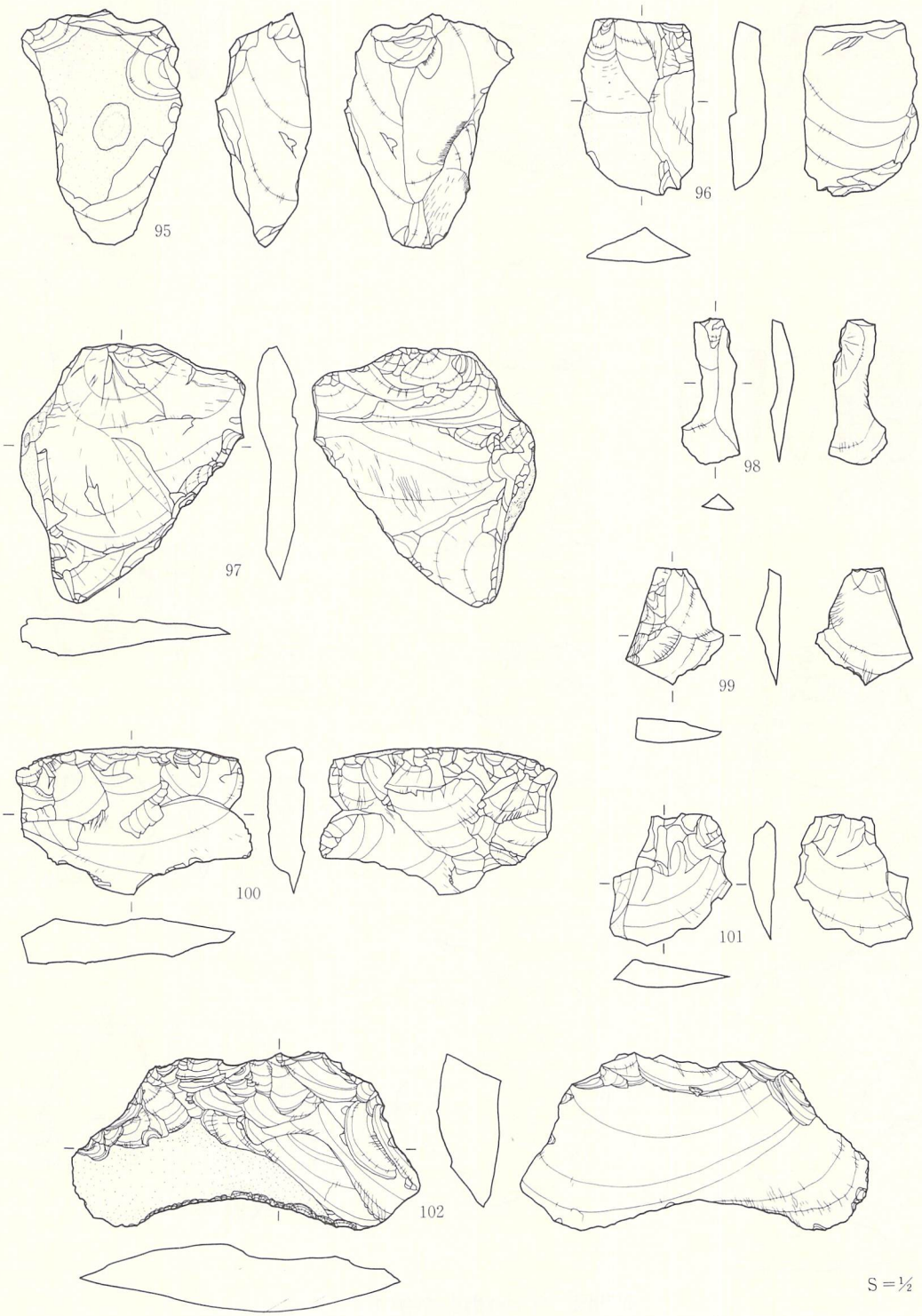
202は小刀ないし短刀である。全体が錆のために脆くなっており、中央部付近で一部欠損している。茎から刃区までは10.5cm、長さが19.8cm、幅が2cmを測り、反りはなく直線的である。重さは85.6gほどである。刃の部分はくさび形を呈しており、切刃造か片切刃造と推測される。茎の一部は錆のために欠損しており、目釘穴の確認はされない。201と202の時期は周辺の遺物出土状況の様相から平安時代に比定される。

(6)古銭（第48図、写真図版42）

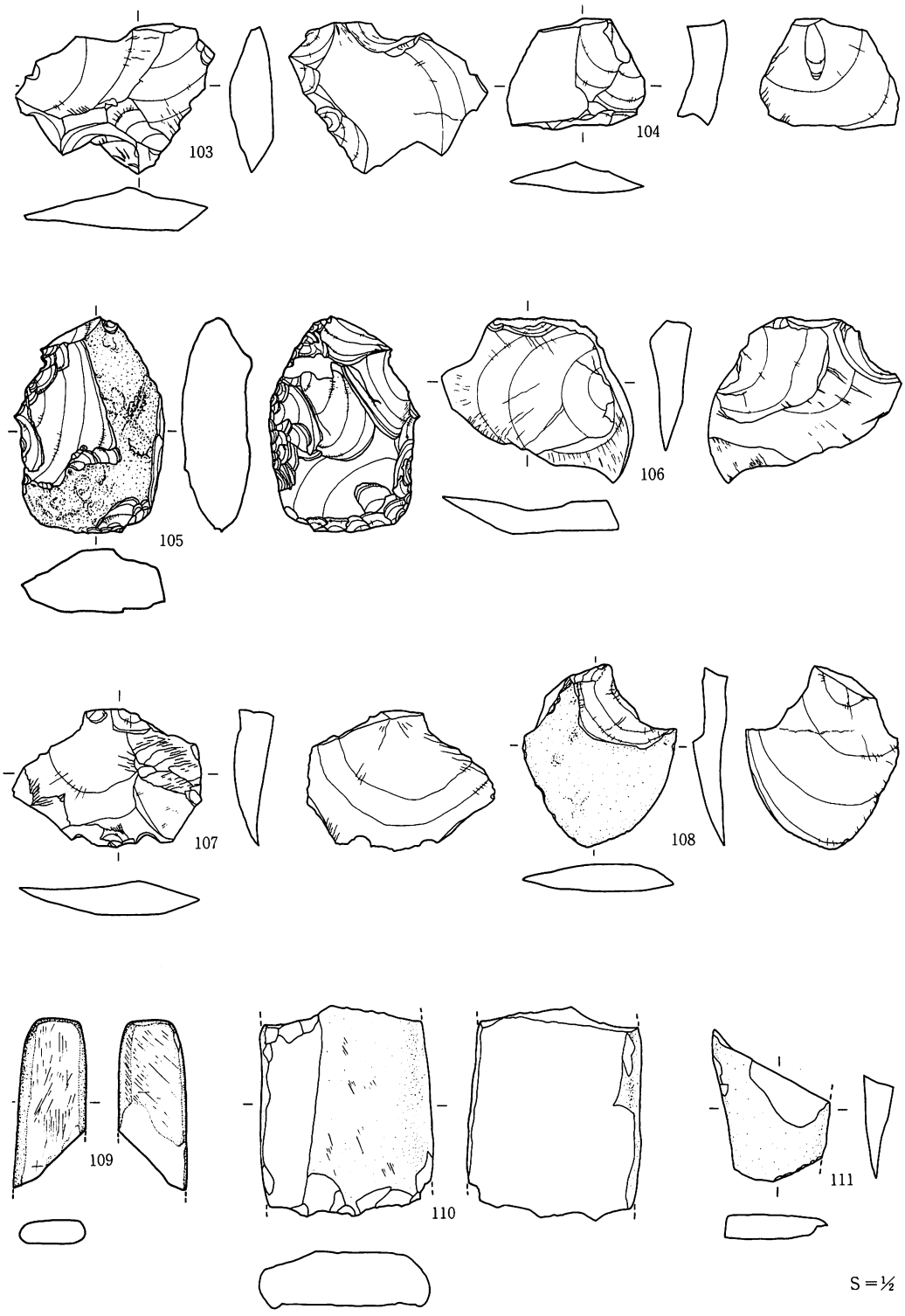
203～205は江戸時代に流通した新寛永通寶で、外径は205が2.4cm、他が2.2cmを測る。



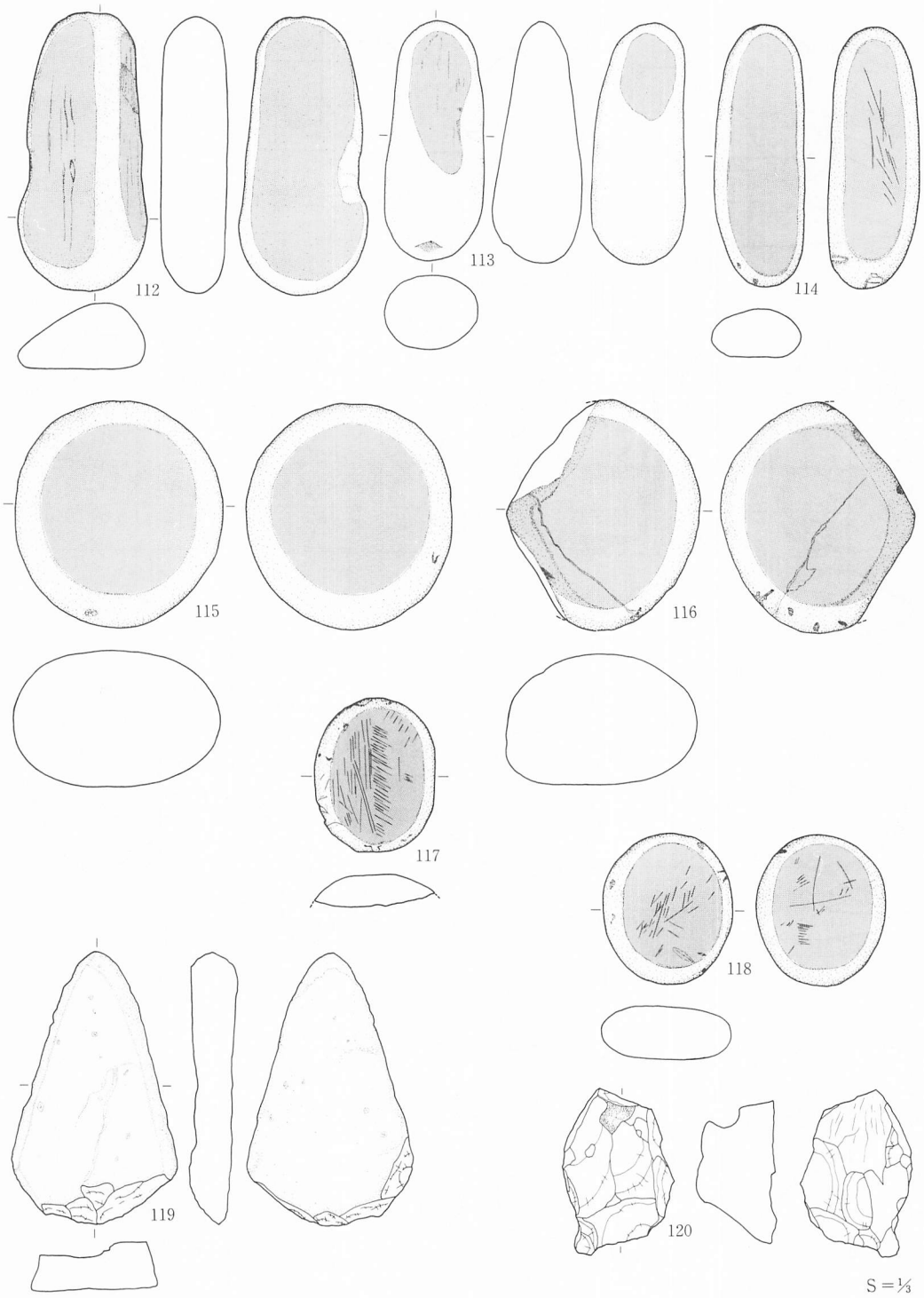
第39図　遺構外出土遺物（1）



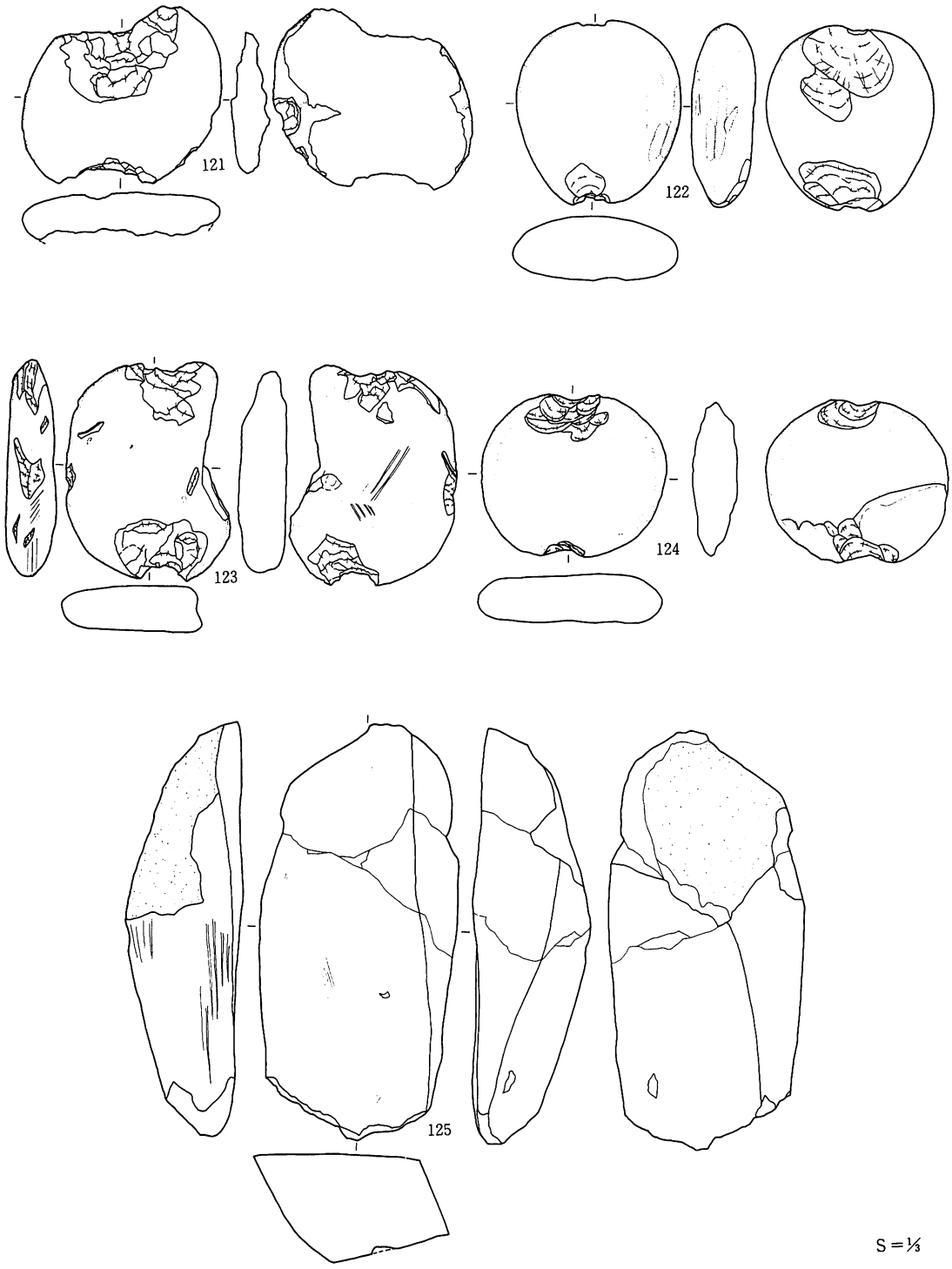
第40図　遺構外出土遺物（２）



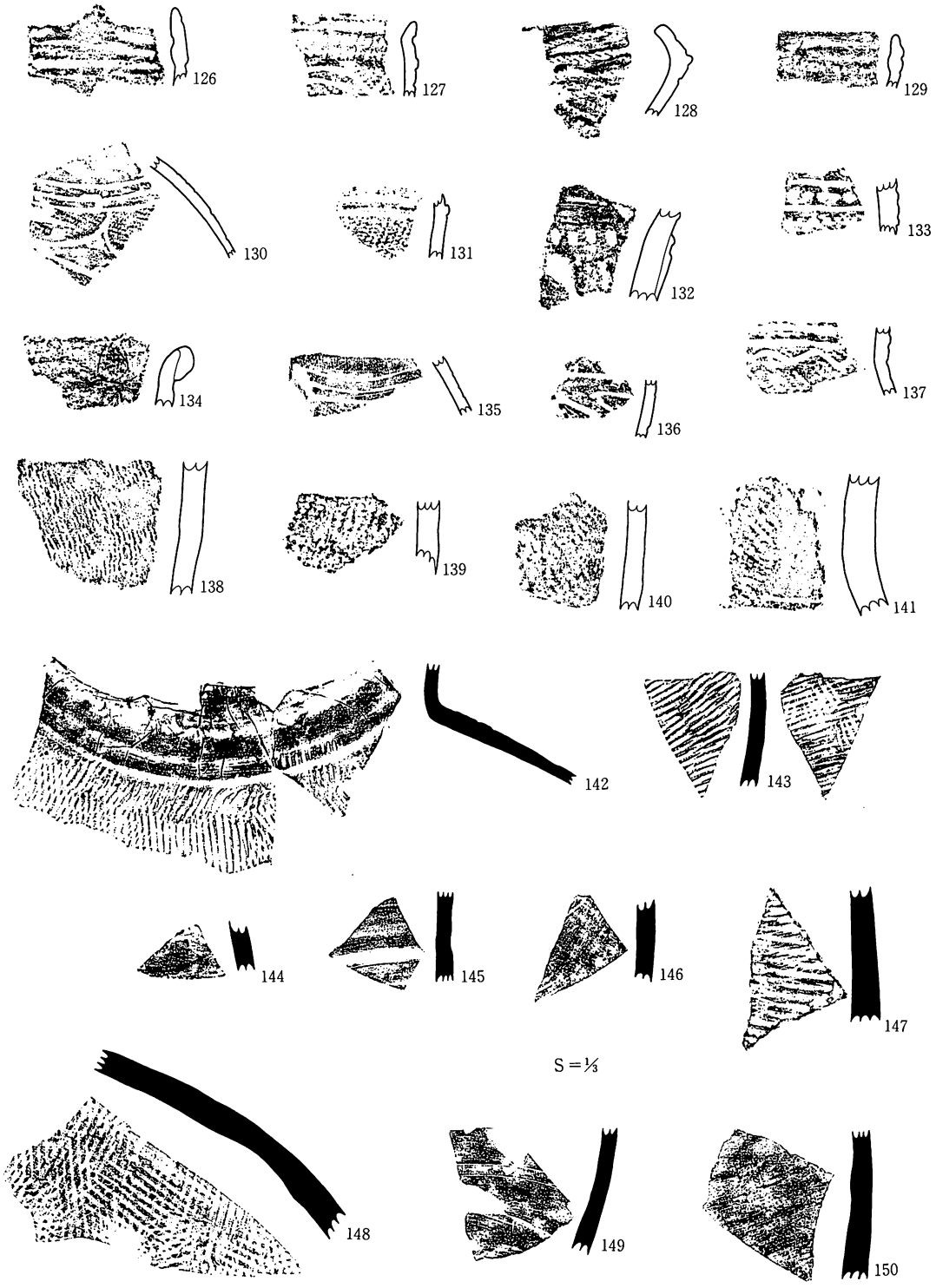
第41図　遺構外出土遺物（3）



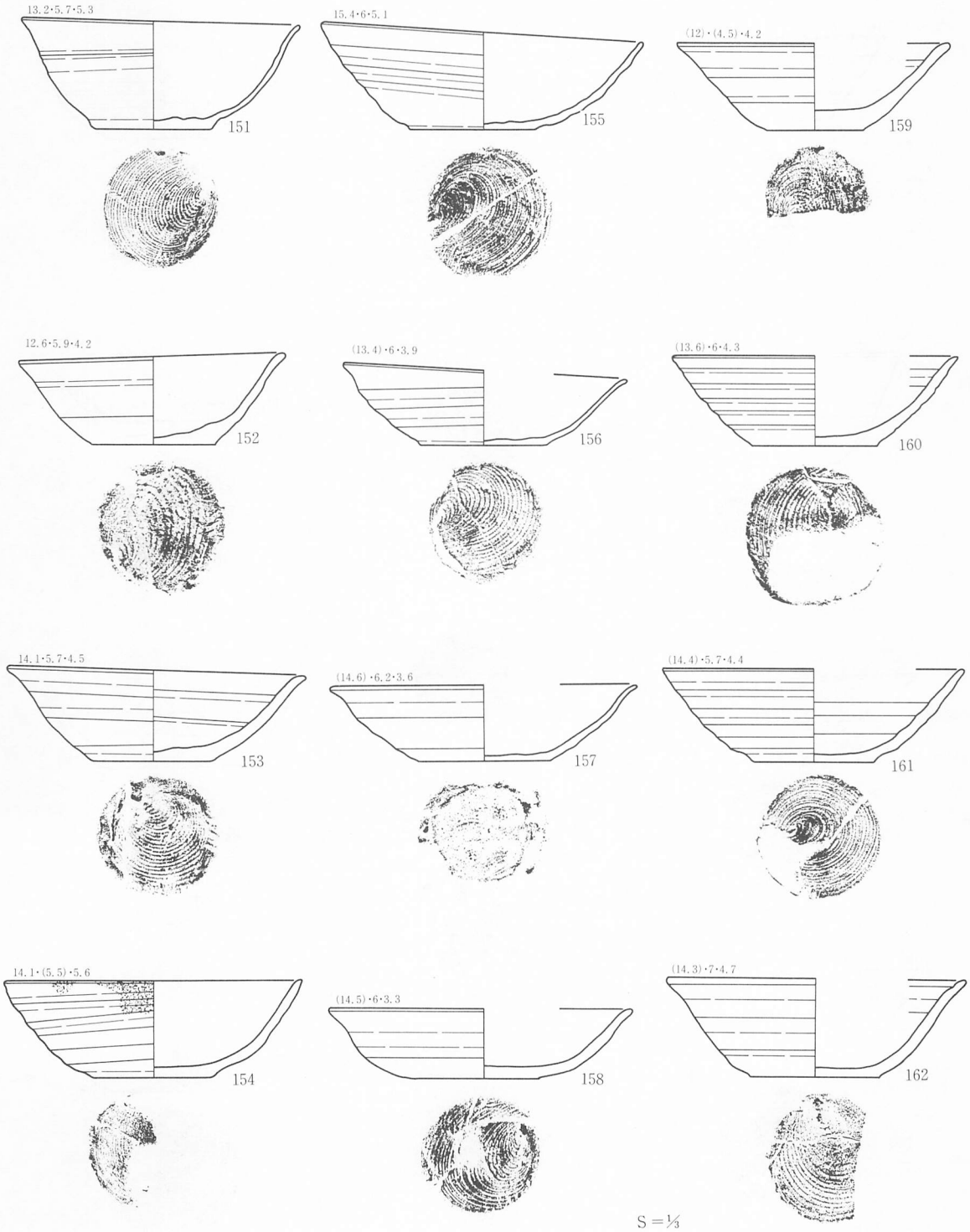
第42図　遺構外出土遺物（4）



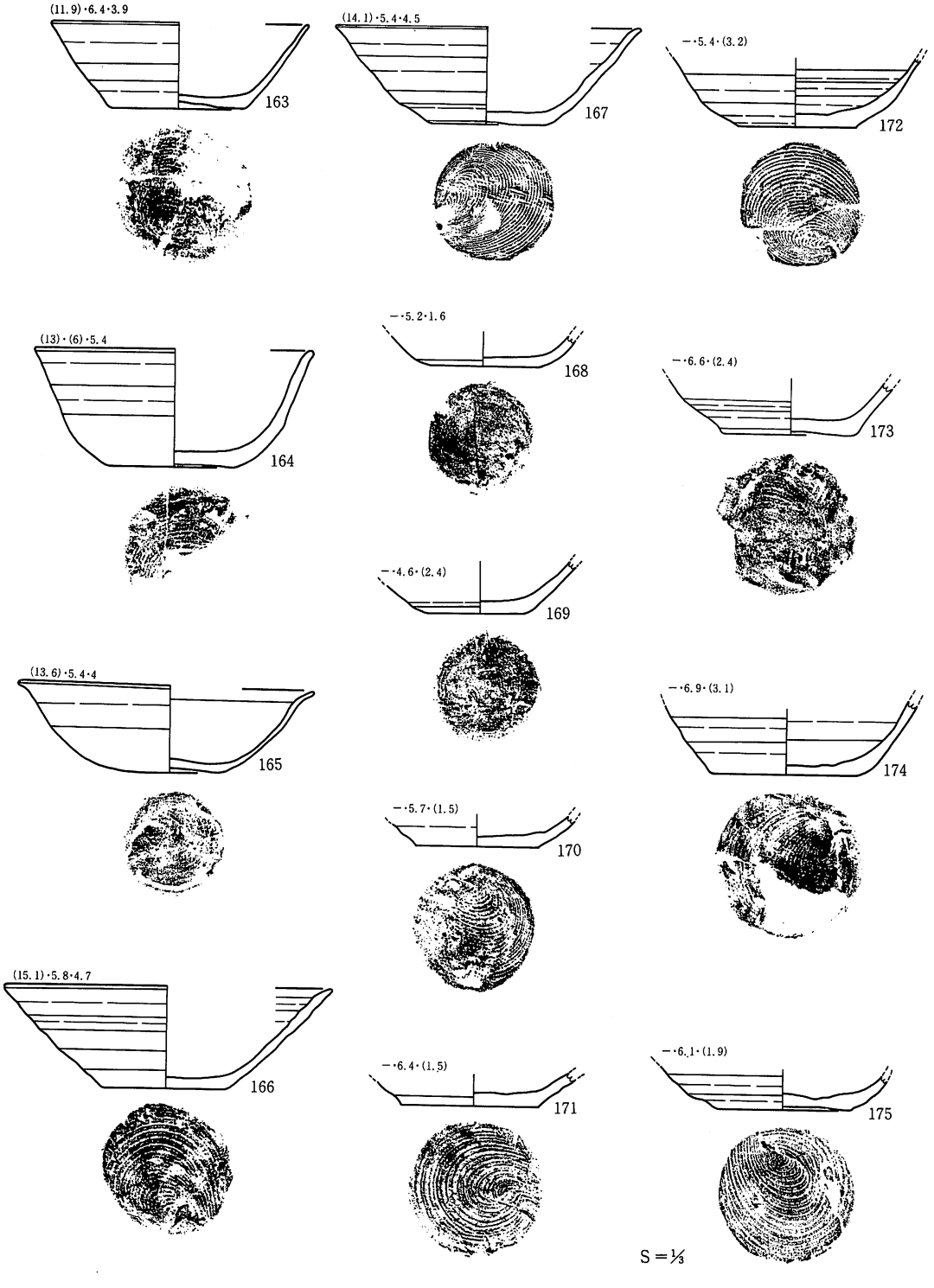
第43図　遺構外出土遺物（5）



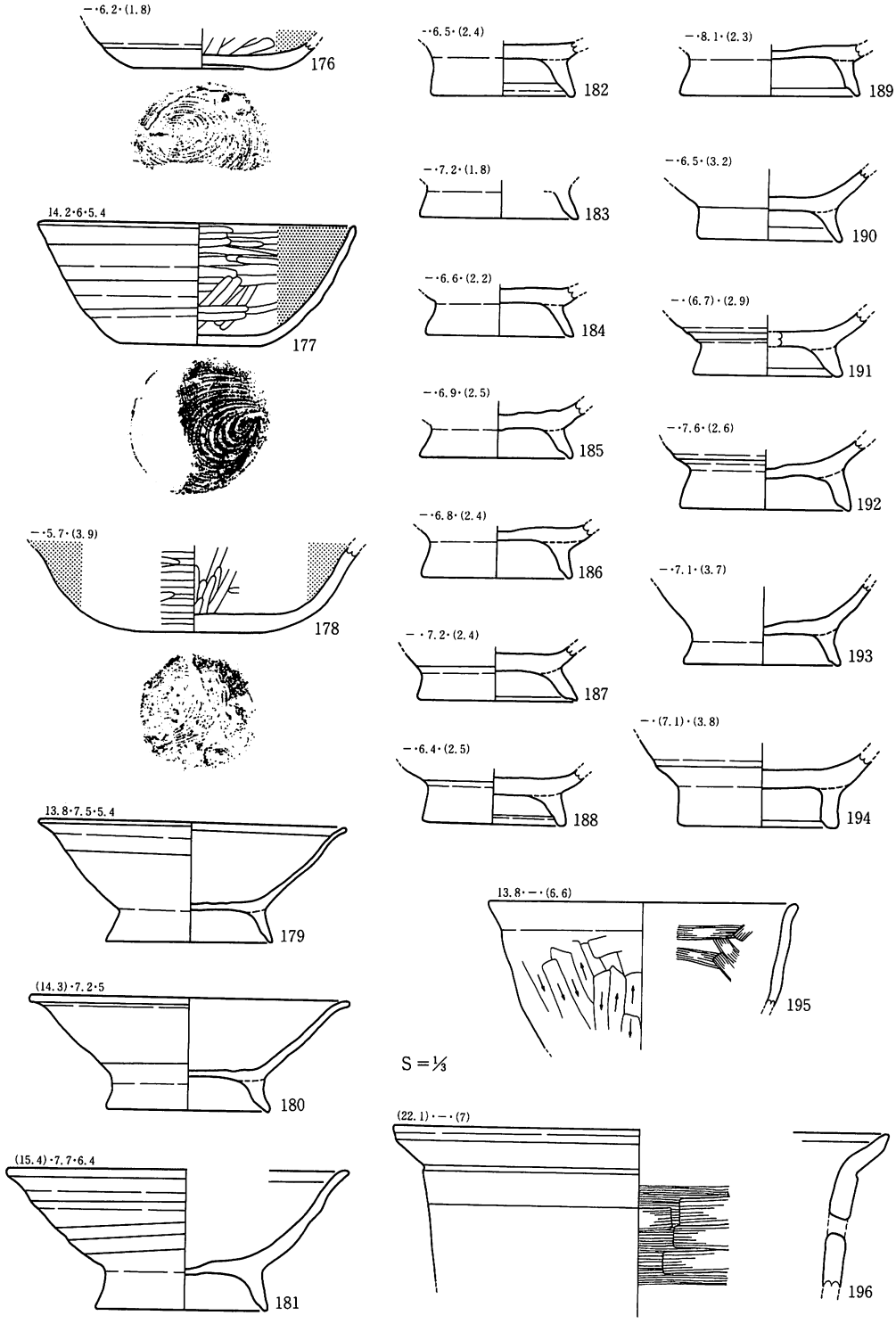
第44図　遺構外出土遺物（6）



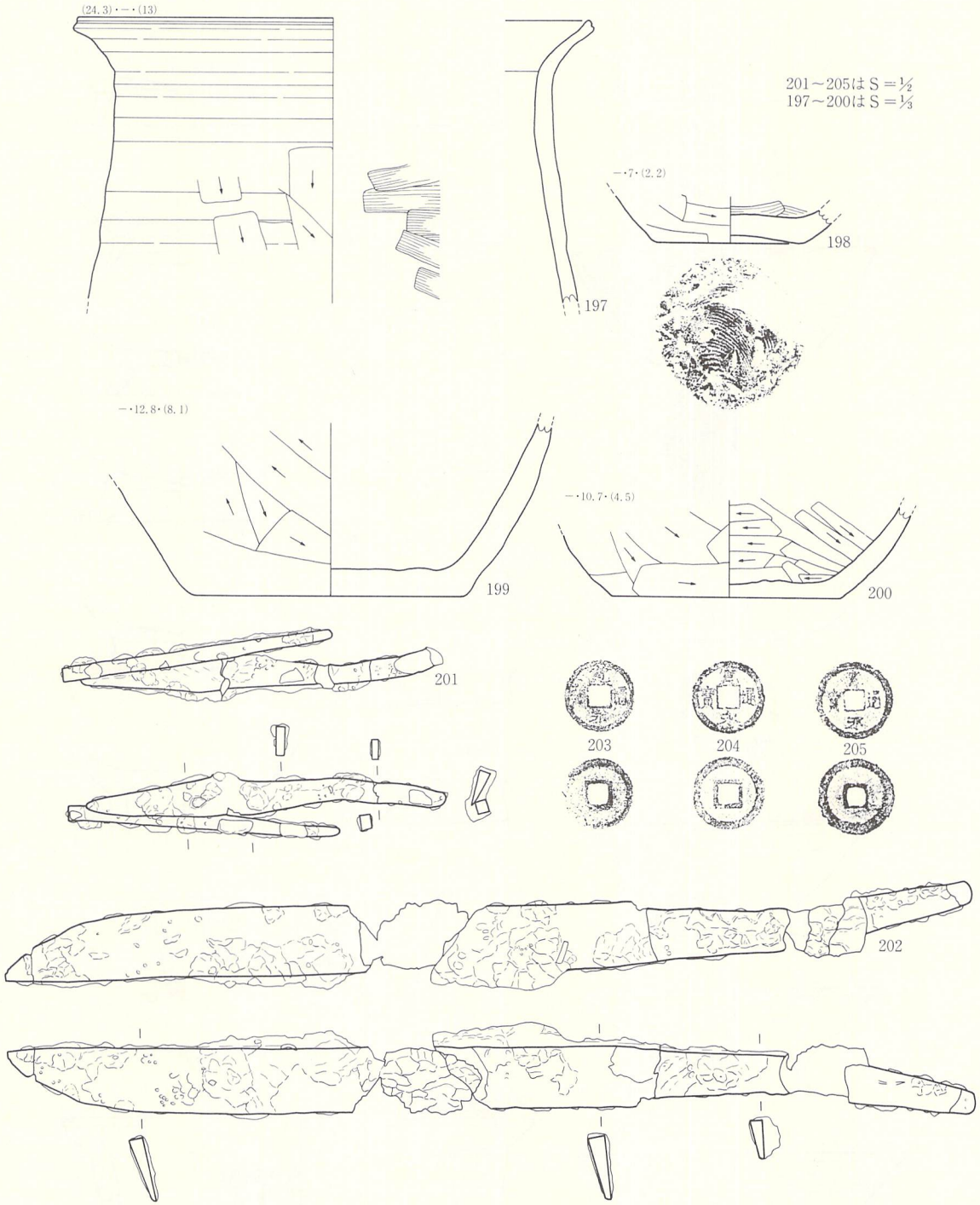
第45図　遺構外出土遺物（7）



第46図　遺構外出土遺物(8)



第47図　遺構外出土遺物（9）



第48図　遺構外出土遺物(10)

V．まとめ

観音館跡から検出された遺構と遺物はⅣ章に記述したとおりであり、本章では各時代を代表する遺構と中世城館を中心に若干補足を加えてまとめとする。

1．縄文時代

(1)陥し穴状遺構

溝状を呈するものが1基検出されており、開口部での規模は2.2×0.76m、深さが93cmを測る。西側に隣接する煤孫遺跡からも溝状が7基、楕円形状が4基点在して検出されている。

溝状の長さは最大1.06m、深さが平均80cmと当遺構に比べてやや小規模である。遺物は出土していないが、形態等の類例から縄文時代に属するものである。

(2)遺物

遺構外からのものが大部分を占めており、石器と土器が僅かに出土している。石器は横型石匙、石錐、石箆、掻・削器、磨製石斧、敲・磨石、石鏃、石錘等である。

土器は鉢、深鉢、壺の破片が多く、縄文時代中期前葉～中葉の大木7・8式、晩期中葉の大洞C_1・C_2式に比定される。

煤孫遺跡では前期末葉の大木5・6式～中期初頭の7式土器を中心とする構成で、当遺跡とは若干の時期差が認められる。また、漁網錘ないし編物を編む際の錘と推測される礫石錘が、石器の約半分にあたる2,393点出土している。

2．平安時代

平安に属する遺構は竪穴住居跡1棟、窯跡1基、土坑13基、焼土が2基である。遺構はすべて中世城館に伴う三郭の土塁下位から検出されている。遺物は土師器の坏・甕、須恵器の甕・壺、手ずくね土器、鉄製品等が出土している。

(1)竪穴住居跡

1棟検出されているが土塁構築時の削平や土坑との重複による攪乱を受け、規模・平面形の詳細が不明である。規模は4×（3.7）mで、平面形が隅丸方形状を呈すると推測される。柱穴は径23～30cm前後の4本柱で、長方形の柱配置を示している、カマドは東壁側の北東コーナー寄りに設置されるものの削平され、本体の規模・構造が不明である。

出土した遺物はロクロ使用の土師器の坏・甕を中心に須恵器の甕、土製支脚等である。

坏はすべて底部の切り離しが回転糸切りで、内面調整が①ヘラミガキ調整後に黒色処理を施すものと②黒色処理を施さないものである。①と②は高台坏も含まれる。

甕はロクロ成形で、内面調整は坏と同様な①と②である。大型甕の体部外面にはヘラケズリ

調整が施されている。

県内における古代（古墳～平安時代）の土器は相原康治[1]氏（1981）が10群、高橋信雄[2]氏（1982）が４期に大別して分類編年している。住居跡から出土した土器は、平安時代における土器編年の第Ⅸ群と第Ⅲ期－２群に比定される。各編年の要旨は以下の通りである。

相原編年試案第Ⅳ群　ロクロ不使用の土器は原則的に伴わなく、土師器は回転糸切り・無調整と調整のあるもの（回転・手持ち）の両方からなる。土師器長胴甕胴部の叩き目はほぼ消えてしまう。須恵器には坏（回転糸切り・無調整のみ）・甕・蓋がある。

高橋編年第Ⅲ期－２群　北上川中流域ではロクロを使用して多量の土器が生産された。土師器の坏の切り離しは回転糸切りによるが、再調整（回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ）のあるものと無いものがあり、甕は体部上半がロクロ調整されている。須恵器には坏（回転糸切り無調整）・大甕・広口壺・高台坏がある。

各土器編年の年代は、平安時代の後半・９世紀末～10世紀代に位置付けられており、当住居跡もこの範疇におさまると推測される。また、相原氏はこの時期の柱穴配置が壁側に寄るものが増加し、カマドの構築カ所が北壁中心から東・南壁側に移行する事例が多くなり、壁中央部からいずれかに偏した位置となると報告している[1]。当遺構にも柱穴配置やカマドの位置等にこれらの要素が見られる。遺跡周辺の平安時代の集落は、隣接する①煤孫遺跡[3]（13棟）、②八幡野Ⅱ遺跡[4]（９棟）、③八幡館跡[5]（４棟）、④上鬼柳Ⅲ遺跡[6]（22棟）、⑤岩崎台地遺跡群[7]（117棟）から発見されており、同時期の掘立柱建物跡や井戸も検出している。年代は③が９世紀末～10世紀初頭頃、他は９世紀末～10世紀代を中心とする位置付をしている。和賀川右岸の段丘縁辺部には、平安時代の９世紀末～11世紀初頭にかけての集落が散在する様相を示している。

(2)窯跡

窯跡は開口部が90×84cmの不整円形を呈し、深さが20cm前後を測り、底面は平坦である。埋土は上位が炭と焼土粒を含み、下位が遺物を含む白色粘土で構成されている。遺物はロクロ使用の坏を主体に甕・鉢・羽口状の土製品が出土している。

坏は①底部切り離しが回転糸切りの坏と②高台坏の二種類で、②の中には内面を黒色処理を施したものを含む。甕はロクロ成形で大型と小型の器形があり、大型の中には内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施すものもある。

土器の年代は成形技法や器種組成等から第Ⅲ期－２群に比定され、９世紀末～10世紀代の範疇にある。また、平安時代の２号竪穴住居跡とは同時期頃と推測される。

同類の窯は和賀川右岸の上鬼柳Ⅲ遺跡から３基検出されている。平面形は円形を基調とし、径が1.6～2.3m前後を測り、地山を20～30cm掘り込んだ浅い凹状を呈している。内２基は底面から壁面にかけ良く焼成を受け、焼土と炭化材が厚く堆積をしている。

遺物はロクロ使用の土師器の坏・高台坏・高台付皿、手ずくね土器、鉄製品（釘・鎹）が出土し、高台坏と皿が出土の大部分を占めている。年代は重複する掘立柱建物跡群と土器から10世紀後半に位置付けされている。

当遺構からは高台付皿の器種は出土しないものの、①器形全体が歪みを呈する、②高台部に亀裂を持つか剥離している等に共通点が見られる。坏は全体に器形の歪みが著しいものが多くを占め、要因が製作過程におけるものか、または焼成時の変形に起因するかは不詳である。

(3)土坑・焼土

土坑は平安時代の２号住居跡と窯跡の周辺部から検出されている。規模は径40×最大107㎝、平面形が楕円形ないし不整形状を呈しており、深さは11～25㎝を測る。一部の土坑は住居跡を切っていることから新旧関係は新しい。遺物は窯出土の土師器と同様である。

焼土は窯跡の周辺部から検出されている。平面形は楕円ないし不整円形状を呈し、径35×最大50㎝、焼成の厚さが６㎝前後を測る。いずれも現地性のものである。遺物はロクロ成形の土師器の坏と甕破片が出土している。

３．中世

中世に属する遺構は竪穴住居跡１棟、柱穴状土坑143基、城館に伴う郭・堀３条・土塁２基等である。遺物は陶磁器、瓦質陶器、手ずくね土器、坩堝、硯、中国宋朝銭が出土している。

(1)竪穴住居跡

三郭の南側から１棟検出されたもので、規模が5.2×3.9ｍを測り、平面形が隅丸長方形を呈している。北々西壁中央部には舌状をした出入口の施設を付随し、壁際に６基と床面中央に２基柱穴を配置している。遺構は人為的に埋め戻しが行われ、埋土から元豊通寶（中国宋朝銭）が出土している。廃棄された時期は定かではない。

同様の遺構は県内の柳田館[8]（紫波町）、大瀬川館[9]（石鳥谷町）、笹間館[10]（花巻市）、古館Ⅱ遺跡[11]（花巻市）、丸子館[12]（北上市）等の城館から検出されている。平面形は方形ないし長方形を基調としており、出入口の施設は付随するものとしないものがあり、後者が多くを占めている。高橋與右衛門[13]氏は『北の中世』の中で竪穴建物跡を平面形態からⅠ・Ⅱ類に分類し、さらに張り出しの位置によって３細分している。当遺構は平面形が長方形で、方形張り出しが壁の中央に付すⅡ型ａ類に比定される。

当遺跡と同じ和賀川流域右岸に位置する丸子館Ⅰの郭からは、隅丸長方形を基調とする遺構が重複を含めて10棟余検出している。時期は出土する陶磁器類から館創建時の14世紀と比定されている。規模は長軸が4.2～5.4ｍ、短軸が2.4～3.9ｍ前後を測り、柱穴は壁際に６～８基、床面中央に２基配置しており、柱穴配置や形態に当遺構と類似性が見られる。

⑵柱穴状土坑

三郭の調査区全域からは楕円形ないし円形を基調とする径20～30㎝大の柱穴状土坑が143基検出されている。郭内にある中世竪穴住居跡や他の竪穴状遺構とは重複していない。また、柵列や掘立柱建物跡になるような規則的な配置は調査区では確認できなかった。柱穴は北側の調査区域外に延びることから柵列などの存在が推測される。

⑶館跡

観音館は文献では「下須々孫館」「煤孫古館」とも呼称され、和賀川右岸に分布する河岸段丘（金ケ崎Ⅰ段丘）の縁辺部に立地している。急崖と開析された自然地形の沢を利用し、丘続きの後背部を堀切りした主郭と複数の郭（二郭～九郭）からなる複郭型城館である。

和賀地域では大小合わせて150カ所余の城館が存在するものの、調査例は岩崎城、鹿島館、丸子館、蟹沢館、蛭川館、昭和63年から調査が開始された東北横断自動車道秋田線関連遺跡では田中館、月館、兵庫館、観音館等と少ない。いずれも部分発掘が大部分を占めることから、城館の構造や縄張りの詳細は不明な点が多いのも事実である。当地域の中世城館が立地する地形と地理的条件から、高橋與右衛門[10]氏は次の３型に分類している。要旨は以下の通りである。

①段丘崖の縁辺部に構築される型　和賀川と夏油川によって形成された河岸段丘の崖沿いに一郷一館に近い状況を示しながら続いている。舌状に張り出した突端部を堀切りで区画し一方または二方に段丘崖をもつ例と、前面を段丘崖とし後背の平坦面を堀と土塁で区画し複数の郭を構築する例がある。この類は居館であるだけでなく、陣地や詰城としても使われる。

②独立丘陵の頂上部に構築される型　平坦地に残る丘陵状台地の頂上部を堀や土塁で区画して郭を構築する城館で、①より起伏に富み構造的にも地形的にも複雑な構造を示す、居館のみではなく詰城としての性格も強い。二子城、飯豊森館、岩田堂館、蟹沢館、新平館である。

③現在の集落立地面と同位面に構築される型　水田面との比高１～２ｍの微高地や、比高１～２ｍの段丘崖縁や舌状台地の突端部を堀や土塁で区画して構築される。五条丸館、笹間館、轟木館、江釣子館である。

①型は当遺跡を含めて和賀川右岸に６割以上が分布しており、中核をなす岩崎城をはじめとする大規模な城館で占められている。また、尻平川右岸には時田館、和賀川左岸では藤根八幡館が立地している。

複郭型城館は岩崎城、観音館（下須々孫館）、上須々孫館、田中館、時田館、藤根八幡館、蟹沢館、古館、笹間館、鹿島館、丸子館、五条丸館等に代表される。単郭型城館は蛭川館、戸花館、水沢館、下仙人館、月館、福田館、轟木館等である。

当郭の平面形は主・二郭が舌状を呈しており、他に帯状・三角形状・台形状等と多様性を示している。主郭の規模は160×118ｍ・面積12,663㎡、二郭が170×52ｍ・面積6,792㎡で、主・

二郭合わせて総面積の約９割を占めている。郭の総面積は22,088㎡で、和賀地域を代表する岩崎城に次ぐ広さである。主郭を防御する要となる郭は、北側に広がる帯郭（九郭）と南～南東側の舌状部を堀切りした三～八郭であり、東側に重点を置く郭配置を示している。主郭と各郭との比高は北側の九郭で12m、五・八郭が８ｍを測り、後背部の主郭斜面は急峻である。主郭と二郭との比高は１ｍ前後で、ほとんどが平坦である。

また、芦谷地沢を挟んだ東側の上反町遺跡では、段丘先端部に二条の堀と土塁を伴った郭を検出しており、立地条件等から当遺跡に関連する出郭の可能性もある。

内堀は主郭と二郭の間に全長170m・上幅５～10mで北々西～南々東方向に、外堀（１・２号堀）が二郭の南西側に全長203m・上幅５～10mで一部歪みながら北西～南東方向に延びている。三郭の西側には全長29m・上幅12mの３号堀（箱堀）が、六郭と主郭の間にも上幅３ｍの堀切りをしている。調査した外堀と３号堀はいずれも空堀である。

本堂寿一[14]氏は複郭型城館が中世の或る時一朝にして築造されたのではなく、複数の郭個々に時間差がある事をその囲郭法に知れる。下須々孫館（観音館）でも内堀に歪みをもたず、外堀に歪みをもつと指摘している。今回の調査で外堀は、新旧２条の堀が重複していることが確認できた。１号堀に先行する旧期の２号堀は、遺存する全長が約80m・下幅1.2～3.5ｍで、断面から箱堀と推測される。新期の１号堀は、旧期の堀を人為的に埋め戻し新たに構築したものである。薬研堀で上幅５～12m、下幅0.3～1.7ｍを測り、二郭側の土塁との比高は底面から5.7ｍである。旧期の堀に比べて規模は拡大し、より堅固になっている。外堀は二時期にわたる変遷があり、本堂氏の指摘した様に城館が一時期の築造ではないことが裏付けられる。３号堀は一部に段差が見られることから、外堀と同様な時期差も推測される。

土塁は主郭の南端部、二郭の南東部、三郭の西側、六郭の西側、九郭の西端部に確認されており、三郭を除いた他は崩落や削平を受けて断片的に遺存しているだけである。二郭の南西側全域は外堀（１・２号堀）に沿って土塁を構築していたと推測される。遺存する各土塁の規模は上幅が1.5～３ｍ、下幅が４～６ｍ、高さが現地表面から三郭で最大２ｍを測る。調査した土塁の構築は版築工法ではなく、旧地表面に堀の掘削土や周辺部の土を盛り上げたものである。

遺物は新期の１号堀と３号堀から陶磁器、瓦質陶器、石製品、手ずくね土器、平安時代の土師器・須恵器、縄文時代の石器・土器等が出土している。中世時代に伴う遺物は１号堀から出土した常滑の大甕破片、瀬戸の祖母懐の壺肩部破片、瓦質陶器の香炉口縁部破片、坩堝、硯である。瓦質陶器と坩堝は底部から出土している。時期は常滑が15～16世紀、瀬戸が15世紀後半、瓦質陶器が15世紀～16世紀頃に比定されるものである。

県内の笹間館[10]（花巻市所在）からも瀬戸の祖母懐の壺破片が29点（固体数２点）、瓦質陶器の火鉢・植木鉢破片が２点、硯破片が14点出土している。時期は瀬戸が15世紀代と15世紀後半

に瓦質陶器が15・16世紀に位置付けをしている。

中世における和賀地域の歴史的な背景は、『岩手県史[16]』『北上市史[17]』『和賀町史』の文献資料等によって概観することができる。和賀郡が律令制社会に組み込まれたのは、延暦21年(802)の胆沢城や翌22年(803)の志和城が創建された以降であり、『日本後紀』弘仁2年（811）正月11日条に「於=陸奥国-、置=和賀-・稗縫・斯波三郡」の記事がみられる。

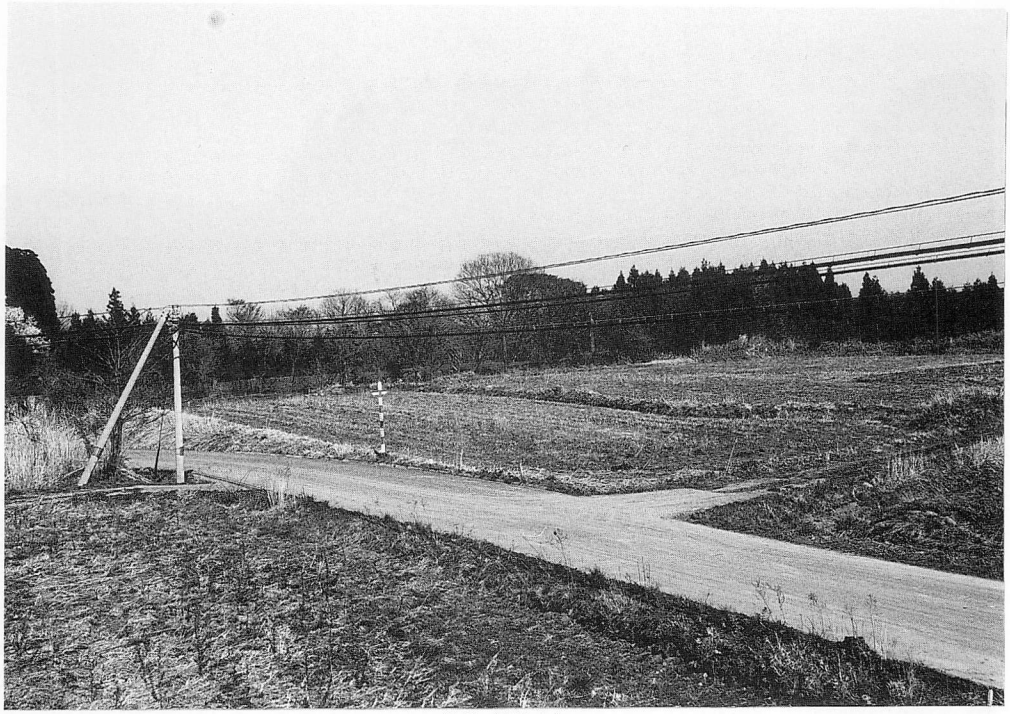
中世を通して和賀郡の盟主である和賀氏は、承久3年（1221）の承久の乱以後に地頭職として宮城県苅田郡から和賀郡に下向したと考えられている。『吾妻鏡』や「中條氏系図」では移住したのは苅田義行（惣領）と次男の小田嶋五郎左衛門尉義春らしいとしている。観音館を支配する地域に関連する文献は一部「鬼柳文書」に見られる。「和賀氏系図」の中に義行が三男五郎右衛門尉景行に室対郷（尻平）梅木郷（岩崎）、江釣神田（江釣子神社の神田）、桜缶野馬所（藤根）、日戸野馬所（新平）、須々孫野馬所（煤孫）を譲っている。義行は仁治4年(1243)2月29日に没している。観応3年（1352）10月7日の足利尊氏御教書によると下須々孫村（煤孫）、小国村（湯田・沢内村）等は和賀越前権守行義の領地であったことが知られる。南北朝時代に入り一族は宮方（行義）と武家方に分かれて戦い、宮方の敗退によって行義の跡地の5分の4と秋田仙北郡の諸郷を和賀薩摩守基義に与えている。観音館は中世を通じて当地域の中核をなす複郭型城館であるものの、文献資料による城館主の命脈や沿革は不明な点が多い。

4．その他の遺構

時代が不明な遺構は土坑2基、焼土7基、溝6条、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物跡4棟等である。外堀の南西側に位置する溝と掘立柱建物跡は、類例から時期が近世以降に推測される。

〈註・参考文献〉
(1) 相原康治　(1981)：「鳥海A遺跡」　『岩手県文化財調査報告書第59集』岩手県教育委員会
(2) 高橋信雄　(1982)：「岩手の土器」　岩手県立博物館
(3) 東海林隆幹　(1994)：「煤孫遺跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第196集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(4) 工藤利幸　(1993)：「八幡野Ⅱ遺跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第183集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(5) 中川重紀　(1991)：「八幡館跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第149集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(6) 伊東　格　(1992)：「上鬼柳Ⅲ遺跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第161集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(7) 高橋與右衛門・他　：「岩崎台地遺跡群」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994年発刊予定
(8) 昆野　靖　(1980)：「柳田館跡」　『岩手県文化財調査報告書第53集』岩手県教育委員会
(9) 昆野　靖　(1981)：「大瀬川館跡」　『岩手県文化財調査報告書第57集』岩手県教育委員会
(10) 高橋與右衛門　(1988)：「笹間館跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(11) 菊池利和・他　(1986)：「古館Ⅱ遺跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(12) 本堂寿一・他　(1983)：「丸子館跡」　『北上市立博物館研究報告書第4号』北上市教育委員会
(13) 石井　進・他　(1992)：「北の中世」　中世の里シンポジュウム実行委員会
(14) 本堂寿一　(1989)：「蛭川館跡」　『和賀町文化財調査報告書第24集』和賀町教育委員会
(15) 伊東　格　(1992)：「上反町遺跡」　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第181集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(16) 田中喜多美　(1973)：『岩手県史』　第2巻・第3巻（中世篇上・下）復刻版　岩手県
(17) 司東真雄　(1970)：『北上市史』　第2巻（古代2・中世）北上市

写真図版



遠景（東から）

近景（西から）

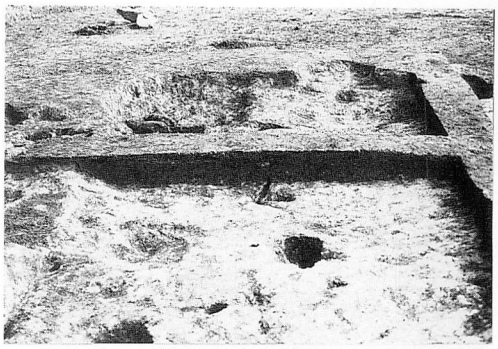
写真図版１　調査区遠・近景

遠景（南西から）

近景（西から）

写真図版２　調査区遠・近景

検出状況（北から）



埋土断面（北から）

カマド（西から）

遺物出土状況（北から）

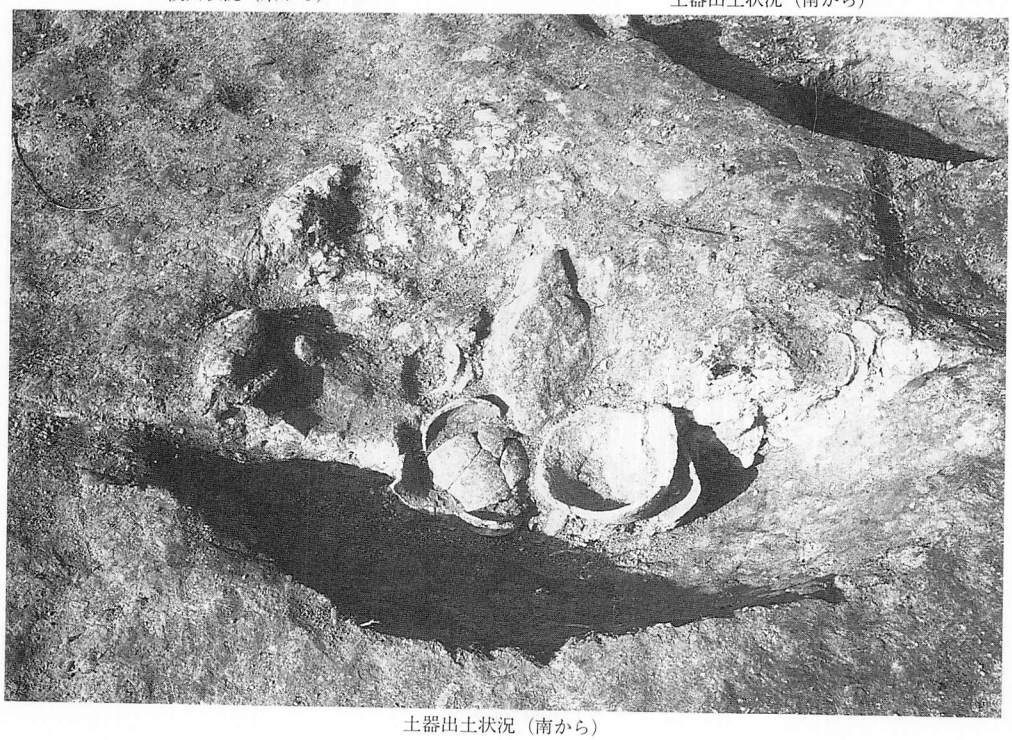
完掘（北から）

写真図版３　２号住居跡

検出状況（東から）

埋土断面（南から）

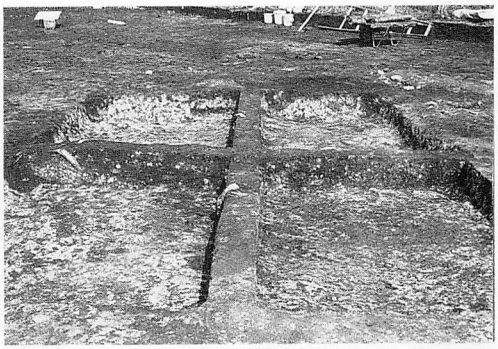
土器出土状況（南から）



土器出土状況（南から）

写真図版４　１号窯跡

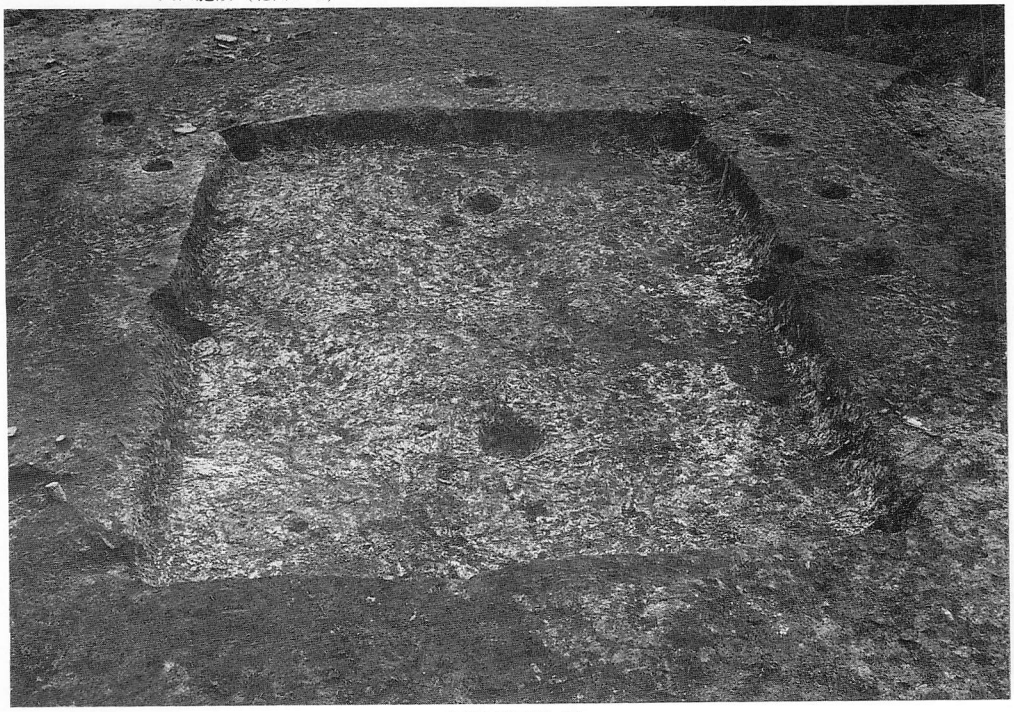
検出状況（北東から）



埋土断面（南東から）

入口施設（北西から）

柱穴完掘



完掘（北西から）

写真図版５　１号住居跡

調査前（南東から）

調査前（南東から）

写真図版６　１号堀（１）

調査前（南東から）

調査前（南東から）

写真図版７　１号堀（２）

調査前（北西から）

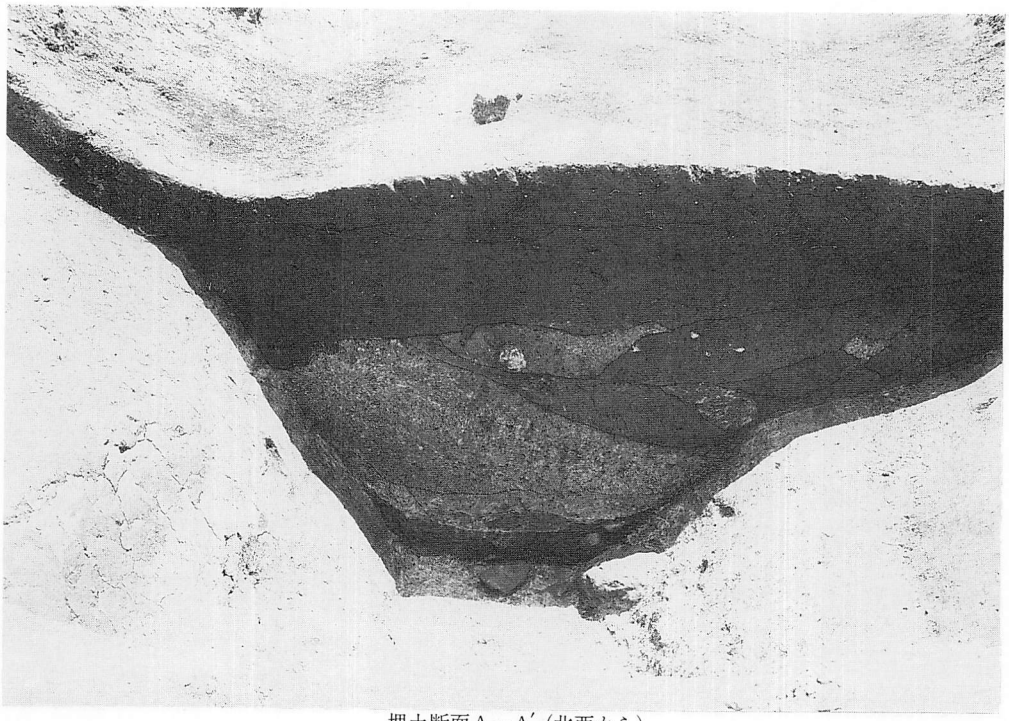
調査前（北西から）

写真図版８　１号堀（３）

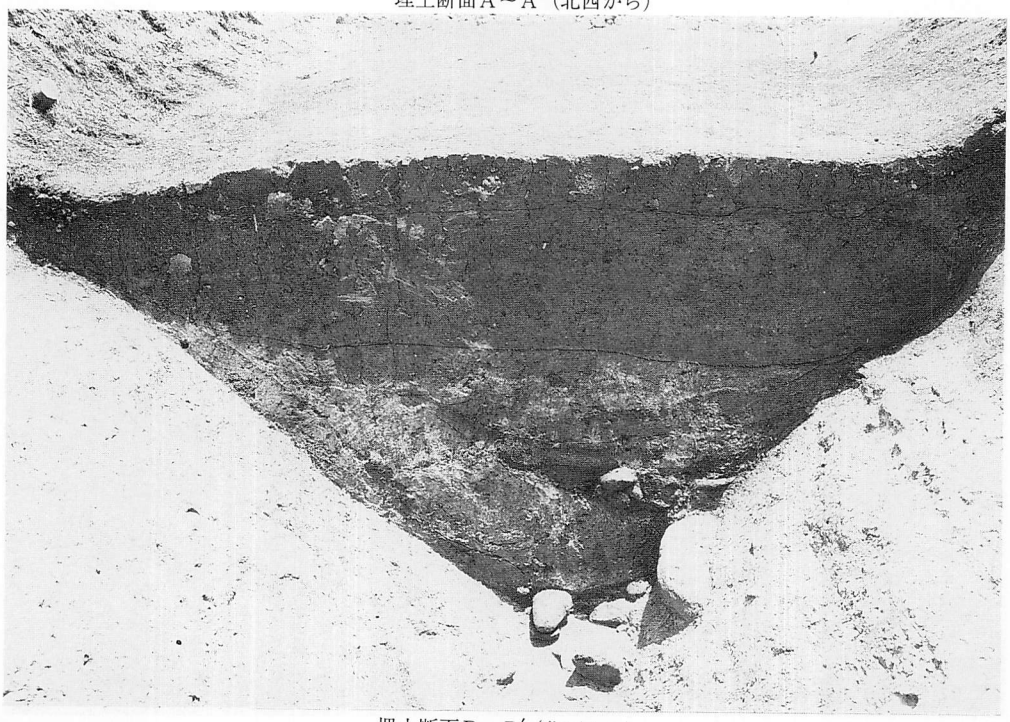
調査前（西から）

調査前（西から）

写真図版９　１号堀（４）

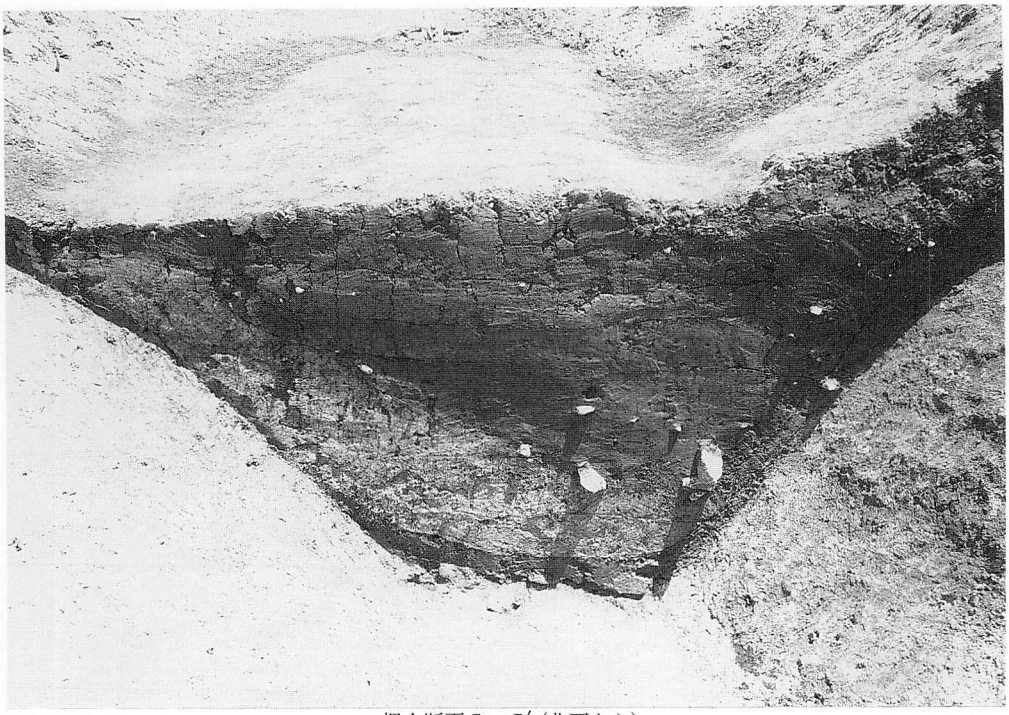


埋土断面Ａ～Ａ′（北西から）



埋土断面Ｂ～Ｂ′（北西から）

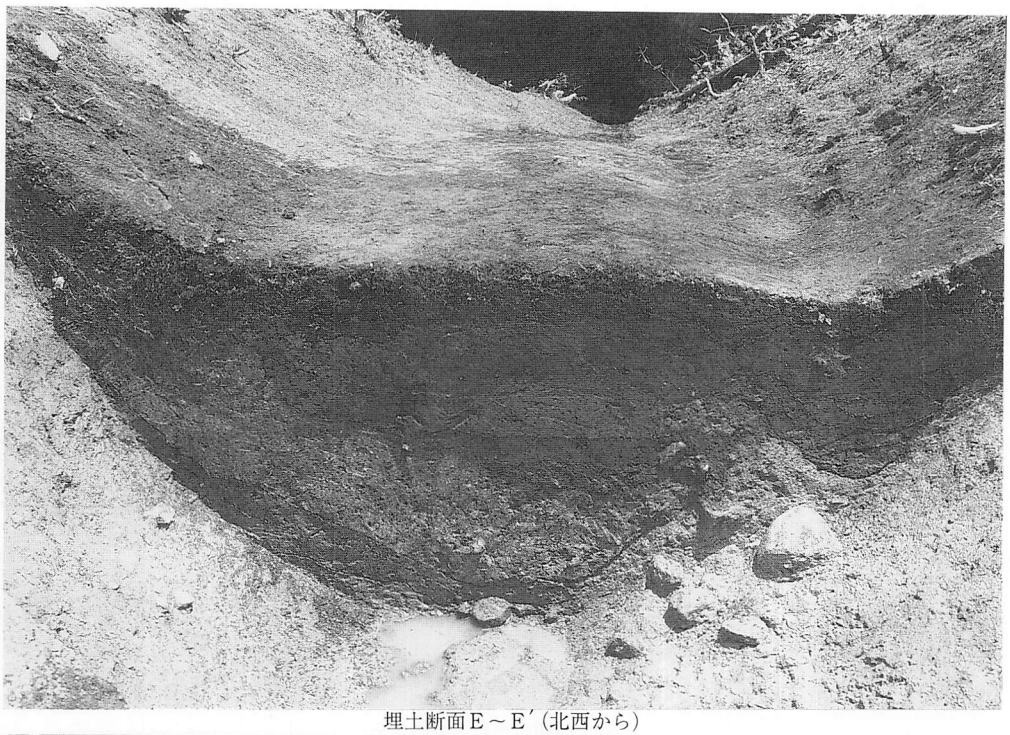
写真図版10　１号堀（５）



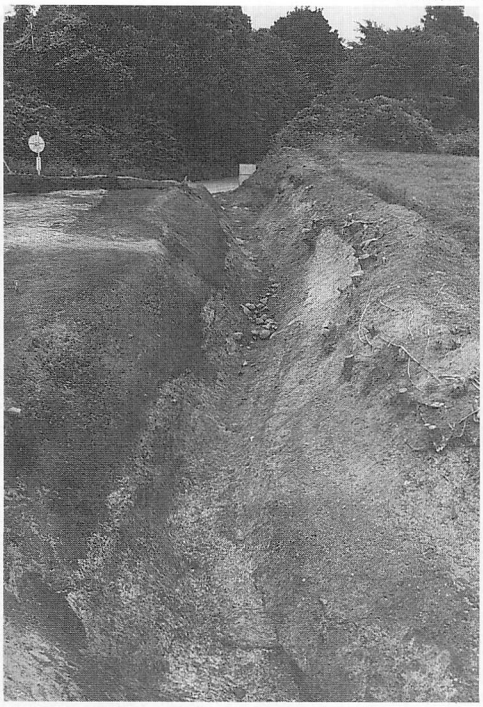
埋土断面C～C′（北西から）

埋土断面D～D′（北西から）

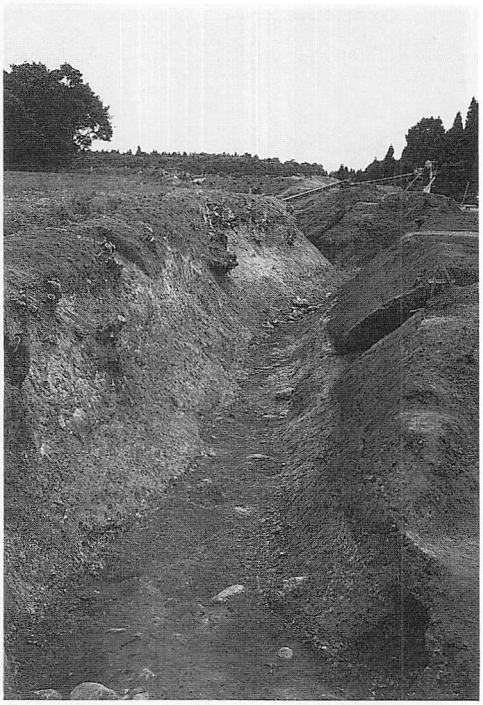
写真図版11　1号堀（6）



埋土断面E～E′（北西から）

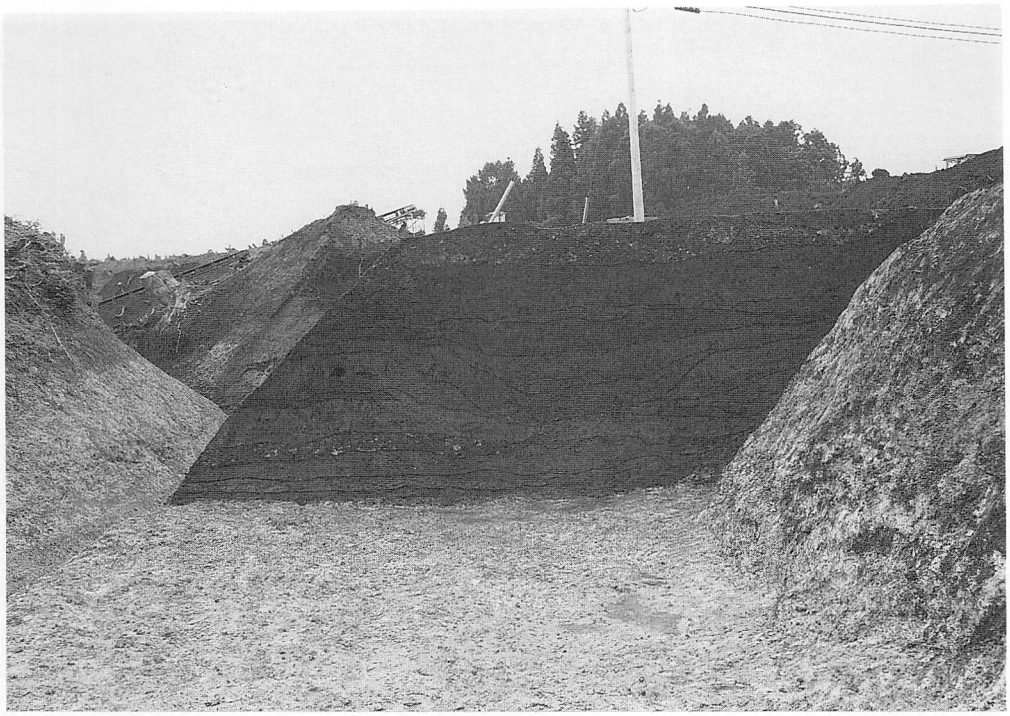


完掘（南東から）



完掘（北西から）

写真図版12　1号堀（7）



埋土断面（北西から）

埋土断面（北西から）

写真図版13　2号堀（1）

完掘（南東から）

完掘（北西から）

写真図版14　2号堀（2）

完掘（南東から）

完掘（南西から）

写真図版15　2号堀（3）

調査前（南から）

近景（北西から）

写真図版16　3号堀（1）

埋土断面（南から）

埋土断面（南から）

写真図版17　3号堀（2）

完掘（南から）

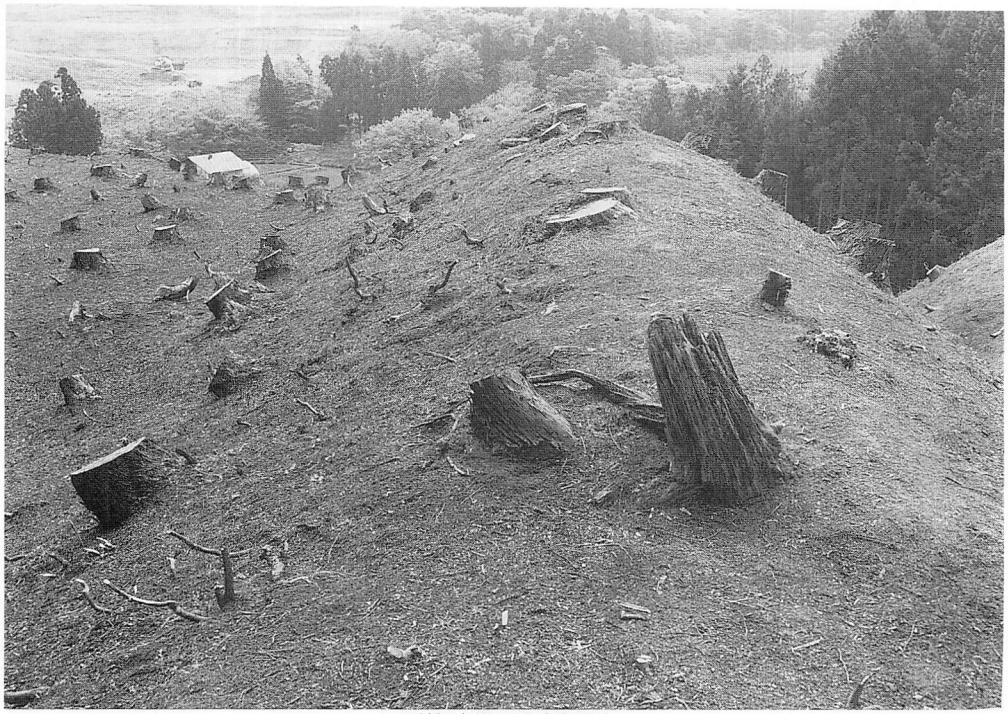
完掘（南から）

写真図版18　3号堀（3）

1・2号堀北側土塁（北西から）

1・2号堀北側土塁断面（西から）

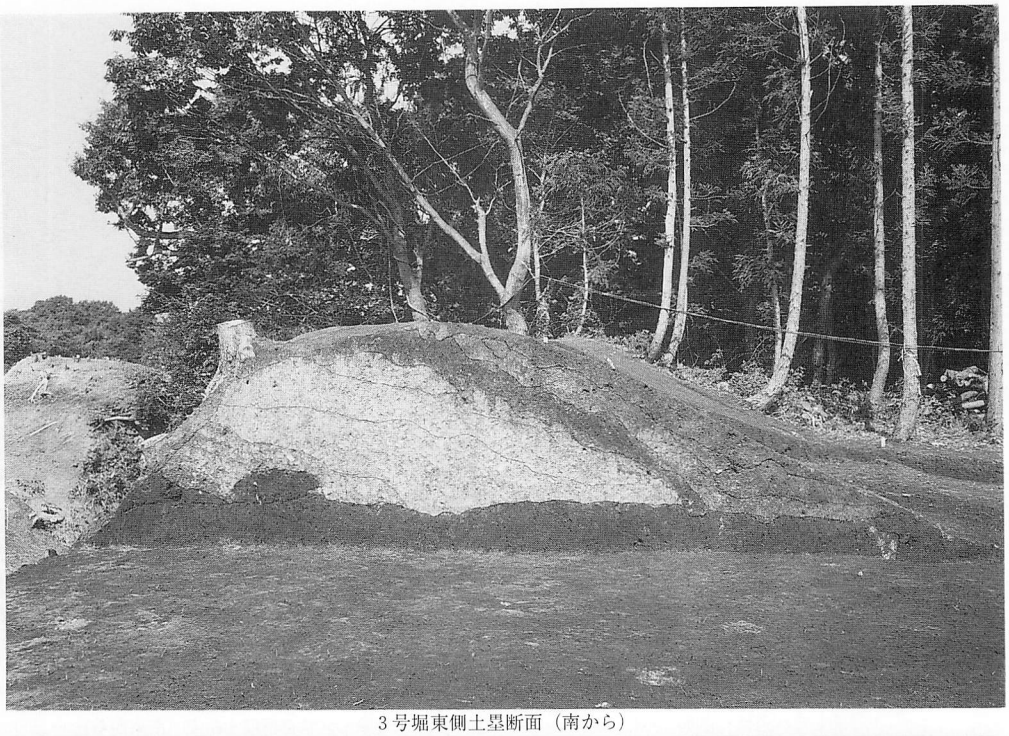
写真図版19　土塁（1）



3号堀東側土塁（北から）

3号堀東側土塁（南から）

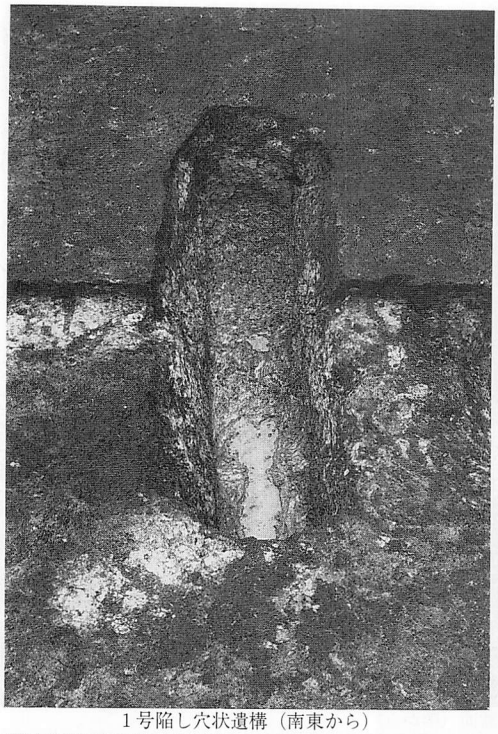
写真図版20　土塁（2）



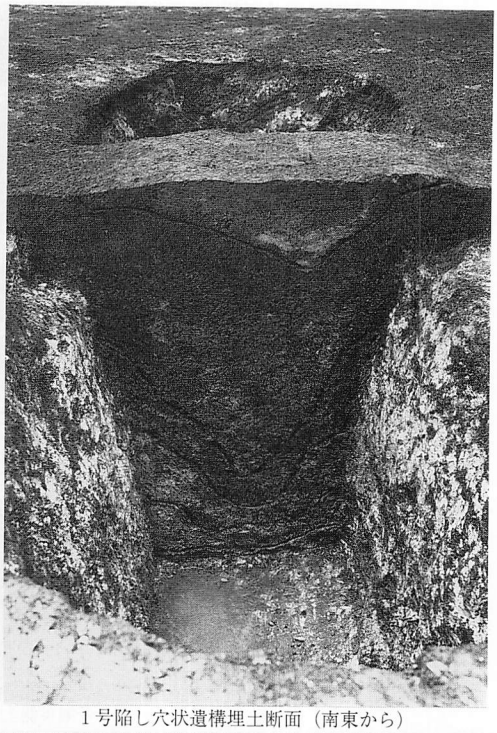
3号堀東側土塁断面（南から）

3号堀東側土塁断面（南から）

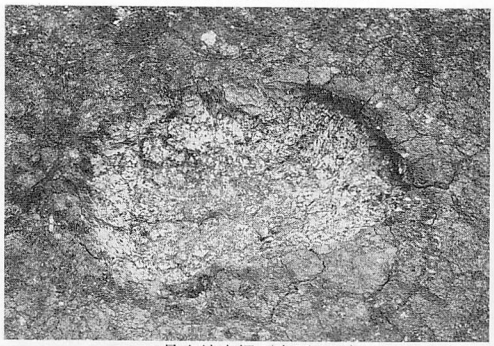
写真図版21　土塁（3）



1号陥し穴状遺構（南東から）

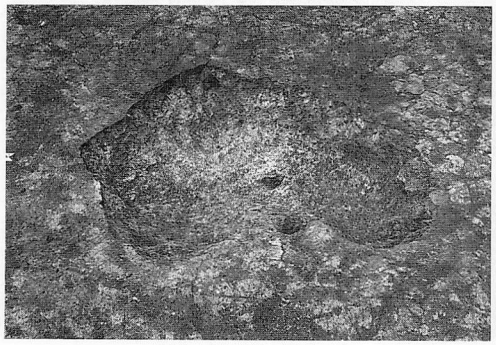


1号陥し穴状遺構埋土断面（南東から）

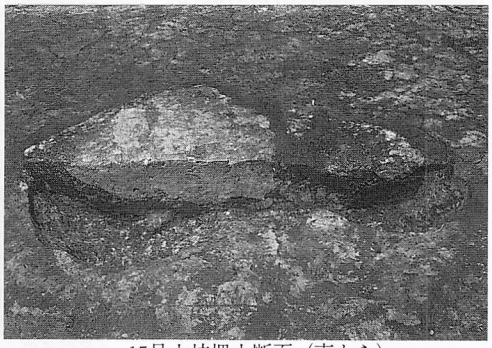


14号土坑完掘（南西から）

14号土坑埋土断面（南西から）

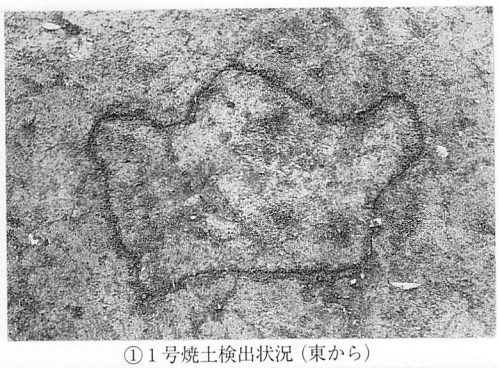


15号土坑完掘（東から）



15号土坑埋土断面（東から）

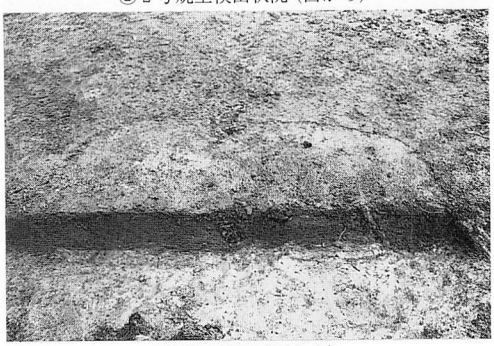
写真図版22　陥し穴状遺構・土坑



①1号焼土検出状況（東から）

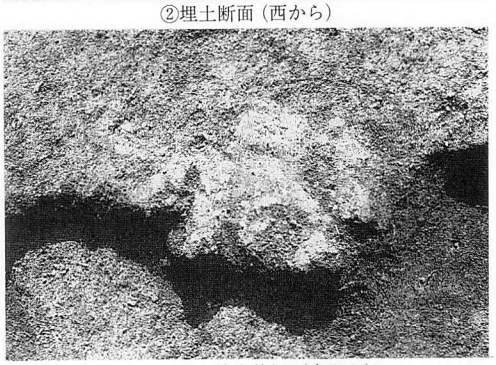
②2号焼土検出状況（西から）

①埋土断面（北西から）

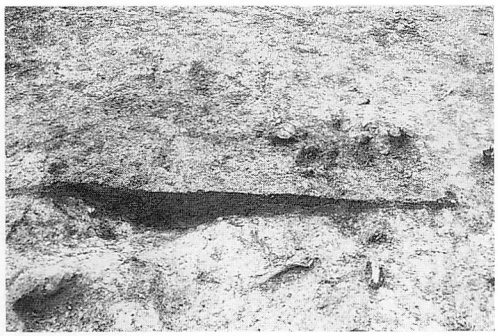


②埋土断面（西から）

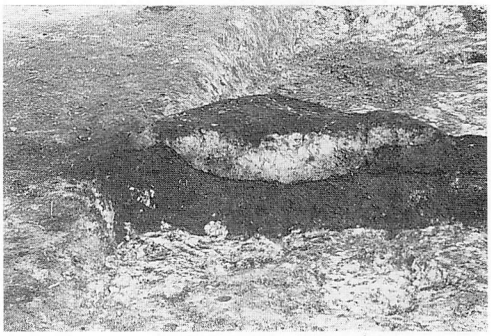
③3号焼土検出状況（南から）



④4号焼土検出状況（南から）

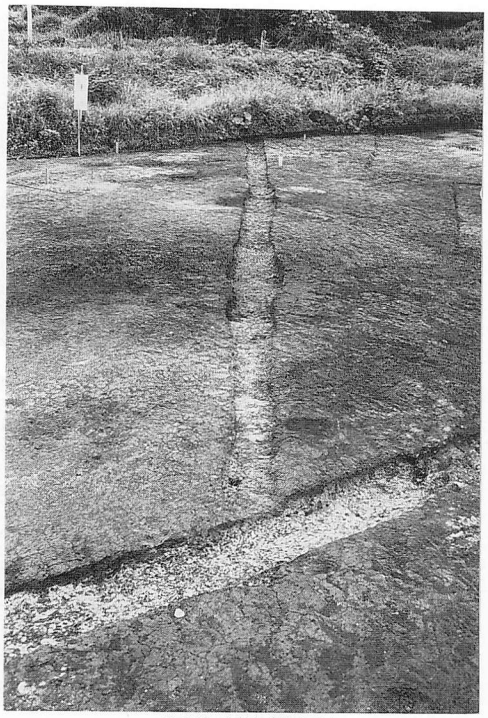


③埋土断面（南から）



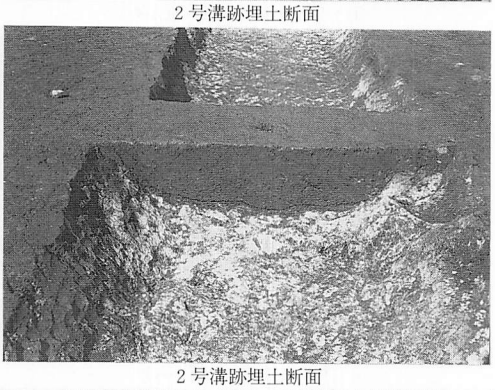
⑤7号焼土断面（南から）

写真図版23　焼土



1号溝跡完掘（南から）

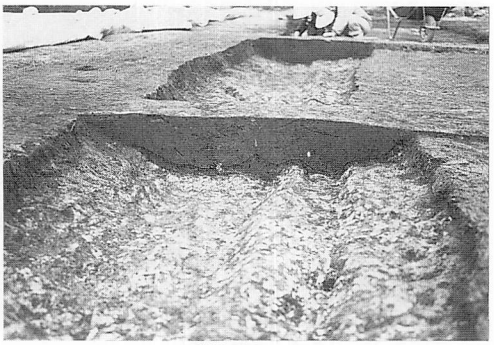
2号溝跡埋土断面



2号溝跡埋土断面

2・3・6号溝跡完掘（南西から）

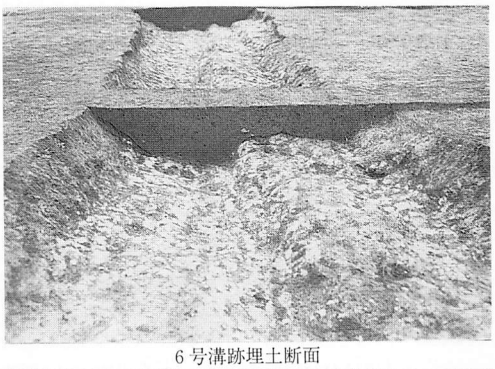
3号溝跡埋土断面



6号溝跡埋土断面

写真図版24　溝跡（1）

4 号溝跡完掘（南西から）



6 号溝跡埋土断面

4 号溝跡埋土断面

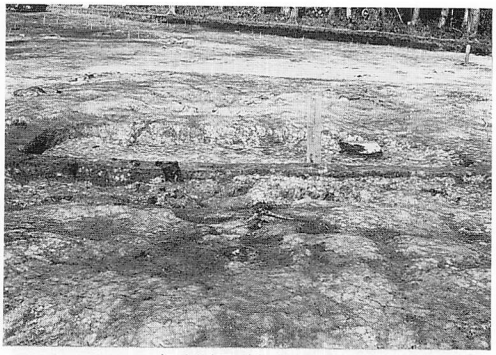
5 号溝跡完掘（南東から）

4 号溝跡埋土断面

5 号溝跡埋土断面

写真図版25　溝跡（2）

1号竪穴状遺構検出状況（北東から）



埋土断面（南東から）

完掘（北東から）

2号竪穴状遺構検出状況（西から）

埋土断面（東から）

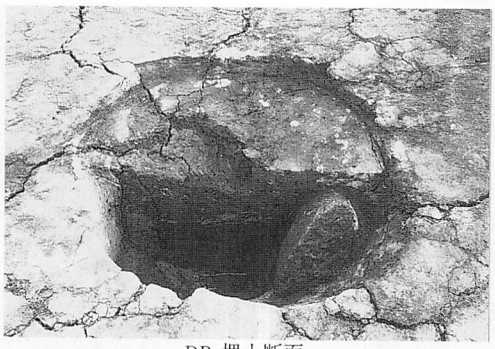
写真図版26　竪穴状遺構（1）

2号竪穴状遺構完掘（北から）

3号竪穴状遺構完掘（南東から）

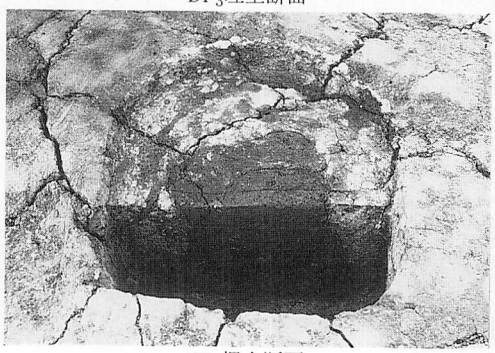
写真図版27　竪穴状遺構（2）

完掘（南から）



DP_3埋土断面

DP_4埋土断面



BP_4埋土断面

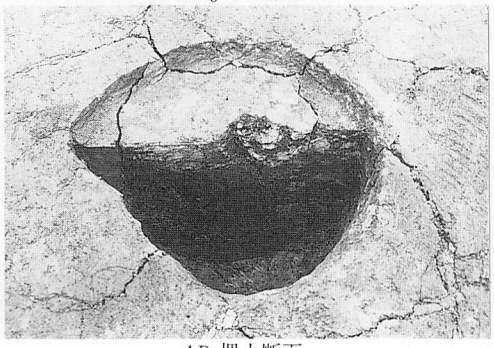
BP_2埋土断面

写真図版28　1号掘立柱建物跡

完掘（南東から）

BP_3埋土断面

CP_3埋土断面



AP_2埋土断面

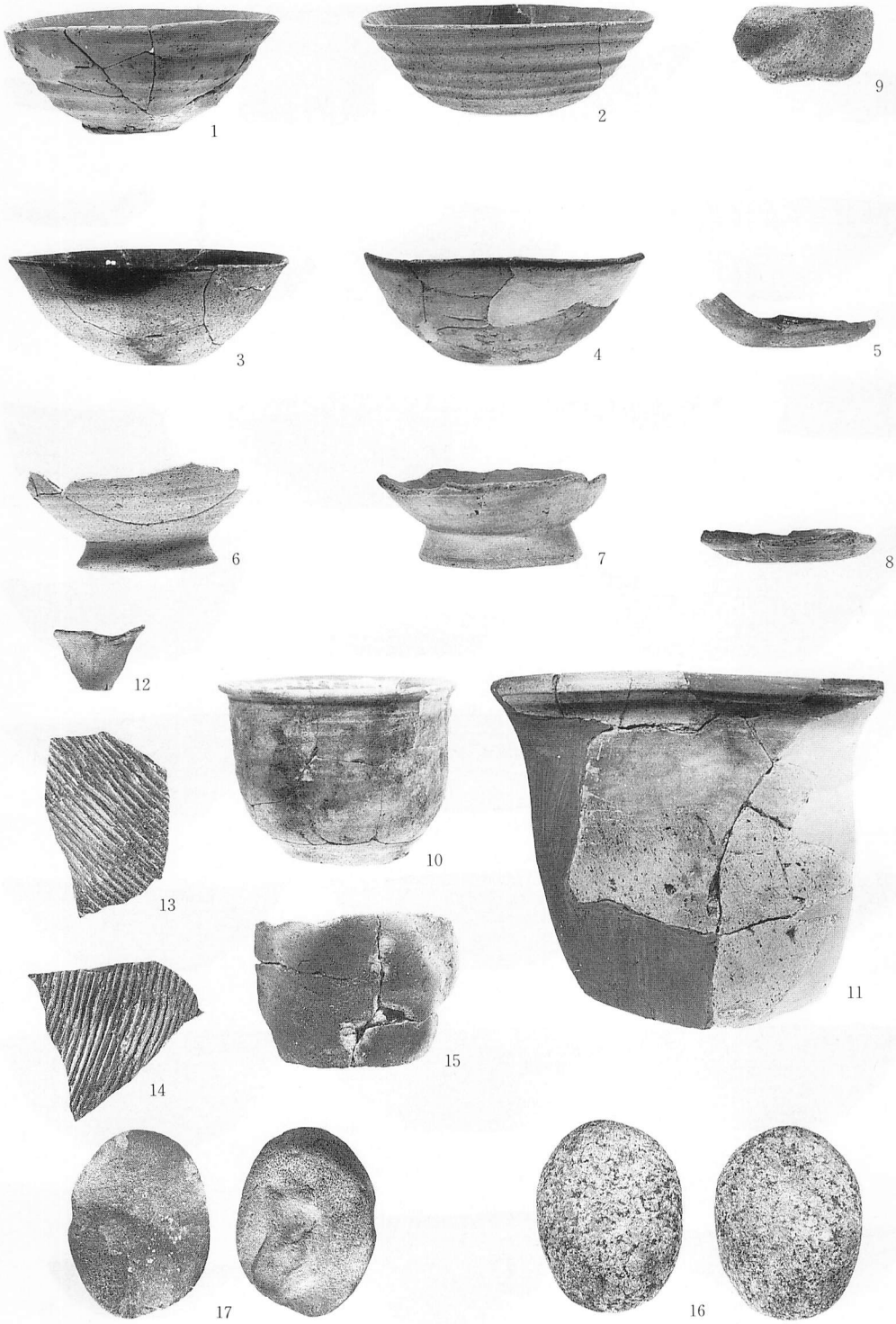
CP_5埋土断面

写真図版29　2号掘立柱建物跡

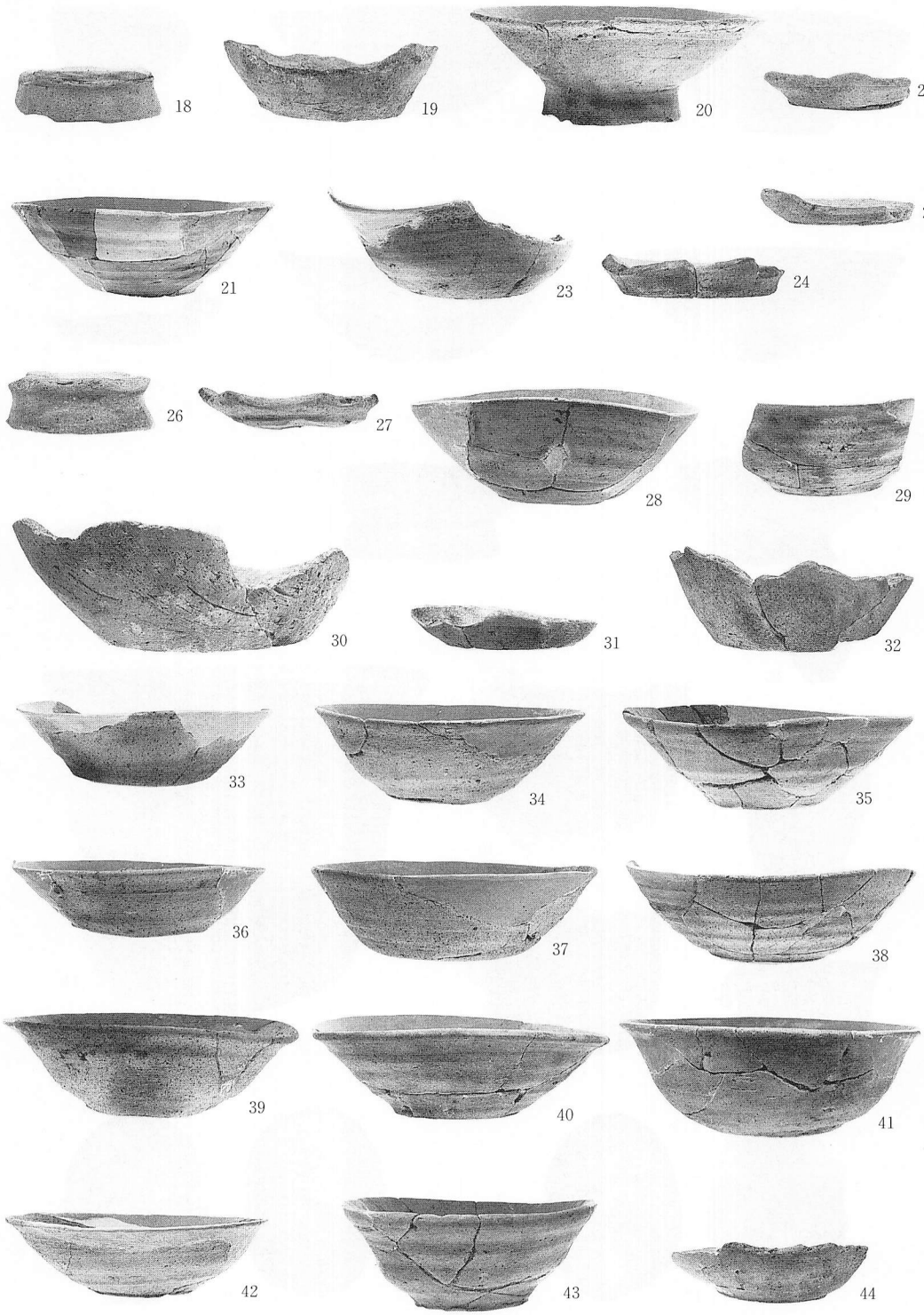
3号掘立柱建物跡完掘（南から）

4号掘立建物跡完掘（東南東から）

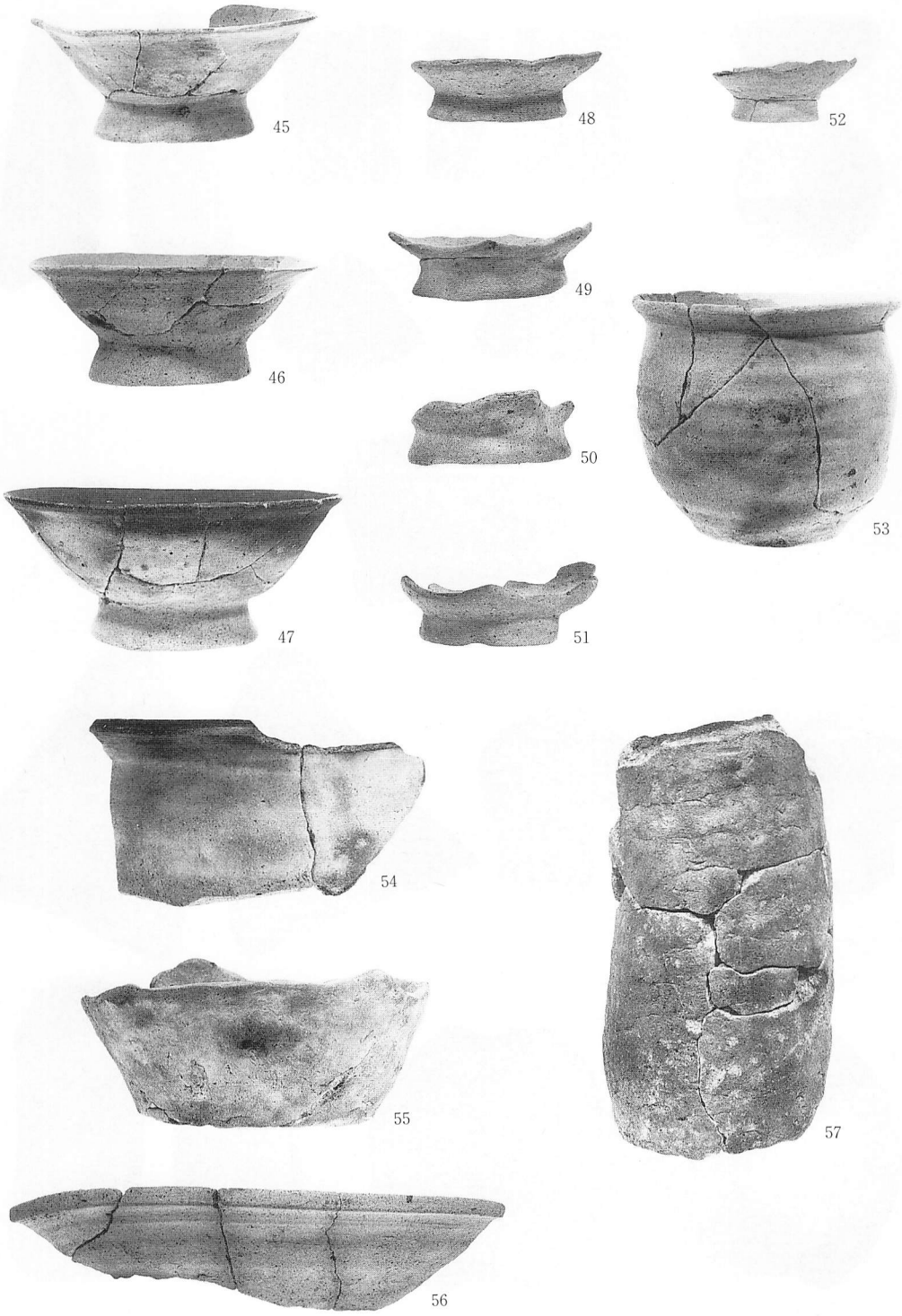
写真図版30　3・4号掘立柱建物跡



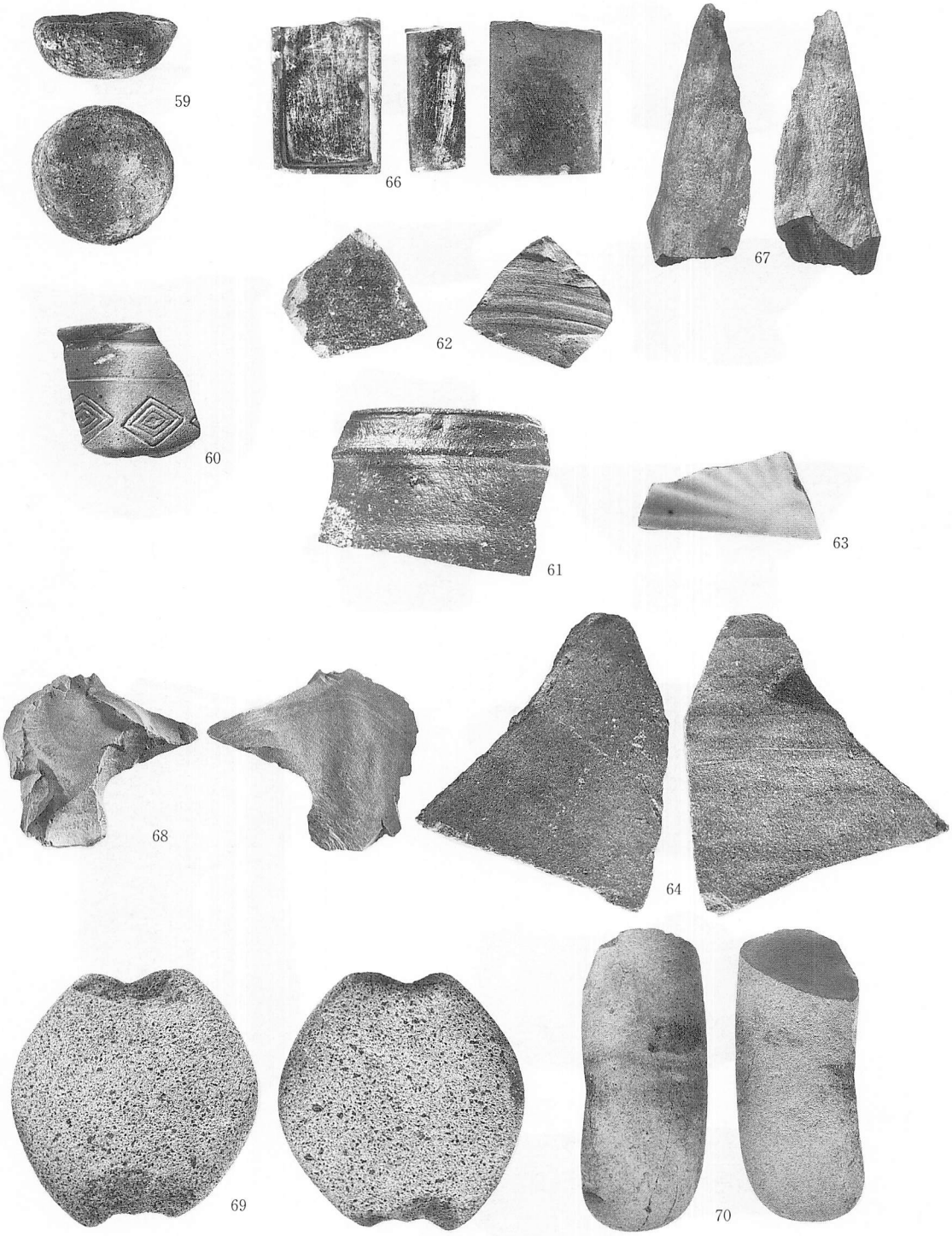
写真図版31　2号住居跡出土遺物



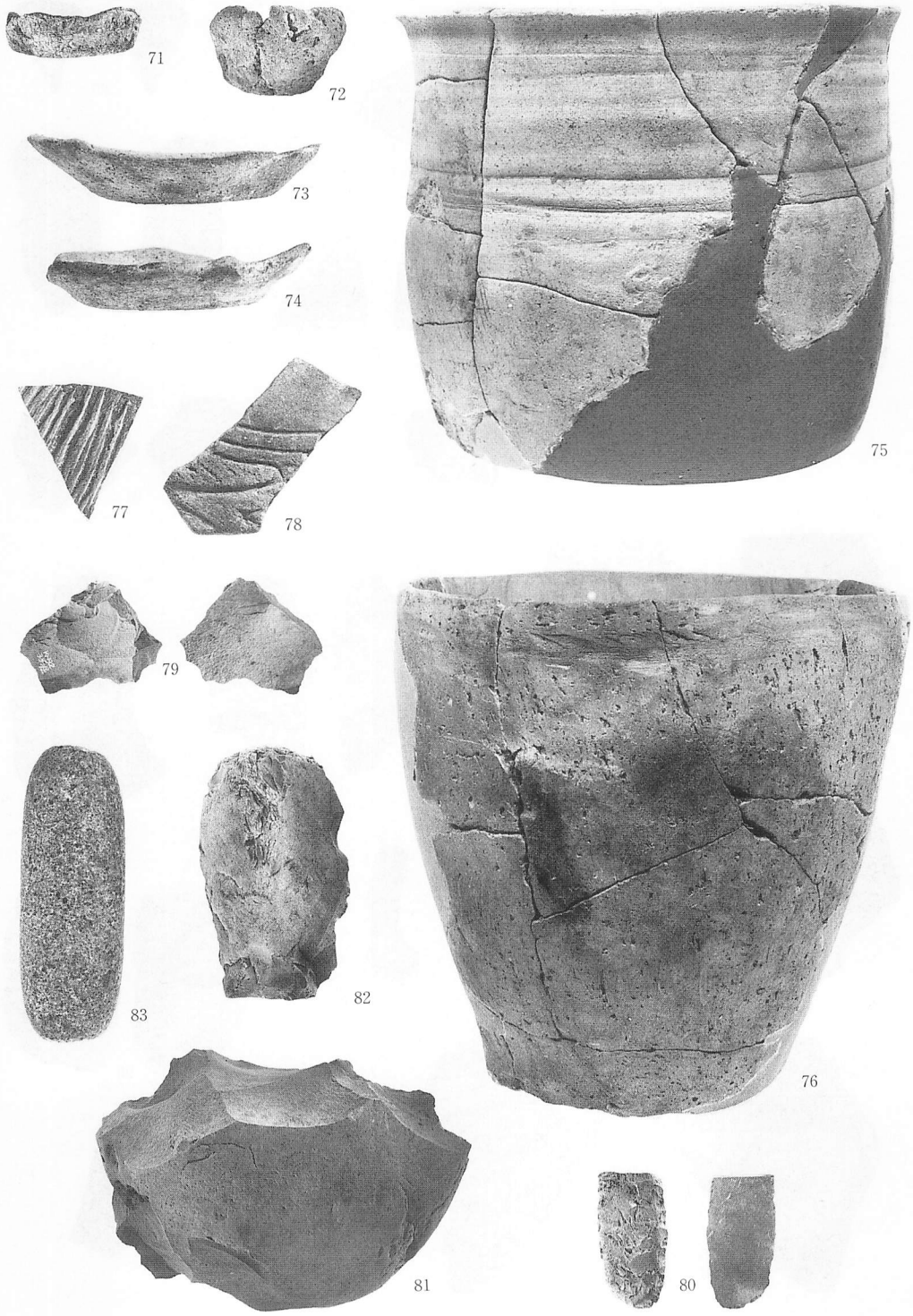
写真図版32　土坑・1号窯跡出土遺物（1）



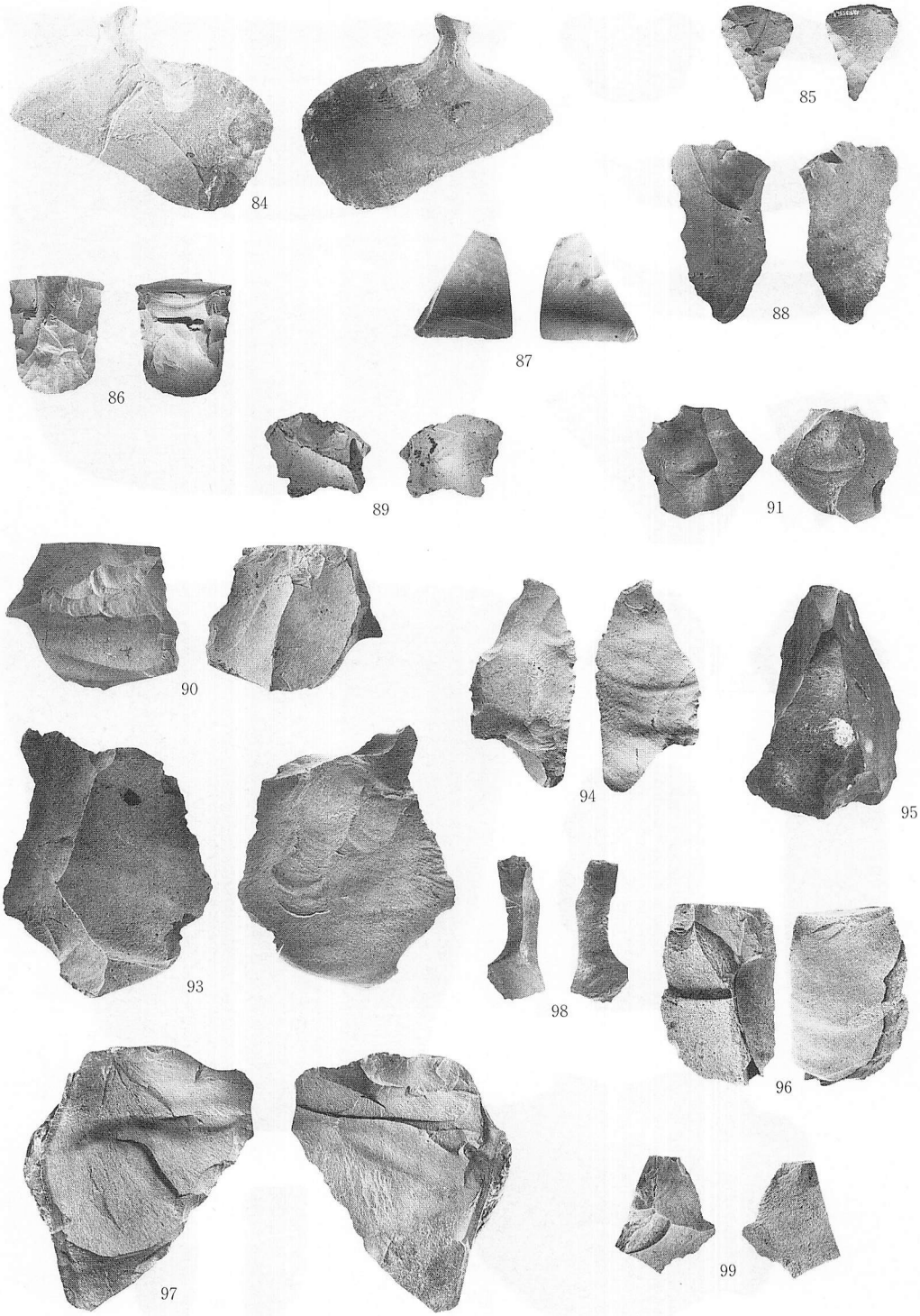
写真図版33　1号窯跡出土遺物(2)



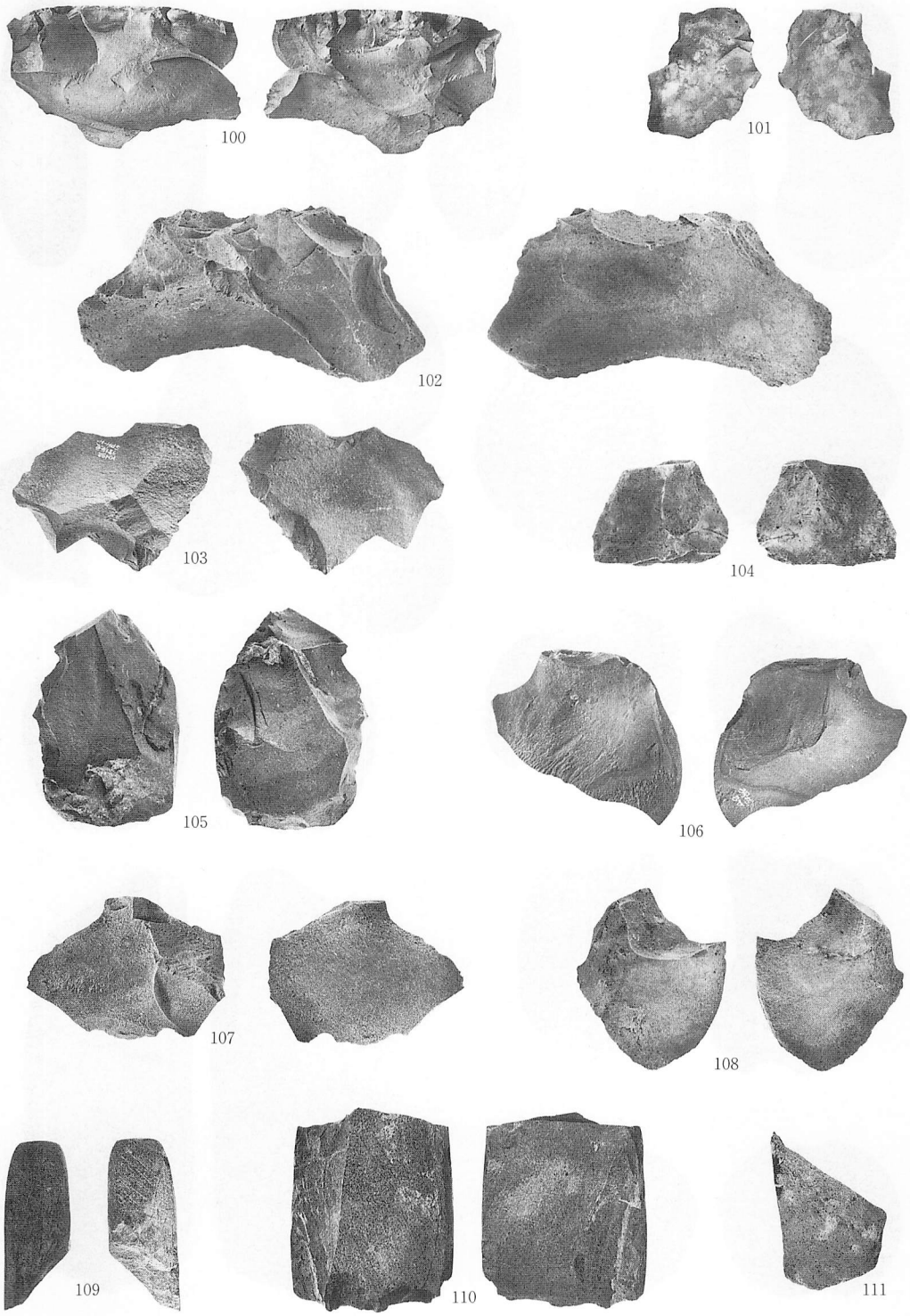
写真図版34　1号堀出土遺物



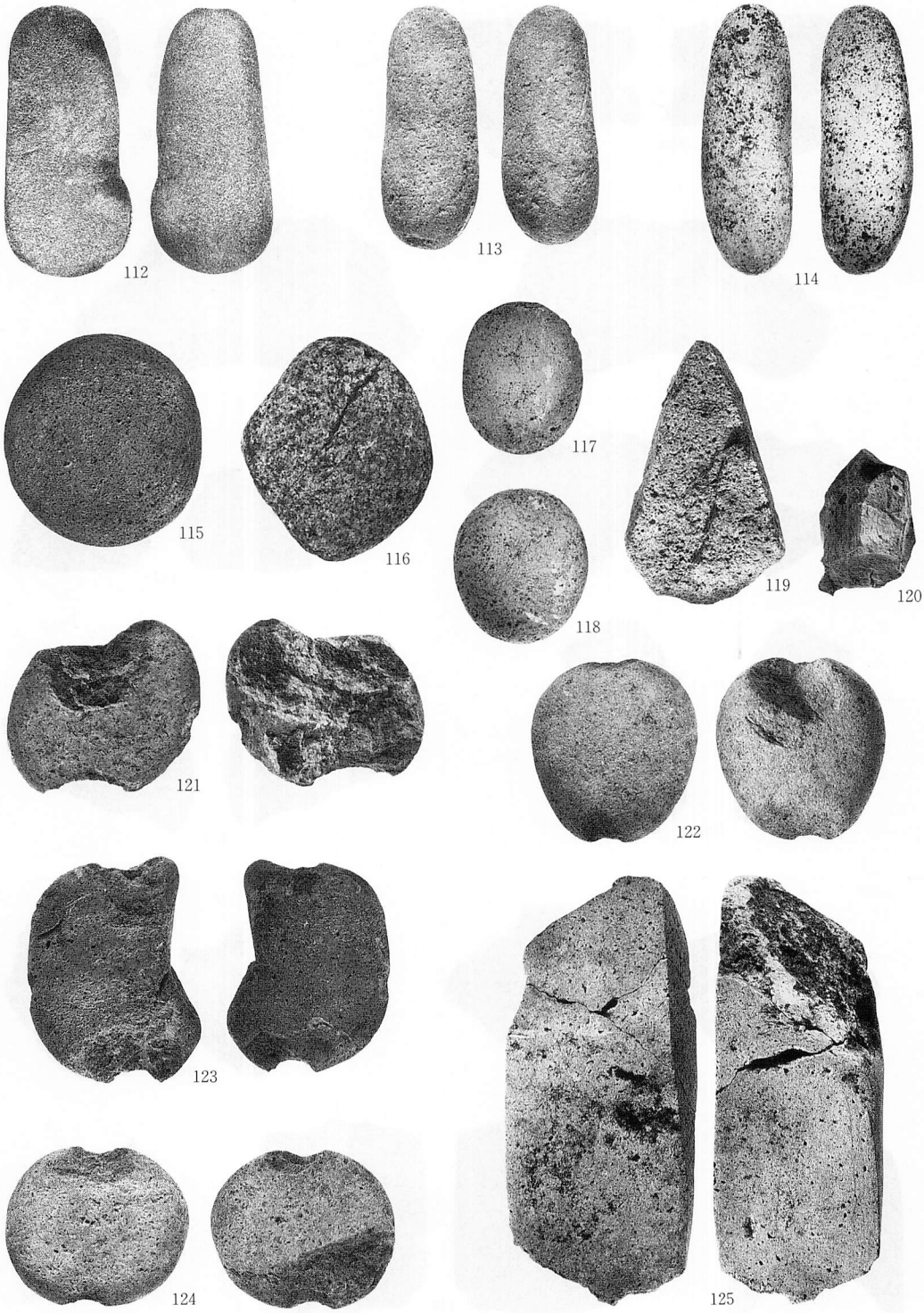
写真図版35　3号堀・溝跡・2号堀立柱建物跡出土遺物



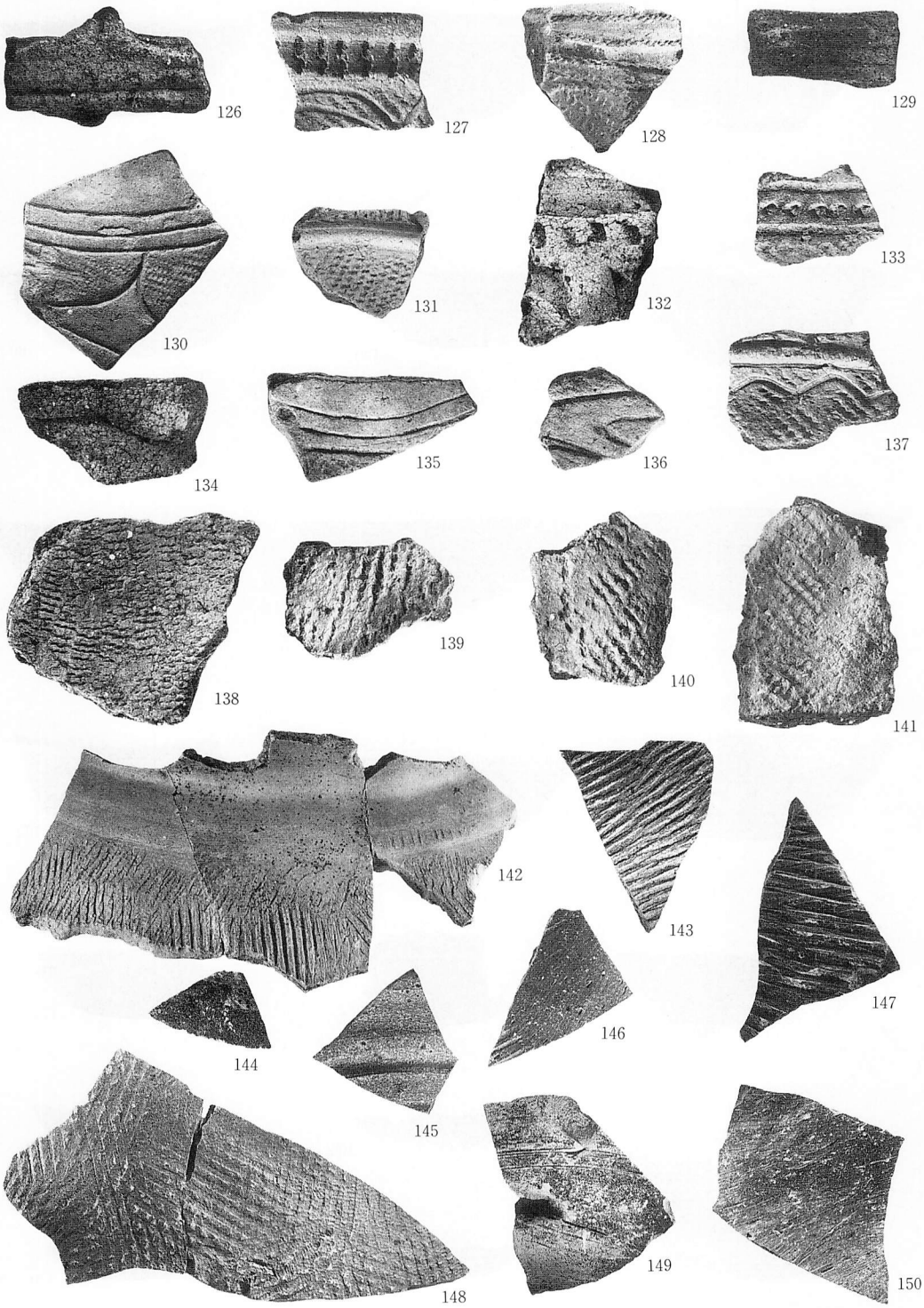
写真図版36　遺構外出土遺物（1）



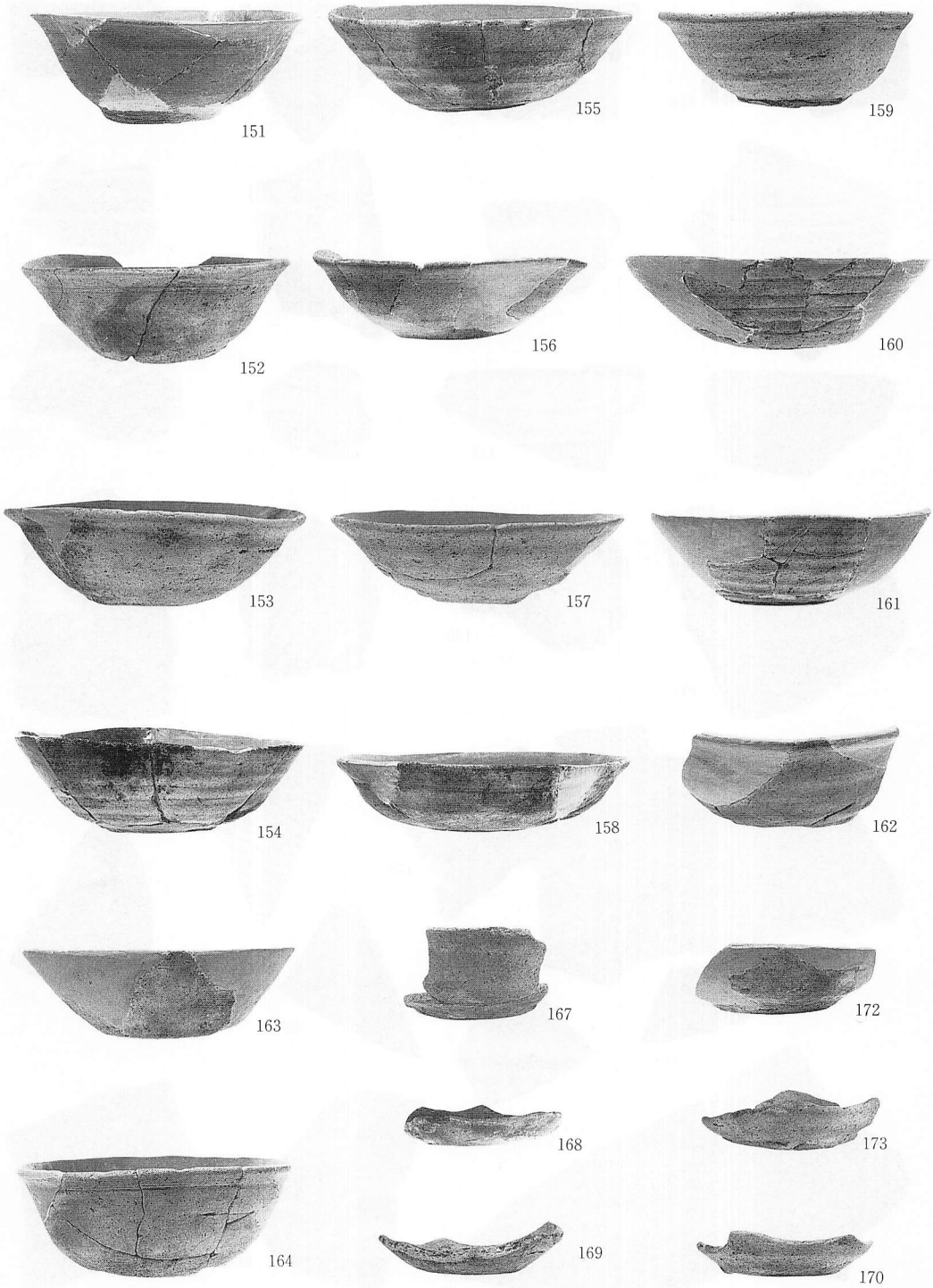
写真図版37　遺構外出土遺物（２）



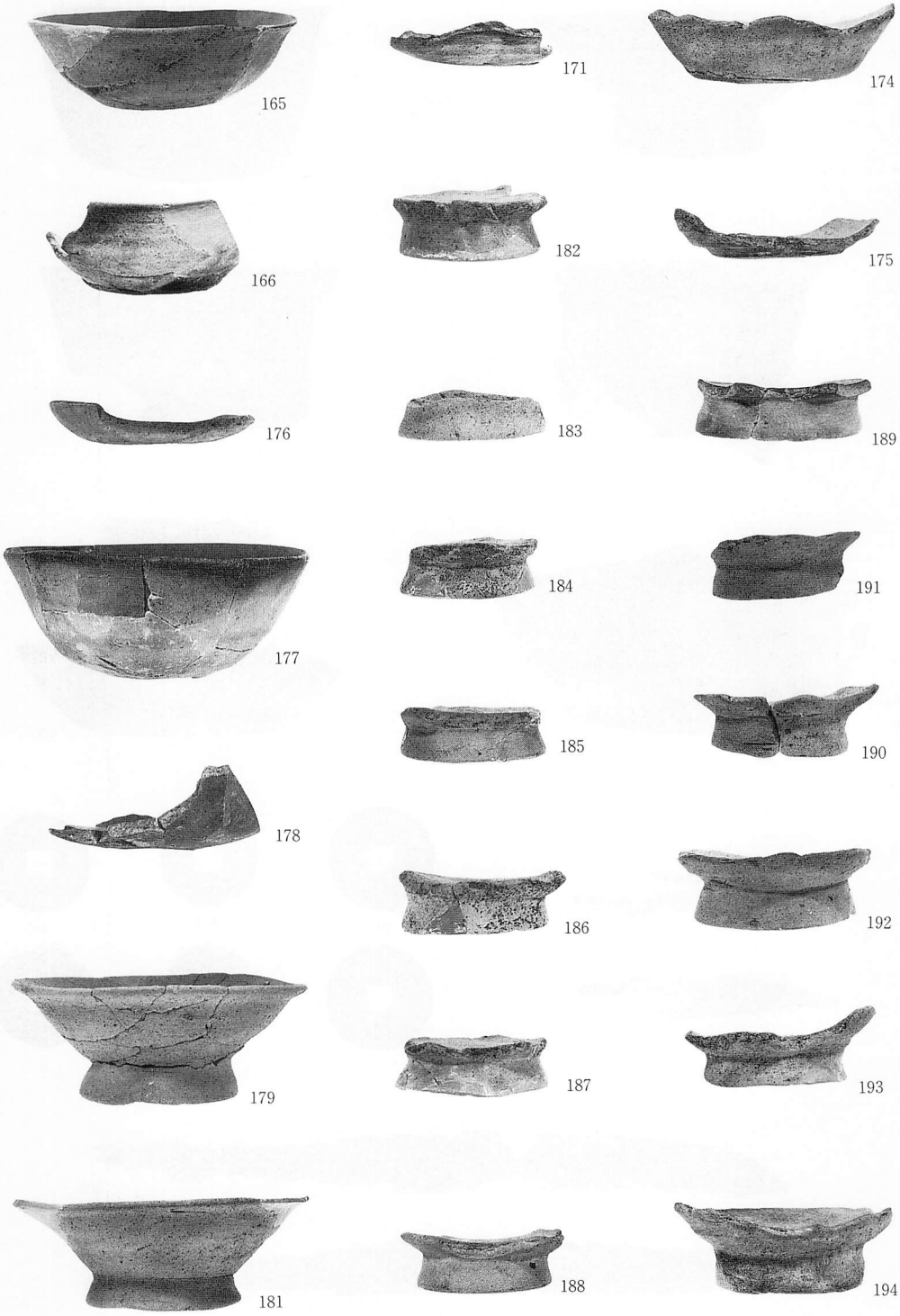
写真図版38　遺構外出土遺物（3）



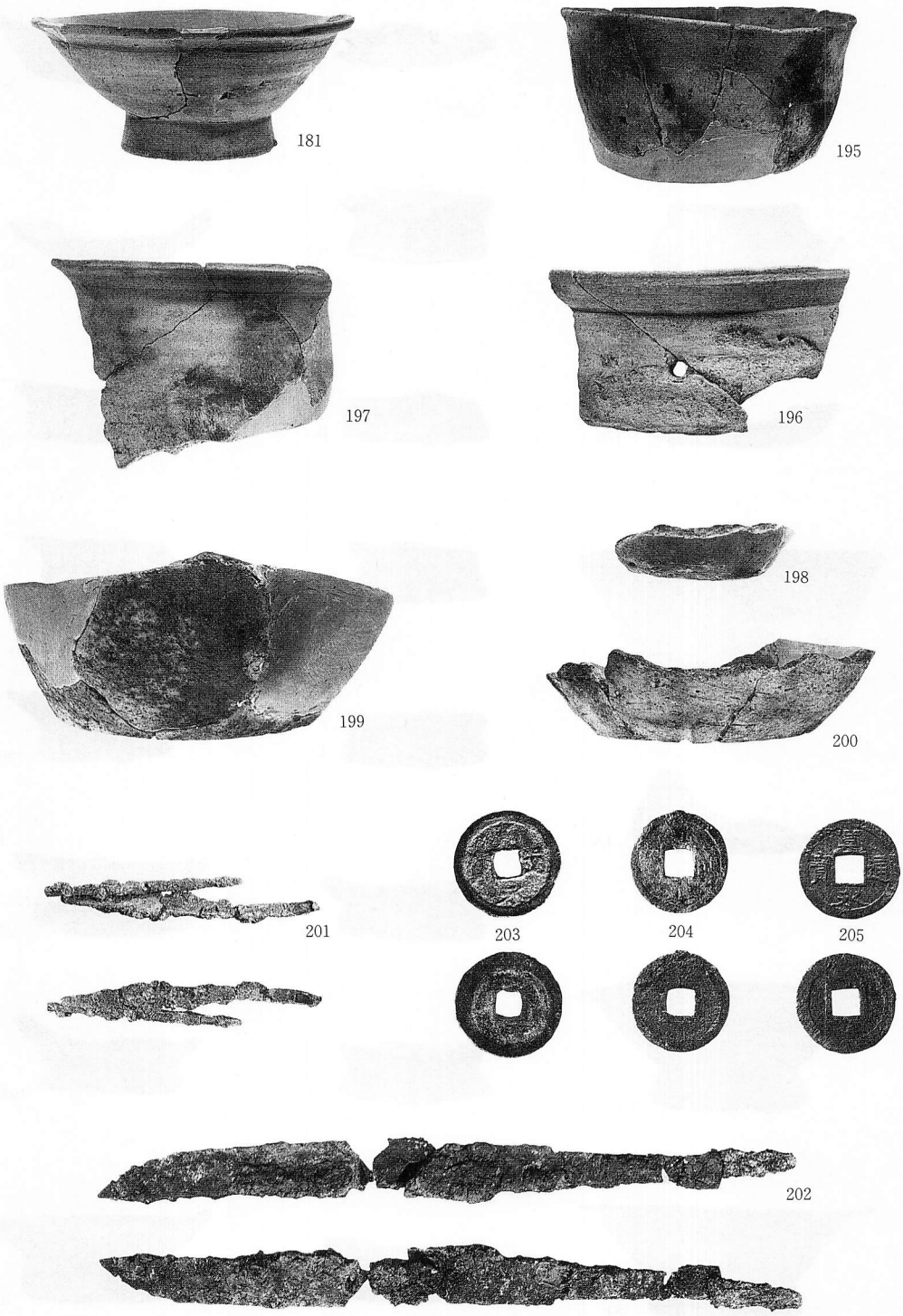
写真図版39　遺構外出土遺物（４）



写真図版40　遺構外出土遺物（５）



写真図版41　遺構外出土遺物（6）



写真図版42　遺構外出土遺物（７）

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	高橋重實
副所長	高橋敬明

〔管理課〕

管理課長	澤田寛
主事	佐藤理
〃	久保田幸恵

〔調査課〕

調査課長	鈴木惠治
課長補佐	三浦謙一
〃	高橋與右衛門
主任文化財専門調査員	菊池強一
〃	渡辺洋一
〃	高橋正之
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門調査員	斎藤實
〃	千葉孝雄
〃	川村均
〃	鈴木貞行
〃	伊東格
〃	吉田充
〃	斎藤邦雄
〃	神敏明
〃	高橋一浩
〃	小原眞一
〃	酒井宗孝
〃	鎌田勉
〃	小山内透

〔資料課〕

資料課長	松村義夫
主任文化財専門調査員	駒嶺高幸
嘱託	吉田十次
〃	野崎他夫
文化財専門調査員	松本建速
〃	笹平克子
〃	花坂政博
〃	佐々木務
〃	金子昭彦
〃	濱田宏
〃	阿部勝則
〃	星雅之
〃	羽柴直人
〃	高木晃
〃	村上拓
期限付専門職員	鎌田精造
〃	柳田磨
〃	千葉悟
〃	高橋英樹
〃	溜浩二郎
〃	佐藤修一
〃	稲垣雅宏
〃	田畑博之
〃	八重座のり子
〃	杉沢昭太郎
〃	平澤祐子

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第197集

観音館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷　平成6年3月25日

発行　平成6年3月30日

発行　(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県盛岡市下飯岡11－185
☎ (0196) 38－9001

印刷　株式会社 吉田印刷
〒020　盛岡市名須川町23番27号
☎ (0196) 25－2323

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	高橋重實
副所長	高橋敬明
〔管理課〕	
管理課長	澤田寛
主事	佐藤理
〃	久保田幸恵
〔調査課〕	
調査課長	鈴木惠治
課長補佐	三浦謙一
〃	高橋與右衛門
主任文化財専門調査員	菊池強一
〃	渡辺洋一
〃	高橋正之
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門調査員	斎藤實
〃	千葉孝雄
〃	川村均
〃	鈴木貞行
〃	伊東格
〃	吉田充
〃	斎藤邦雄
〃	神敏明
〃	高橋一浩
〃	小原眞一
〃	酒井宗孝
〃	鎌田勉
〃	小山内透
〔資料課〕	
資料課長	松村義夫
主任文化財専門調査員	駒嶺高幸

嘱託	吉田十次
〃	野崎他夫
文化財専門調査員	松本建速
〃	笹平克子
〃	花坂政博
〃	佐々木務
〃	金子昭彦
〃	濱田宏
〃	阿部勝則
〃	星雅之
〃	羽柴直人
〃	高木晃
〃	村上拓
期限付専門職員	鎌田精造
〃	柳田磨
〃	千葉悟
〃	高橋英樹
〃	溜浩二郎
〃	佐藤修一
〃	稲垣雅宏
〃	田畑博之
〃	八重座のり子
〃	杉沢昭太郎
〃	平澤祐子

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第197集

観音館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷　平成6年3月25日

発行　平成6年3月30日

発 行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県盛岡市下飯岡11－185
☎（0196）38－9001

印 刷　株式会社 吉田印刷
〒020　盛岡市名須川町23番27号
☎（0196）25－2323

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994